

論文

阿仁銅山麓における山村社会の森林資源管理  
— 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻 —

渡部圭一<sup>1)</sup>・芳賀和樹<sup>2)</sup>・福田 恵<sup>3)</sup>・湯澤規子<sup>4)</sup>・加藤衛弘<sup>5)†</sup>

1) 滋賀県立琵琶湖博物館

2) 日本学術振興会特別研究員 PD (東京農工大学大学院農学研究院)

3) 東京農工大学農学部地域生態システム学

4) 筑波大学生命環境系

5) 筑波大学生命環境系

Forest Resources Management by the Local Communities  
at the Foot of Ani Copper Mine:  
An Introduction and Translation of *Minatoke Monjo* Archives in Akita Domain

Keiichi WATANABE<sup>1)</sup>, Kazuki HAGA<sup>2)</sup>, Satoshi FUKUDA<sup>3)</sup>,  
Noriko YUZAWA<sup>4)</sup> and Morihito KATO<sup>5)†</sup>

1) Lake Biwa Museum

2) Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science

3) Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology

4) Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

5) Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

This paper aims to provide the reprinting of *Minatoke Monjo* (湊家文書, Minato family archives) with some bibliographical introduction from the viewpoint of an environmental history.

Every local community in Akita Domain consisted of a *hongo* (本郷), a single central village or a hub village, and several *shigos* (枝郷), branch villages under the administration of the *hongo*. The headman of the *hongo* village was called the *kimoiri* (肝煎).

Since 2010 we have made an investigation into the *Minatoke Monjo* archives which has remained at the Minato's family estate. As the *kimoiri* of Arase village (present Ani-arase district, Kita-akita City, Akita Prefecture) they have preserved the documents since the early modern times. In this thesis we introduce about 40 important documents from the *Minatoke Monjo* to examine how the *kimoiri* played a social role.

First, according to these documents, the Minato family played an important administrative role as the *kimoiri* from the early 18th century to the 19th century. They were in charge of not only the daily management of their own *hongo* (hub) village but also the comprehensive governance of more than 10 *shigo* (branch) villages.

Second, the archives show that people around the Ani Copper Mine competitively utilized the surrounding forest resources (e.g. production of wood charcoal for the copper mines and the collection of grass used for feed), which consequently caused repeated conflicts concerning the forests' borders and ownership. We want to clarify that the *kimoiri* often played an essential role in reconciling the disputes among the *shigo* villages to stabilize the use of the natural resources.

**Keywords:** Forest resources management, Ani Copper Mine, *hongo* and *shigos*, *kimoiri*, Akita Domain

† kato.morihito.ft@u.tsukuba.ac.jp

## 1. はじめに

江戸時代の秋田藩領の地域社会は、それぞれ中心となる一つの本郷の村と、その管理下におかれた複数の枝郷とで構成されていたことが知られている。このような村々の広域的な結びつきは、北東北地方に特有の地域自治のありかたを示すと同時に、地域の資源管理や紛争処理の主体としても重要な意義をもつことが予想されるものの、これまで実証的な検討がほとんど行われてこなかった。

私たちは、2010年から、阿仁銅山の西麓に位置する荒瀬村（現在の秋田県北秋田市阿仁荒瀬地区）の旧肝煎家に遺された古文書の整理と分析を進めている。本稿では、このうちおよそ40点の重要文書を翻刻し、さらに解題として、本郷と枝郷の関係がどのように構成され、近世の地域社会の行政と森林資源管理に関わっていたのかを考察することにした。

## 2. 秋田県北秋田市調査の経緯

### 2.1 国有林史研究から国有林地域史研究へ

私たちの研究は、2001年からの国有林史料の保存を目的としたその整理・目録化に始まった。現在日本の国有林の位置については、国土面積約3800万haのうち、3分の2にあたる約2500万haが林野であり、林野のうち31%にあたる767万haが国有林である。歴史的に成立過程を異にする北海道306万haと沖縄県3万haを除くと、その他の都府県には458万haが存在する。そのうち国有林面積の上位15県は東北、北関東、中部、南四国、南九州にあり、15県の合計は380万ha、沖縄県以外の都府県国有林の83%を占める。その存在箇所は大きく偏在していることがわかる<sup>(注1)</sup>。

その国有林史料の保存を目的にしたのは、国有林経営の危機が続く中で、国有林の管理・経営組織である営林局（現森林管理局）・営林署（現森林管理署）の統廃合が進み出したからである。関連機関の整理が進めば、当然それらが保存する国有林に関する重要な史料の多くは廃棄を免れない。そこで私たちは徳川林政史研究所と協力して、本州・四国・九州の全営林局（現森林管理局）を訪問して史料の現状を把握し、特に近代史料のまとまっていた青森、秋田、長野、名古屋、熊本の各営林局史料の目録化を進めた。私たち筑波大学を中心とするグループが東北を、長野以西を徳川林

政史研究所が担当して、2007年には青森、秋田、長野、名古屋について歴史資料の目録を完成させ、熊本はその途上にあった。この年内閣の判断によって国有林の歴史資料は国立公文書館への移管が決まり、2009年から公開されている<sup>(注2)</sup>。

私たちが目録を作成した東北森林管理局（旧秋田営林局・旧青森営林局）には、国有林の前身に当たる藩営林を中心とした近世の林政史料も充実しており、秋田県公文書館所蔵の藩政・行政文書も加えて、私たちは秋田藩・秋田県を中心とした近世・近代林政史研究に多くの成果を上げてきた<sup>(注3)</sup>。その過程で、秋田藩における領主の林野への対応について、領主林・国有林の少ない南関東や近畿地方との大きな違いが明らかになった。具体的には若干後述する。しかし、そうした林野の管理に深く関わる地元村々の実態は、行政文書からではわからない。そこで、国有林地帯の地方文書を調査し、国有林史料と合わせて検討することで、国有林が偏在する地域の歴史的個性が解明されるところに至ったのである。

私たちは、近世最大規模の阿仁銅山へ緻密な輪伐計画「番山繰」をもって材木・薪炭を供給し、鉱山稼ぎの者も住む北秋田市阿仁地方を皮切りに、同市の地方文書調査を開始した。北秋田市を含む北秋田郡域は戦後、福武直が東北日本型農村の典型を求めた地域でもあった<sup>(注4)</sup>。福武の研究は部落（むら）を事例としており、より広域な視点からの地域社会の歴史的実態は追究していない。これに対して私たちは、秋田藩領の地域にみられる村と村の広域的なネットワーク構造をふまえ、単独の集落や行政村には完結しない森林資源管理のありかたを解明する必要があると考えている。

### 2.2 北秋田市調査の開始と湊家文書との出会い

北秋田市での史料調査は、2010年7月22日に同市阿仁公民館を加藤と芳賀が訪れ、同市教育委員会の小松武志氏に面会して、市長宛の研究計画書を提出したことに始まる。同市教育委員会の協力の下、10月の同市第2回調査では阿仁公民館寄託文書の目録採りを開始した。そこに本稿にて紹介する湊榮興家の智子夫人が見学に来られたことから、私たちと湊家との親交が始まった。当時阿仁公民館長であった湊一彦氏が榮興家の分家に当たる縁により、紹介を得た結果であった。

2011年3月の調査では湊ご夫妻が私たちの阿仁公民館における史料整理の様子を見学に来られ、次回7月の調査から同家文書を整理させていただく約束を交わした。この3月の調査では、加藤と芳賀が「北秋田市文化財保護審議委員会」に出席し、私たちの研究目的と地方文書保存の重要性を訴える機会も得られた。

続く2011年7月の調査では、湊ご夫妻が同家文書を軽トラに積んで、阿仁公民館までご持参くださった。ここから本格的な北秋田市域の地方文書調査が開始された。これと並行して、北秋田市域の各地でいくつかの未紹介の古文書を確認する幸運にも恵まれ、相次いで整理に着手することになった。その主要な方法は次項に示す通り、地域住民と協働した史料整理として進むこととなる。湊家文書については、北秋田市調査に年3回ほどのペースでうかがう中で私たちが中心となって整理を進め、2年後の2013年8月に目録が完成した。書簡や領収書等は一括にまとめる方法を採用し、全体で882点、文書整理箱にして28箱である。

### 2.3 地域住民と協働した史料整理

2010年7月から始まった北秋田市における地方文書の発掘・整理作業には、多くの地域住民が参加している。これは、史料整理に先んじて、北秋田市が住民・文化遺産を活かした地域づくりを進めていたという素地があったために実現した。おりしも北秋田市では、文化財保護団体連絡協議会、文化財保護協会、「親方さ集まるべ講座」、エコツアー、郷土史研究会などの活動があり、歴史遺産でもある古文書を地域住民の手で保存することが模索されているところであった。また平成の大合併以前の旧町では、町史編さんの一環として、町域の地方文書の地道な掘り起しが地元研究者によって進められ、いくつもの優れた史料集として刊行されていた蓄積もあった。

そこで、私たちは、2012年から2014年現在に至るまで、北秋田市教育委員会などの協力を得、地域住民からの要請に応じて定期的に古文書セミナーを開催してきた(写真1・表1)。主な題材として、湊榮興家のほか、私たちが2011年以降あらたに整理に着手した4件ほどの文書を取り上げている。各回の規模こそ大きくはないが、参加者のなかには、すでに古文書整理の実務や研究に関



写真1 古文書セミナーの様子(2012年7月)

わってきた経験をもつ人物も多く、作業は予想をこえて進捗しつつある。また、文化遺産保存活用交流会や、北秋田市文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業の一環として、史料の整理と保存、北秋田市の地域的特徴について住民を対象とした講演を続けている。

### 2.4 荒瀬村および湊家文書のプロフィール

以上に述べたように、湊榮興家文書の目録化が終了し、住民参加による多数の新出文書の整理が進展するなかで、この地域に遺された地方文書的全貌が徐々に浮き彫りになってきた。そこでまず阿仁地方の全体のなかで、荒瀬村および湊家の位置づけを述べておこう。北秋田市は、北流する阿仁川の流域とその周辺の山間部を市域としているが、荒瀬村はその最上流部に位置している(図1)。周囲を山に囲まれているが、阿仁川に沿った低地にはみごとな水田が拓かれている。荒瀬村の東には、阿仁銅山でも最大の産銅量を誇った小沢銅山がある。近世の戸数は50軒ほどを数え、流域では有数の規模の村である。

ところで秋田藩領の地方支配では、地域の拠点となる一つの村(本郷)を中心に、そこに比較的小規模な複数の村々(枝郷)を従属させる制度が設けられていた。本郷の村役人は肝煎とよばれた。荒瀬村にも本郷のひとつとして肝煎が設置され、阿仁川の上流一帯やそこに流入する沢沿いに散在する山間集落群を枝郷として従えていた(図2)。この荒瀬村の肝煎を世襲的に勤めてきたのが、ほかならぬ湊家であり、ここで取り上げる湊家文書とは、私たちのこれまでの調査の知見によれば、阿



表 1 北秋田市における地域住民と協働した史料整理の経過

年	月	日	古文書セミナー・講演（◆古文書セミナー ◇講演）	史料整理作業
2010	7	22		阿仁公民館を訪問、寄託文書等の所蔵状況を確認
	10	12		阿仁公民館寄託文書の整理に着手 荒瀬地区・湊智子氏（榮興氏夫人）同館に来館
2011	3	8	◇北秋田市文化財保護審議委員会にて報告（於：北秋田市中央公民館） 「北秋田市域の歴史的特徴と史料保存」（加藤・芳賀）	
	7	9 22 22		荒瀬地区・湊榮興・智子ご夫妻、阿仁公民館に来館 上杉地区・工藤東家文書の所蔵状況を確認 米内沢地区・木村元紀家文書を搬出、整理に着手（この際、北秋田市文化財保護審議委員・木村正彦氏をはじめ、地元参加者数名あり）
	11	24 22～25		荒瀬地区・湊榮興家文書の整理に着手 木村元紀家文書の整理を継続（この際、地元参加者数名あり。以下同じ）
2012	3	17	◇シンポジウム「文化遺産保存活用交流会」にて講演（於：阿仁公民館） 「古文書を未来に—阿仁部歴史資料の特徴と整理・保存」（加藤） 「阿仁部における森林資源の管理・利用史」（芳賀） 「阿仁部地域社会の特徴と歴史研究—社会学・民俗学の立場から」（福田・渡部）	
	6	24	◆第1回古文書セミナー（題材：工藤東家文書 於：森吉公民館 参加者17名） 「北秋田市文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 全体ワークショップ 古文書整理演習・学習会」（以下第5回まで同じ）	
	7	22 23 24 25 26	◆第2回古文書セミナー（題材：工藤東家文書 於：森吉公民館 参加者16名）	本城地区・金逸郎家文書の所蔵状況を確認 綴子地区・高橋八郎兵衛家文書の所蔵状況を確認 木村元紀家文書の整理を継続 木村元紀家文書の整理を継続
	10	13 14	◆第3回古文書セミナー（題材：工藤東家文書 於：森吉公民館 参加者8名）	綴子地区・高橋八郎兵衛家文書の整理に着手（この際、地元参加者4名あり）
	11	23～25	◆第4回古文書セミナー 23日 題材：湊榮興家文書 於：阿仁公民館 参加者7名 24日 題材：高橋八郎兵衛家文書 於：綴子基幹集落センター 参加者10名 25日 題材：木村元紀家文書 於：森吉公民館 参加者7名	
		25～26		木村元紀家文書の整理を継続
2013	2	12	◇北秋田市文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業 第2回阿仁合駅周辺 ガイド養成講座にて講演（於：秋田県北秋田市阿仁庁舎） 「古文書から見た阿仁部の歴史—山の恵みを中心に—」（芳賀）	
	3	11 12	◆第5回古文書セミナー（題材：工藤東家文書 於：森吉公民館 参加者12名）	木村元紀家文書の整理を継続 木村元紀家文書の整理を継続 木村元紀家文書の整理を継続
	7	12 25 26		水無地区・宮越雅一家文書の所蔵状況を確認 木村元紀家文書の整理を継続 水無地区・宮越雅一家文書を搬出、整理に着手
		27	◇鷹巣地方史研究会にて講演 「北秋田市の社会と古文書の特徴—研究経過を中心に」（加藤）	
		29～30	◆古文書研修会（題材：宮越雅一家文書 於：阿仁公民館） 秋田県文化財保護協会阿仁支部・支部長戸嶋喬氏の呼びかけにより、同支部 会員が参加（以下同じ）	
	11	23～24	◆古文書研修会（題材：宮越雅一家文書 於：阿仁公民館）	木村元紀家文書の整理を継続
2014	1	5	◇荒瀬自治会新春懇談会にて講演（於：荒瀬地区コミュニティセンター） 「北秋田社会の特徴と古文書整理」（加藤） 「荒瀬村の歴史と民俗」（渡部）	
	3	15 16		木村元紀家文書の整理を継続 木村元紀家文書の整理を継続
	3	17	◆古文書研修会（題材：宮越雅一家文書 於：阿仁公民館 参加者：4名）	
	3	19		荒瀬地区・荒瀬自治会文書の所蔵状況を確認
	7	29	◆古文書研修会（題材：宮越雅一家文書 於：阿仁公民館 参加者：6名）	荒瀬地区・荒瀬自治会文書の整理に着手

出所）調査記録により作成。

注）史料整理作業は、所蔵状況の確認日、および文書整理の着手日を中心に記した。

仁川流域でも質、量ともに、もっとも充実した肝煎家文書のひとつである。

湊家は通称を「親方」といい、過去帳によれば現当主の榮興氏で14代目になる。経済的には荒瀬村の上層にあり、近世から近代にかけて一貫して村政に携わったほか、集落の内外にベッケ（分家）を出して同族関係の核にもなってきた旧家である。古文書は、もとは湊家の土蔵に収蔵されていたようだが、雨漏りを避けて母屋2階に移した時期があったという（のちに大谷石づくりの蔵を新築してから、ここに収めている）（写真2・3）。先代

までは文書には興味をもたなかったというが、榮興氏ご夫妻の代になって文書の整理をはじめ、さらに一部の重要文書の翻刻を私家版として作成したこともある<sup>（注5）</sup>。

### 3. 湊家文書にみる山村社会の構造

#### 3.1 本郷一枝郷の領域の広がり

この湊家文書を読むうえで重要なできごととして、元禄11（1698）年に荒瀬村に新たに肝煎がおかれ、本郷として独立したことが挙げられる。これ以前の荒瀬村は隣接する小淵村肝煎の支配のも

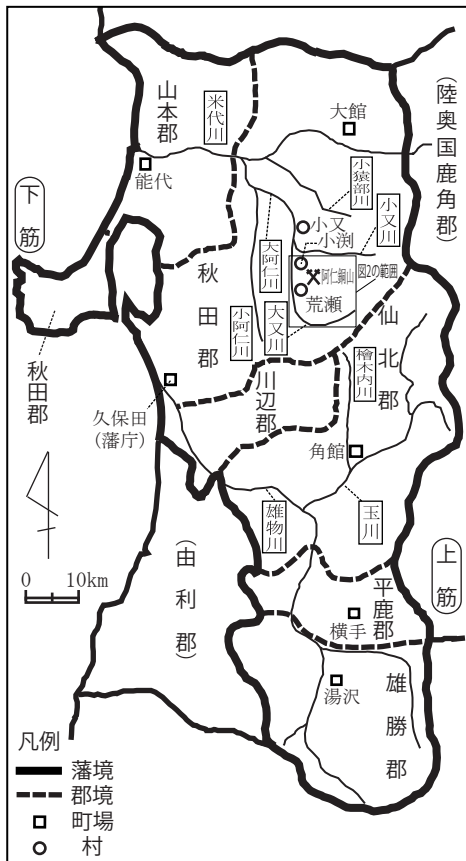


図1 秋田藩の概略図

出所) 秋田県編 (1973)『秋田県林業史』上巻、秋田県、p.104 の図をもとに加筆修正



図2 大又川流域の概略図

出所) ①出羽国久保田小貫家文書 25C/00392「阿仁銅山片付木山沢絵図」(人間文化研究機構国文学研究資料館所蔵)、②別置 4-6「御掛山図面」(東北森林管理局蔵)、③湊榮興家文書 521「秋田郡荒瀬村略絵図」、④湊榮興家文書 1124「荒瀬沢全図」、⑤国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「阿仁合」(1989 年発行)・「米内沢」(2003 年発行)より作成

注 1) 沢の流路は、出所①をトレースした。

注 2) 阿仁銅山と村の位置は、以下を除いて出所①による。

注 3) 菅生村・与吉森村・打当内村・前山村の位置は、出所②を参考にした。樋畑村の位置は、出所③を参考にした。鍵ノ滝村・ラク佐山村の位置は、出所④を参考にした。合滝村の位置は、出所⑤から推定した。

注 4) 名称の表記は、依拠した史資料の記載を尊重した。



写真2 湊榮興家の母屋外観 (2014 年 7 月)



写真3 湊榮興家の蔵 (2014 年 7 月)

とにあったが、当時の村政の様子は現時点では明らかにしない。元禄 11 年当初に荒瀬村で肝煎を勤めた家も現在では不明になっているが、享保 16 (1731) 年に至って湊家が肝煎役を仰せ付けられ、以後、近世を通じてこの体制が維持されている。したがって基本的に湊家文書も 18 世紀以降の肝煎の活動の結果として遺されたものと考えてよいが、いくつかの写し等によって 17 世紀からの連続性が窺える点は貴重である。

まず荒瀬村で肝煎家を中心とする体制が成立しつつあった 17 世紀末～18 世紀はじめの状況をみておこう。検地帳を除くと、湊家文書のなかでもっとも早い年号をもつのは【史料 1】である。これは大阿仁川流域の広い範囲の「御忠進開」を認めた際の証文である。これと完全に同文のものがもう 1 点遺されているが、いずれも写しである。なんらかの耕地開発に関連し、後年に写しが作成された可能性もある。【史料 2】は、秋田藩の本郷の村に発給されていた黒印御定書である（村高の記載に続く 31 か条は定型文であるため翻刻は省略した）。やはり写しで、近世後期～明治初年の争論文書や書状類一括のなかに含まれている。原本は失われたようで、湊家文書には見出せない。

この黒印御定書では、荒瀬村の村高は当高 290 石あまりと記載されている。これは荒瀬村単独ではなく、多数の枝郷を含む村高である。後述する享保期の文書には、「当村（荒瀬村）之儀ハ古来より荒瀬八ヶ所と御皆済ニ被出置申候、尤 御墨印も八ヶ村一本ニ被成下頂戴仕罷有候」とあり、黒印御定書の内容と符合している。また延宝 6 (1678) 年の皆済記録でも、やはり本郷と枝郷をあわせた「荒瀬八ヶ所」の村高が記載されている。それでは、ここでいう「荒瀬八ヶ所」とは、どのような範囲を指しているのだろうか。18 世紀の初めには、つぎに掲げるように、当時の本郷と枝郷の村々の全体像を知らせる好史料にも恵まれている。

まず【史料 3】とした正徳元 (1711) 年 8 月「宮御調覚帳」は、主に寺社林の書き上げである。荒瀬村の薬師堂を筆頭に、隣接する萱草村 (2 堂)、伏影村 (2 堂)、笑内村 (1 堂)、荒瀬川村 (2 堂)、根子村 (2 堂)、比立内村 (9 堂)、そして最上流の打当村 (4 堂) とあって計 8 か村を数える。支流の荒瀬川村を別にすると、これらは荒瀬村から上流にむかう順に規則正しく並んでいる。先の「荒瀬

八ヶ所」とは、これらの 8 か村を指した表現とみてよい。なお宝暦 5 (1755) 年 4 月に「大阿仁荒瀬村支配郷共ニ社寺御調帳」と題した同一の帳簿があるが、村々の構成には差はない。したがって本郷一枝郷関係の骨格の部分は、おそくとも 17 世紀後半には確立し、その後大きくは変化していないことになる。

つぎに「本村枝村書上帳」【史料 4】は、やはり享保 8 (1723) 年という比較的早い段階で、本郷一枝郷関係を公的に書き上げた良質な史料である。ここでは荒瀬村のほか 20 もの村々の名前がみえる。村数はさきの「宮御調覚帳」と一致しないが、これは表 2 に示すように、「本村枝村書上帳」では、たとえば萱草村枝郷や比立内村枝郷などとして、“枝郷の枝郷”にあたる零細な村々が 13 か村ほど書き上げられているためである<sup>(注 6)</sup>。この“枝郷の枝郷”を除くと、やはり萱草村から最奥の打当村に至る「荒瀬八ヶ所」の構成を認めることができる。一方、書き上げ末尾の連印をみると、“枝郷の枝郷”からは村役人は出ていないので、おそらく“枝郷の枝郷”は村請制の村としての実態をもたなかったものと考えられる。

なお表 2 には、「本村枝村書上帳」とほぼ同時期の享保期の秋田藩の地誌「六郡郡邑記」の記載を示しておいた。同書では枝郷が 26 か村あげられている（「本村枝村書上帳」にみえない村が 6 か村ほど加わっている理由は定かでないが、“枝郷の枝郷”レベルの村に関しては、藩による把握には流動的な部分があったようだ）。さらに寛政 6 (1794) 年成立の地誌「六郡惣高村附帳」では、枝郷の数が 33 か村にも達している。多数にのぼる“枝郷の枝郷”の存在は、おそらく山間集落群の開発や移住の過程を反映しているのであろう。これほどまでに広範囲かつ夥しい数の小村を枝郷（および“枝郷の枝郷”）として従えた本郷は、阿仁川流域では他に例がなく、荒瀬村の大きな特徴とみることができる。

寛政期の「六郡惣高村附帳」に至り、枝郷の数が増加している背景には、実態としても枝郷の増加あるいは細分化があった可能性を考えておくことができる。たとえば、ここで新たに記された枝郷のなかには荒瀬川村のさらに上流にある鍵滝村や、やはり沢沿いを遡ったところにあるヲク佐山村・中佐山村の名が見える。また荒瀬村からかな



り懸隔した流域にある土倉村の周辺でも、寛政期には土山村・大石沢村がはじめて記載される。おそらく近世中後期に至っても、在来の枝郷を拠点としてさらに上流域へと開発が進み、小集落が形成されつつあったものと考えられる。ちなみに土倉村周辺は、のちに小淵村管下の村と数多くの争論をひきおこし、その処理のために多数の文書が交わされていく地域としても注目される。

### 3.2 本郷肝煎の社会的役割

このような広い枝郷エリアをまえにして、本郷肝煎は、どのような村政運営上の役割を担っていたのであろうか。このことを年貢皆済処理の例で検討しておきたい。幸い湊家文書には、享保12～15年の早い時期に、年貢管理に関する好史料が遺されている。まず【史料6】は、享保12(1727)年5月の村々御高調御用の廻村をうけて、荒瀬村肝煎が「捨高」<sup>(注7)</sup>の取り扱いの適正化を図った際の願書である。検地帳の古い貼り紙を点検したところ、枝郷・土倉村の耕地の一部(3斗9升2合)の捨高が誤って小淵村の高から差し引かれていたとして、このことの訂正を願い出ている。このような混乱は、同史料中でも述べられているように、元禄11(1698)年以降における小淵村からの荒瀬村および枝郷村々の独立というできごとと関連している。

これには関連史料として【史料5】がある。おなじ享保12年5月の時点で、延宝6(1678)年・天和3(1683)年・元禄13(1700)年・宝永元(1704)年の皆済目録4点分の写しを作成・提出している。このうち天和3年の写しをみると、たしかに小淵村の新田分の高から「三斗九升貳合」が川欠として控除されている。【史料6】の事務処理に関連して、前例調査として過去の皆済目録の写しを作成したものともみてよい。以上2点の史料からは、枝郷を含め、本郷の村役人が一元的に耕地管理・年貢収納やそのための検地帳の管理を担っていたことがわかる。ちなみに皆済目録の原本は遺されていないが、史料中の「此帳」の文言から、簿冊の形態をしていたことが窺える。

廻在してくる藩の検使への応対も本郷肝煎の重要な務めである。興味深いのは、検使の廻村にあわせて肝煎が多数の案件を出していることで、さきの【史料6】では、年貢処理上の間違い4件の訂正が同時に申請され、承認をうけている。同じ

ことは、つぎの【史料7】の場合にもいえる。これは枝郷村々の新開地に関連する検使願いで、直接には枝郷・比立内村の御忠進開に対する打直しの検使派遣を求めているが、この機をとらえて他に4件の要望を出している。同史料の後段には、来訪した検使の「御申」が逐条記録されている。本郷肝煎にとっては、検使による現地の見分の案内、対面での折衝、口頭での伝達と記録といった仕事も、文書管理と並んで重要な意味をもっていたことが分かる。あわせて、検使による村方への伝達と肝煎によるその記録という直接的な関係は、一般に「文書による支配」とされる近世における領主―村関係の多様性を示している。

### 3.3 本郷一枝郷の村政システム

ところで「本村枝村書上帳」や「六郡郡邑記」のなかで各村の戸数の記載をみると、根子村や比立内村のように比較的規模の大きい中核的な枝郷があるとはいえ、全体的には枝郷の規模は零細である。“枝郷の枝郷”に至っては、多くがわずか数戸にとどまる。この傾向は一時的なものではなく、時代が下がっても変化していない。枝郷村々は、公的な書上げでたしかに「村」と明記されているのだが、村請制の村としての実質を備えていたといえるのだろうか。そのひとつの指標になるのが、村役人の存在である。

本郷の村の村役人は肝煎とよばれたが、さらにその下には複数の「長百姓」がおかれている。「長名百姓」「長名役」とも書かれ、「老百姓」の表記もみられる。長百姓は、肝煎に続いてしばしば文書の差出に名を連ねるが、史料によって人数はまちまちで、最大で14名が連署した例もある(後掲【史料13】参照)。一方、枝郷の村役人は「地主」とよばれる。詳しい構成は湊家文書からは窺うことがむずかしいが、文書の差出等をみると常に1名である。枝郷にも長百姓がおかれたようで、たとえば枝郷の比立内村では地主に続き「老百姓」が連署した例がある(前掲【史料3】参照)。

やや時代は下がるが、18世紀のなかばには、本郷と枝郷の村役人の活動や交替・選任のありかたを示す文書がいくつか見いだせる。まず【史料9】は、なにかと郷中不和合をきたしていた長百姓・勘七に対し、本郷と枝郷の村役人が作成した寛延4(1751)年の訴状である。小沢銅山の手代役の立

表2 荒瀬村周辺の本郷一枝郷一覧

村名	正徳元(1711)年8月 「宮御調覚帳」	享保8(1723)年3月 「本村枝村書上帳」	享保15(1730)年 「六郡郡邑記」	寛政6(1794)年 「六郡惣高村附帳」
荒瀬村	①あらせ村分・薬師堂	①荒瀬村(本村)	— ①荒瀬村	50 ①荒瀬村
荒瀬川村	⑦あらせ川分・弁才天堂、	②荒瀬川村(荒瀬村支郷)	27 ②荒瀬川村	20 ②荒瀬川村
櫃畑村	⑧右同断・観音堂	—	— ③櫃畑村	7 ③櫃畑村
鍵滝村	—	—	—	— ⑨鍵滝村
萱草村	②茅艸分・山神堂、③右	③萱草村(荒瀬村支郷)	24 ④茅草村	24 ③茅草村
佐山村	同断・地藏堂	④佐山村(茅草村支郷)	6 ⑤左山村	6 ②佐山村
中佐山村	—	—	—	— ④中佐山村
上佐山村	—	—	—	— ⑥上佐山村
笑内村	⑥笑内分・山神堂	⑤笑内村(荒瀬村支郷)	22 ⑥笑内村	22 ⑦笑内村
根子村	⑨根子村分・観音堂、⑩右同断・山神堂	⑥根子村(荒瀬村支郷)	30 ⑦根子村	30 ⑧根子村
伏影村	④伏影村分・白幡明神	⑦伏影村(荒瀬村支郷)	12 ⑧伏影村	12 ⑤伏影村
おわ測村	堂、⑤右同断・山神堂	⑧おわ測村(伏影村支郷)	3 ⑨ヲハ淵村	3 ⑥大和測村
比立内村	⑪比立内分・天神堂、⑫	⑨比立内村(荒瀬村支郷)	— ⑩比立内村	31 ③上比立内村
岩野目沢村	右同断・薬師堂、⑬右同	⑩岩野目沢村(比立内村支郷)	7 ⑪岩野目沢村	7 ⑪岩野目沢村
幸屋渡村	断・薬師堂、⑭右同断・八	⑪幸屋渡村(比立内村支郷)	16 ⑫幸屋渡村	16 ⑨幸屋渡村
幸屋村	幡堂、⑮右同断・稲荷堂、	⑫幸屋村(比立内村支郷)	17 ⑬幸屋村	17 ⑭幸屋村
大平村	⑯右同断・熊野堂、⑰右	⑬大平村(比立内村支郷)	3 ⑭大平村	3 ⑮大平村
岡畑村	同断比立内村・観音堂、	⑭長畑村(比立内村支郷)	6 ⑮長畑村	6 ⑫岡畑村
菅生村	⑱右同所・阿弥陀堂、⑲	⑮菅生村(比立内村支郷)	4 ⑯菅生村	4 ⑬菅生村
下比立内村	右同断・熊野堂	—	— ⑰下比立内村	16 ⑰下比立内村
羽立村	—	—	— ⑱羽立村	16 ⑱羽立村
西野村	—	—	— ⑲西野村	16 —
鳥坂村	—	—	— ⑳鳥坂村	16 ⑩鳥坂村
打当村	⑳打当分・山神堂、㉑右	⑯打当村(荒瀬村支郷)	— ㉑打当村	15 ⑯打当村
中村	同断・八幡堂、㉒右同断・	⑰中村(打当村支郷)	18 ㉒中村	18 ㉒中村
戸鳥内村	鳥海権現堂、㉓打当分小	⑰戸鳥内村(打当村支郷)	13 ㉓戸鳥内村	13 ㉓戸鳥内村(ママ)
野尻村	倉村・熊野堂	⑱野尻村(打当村支郷)	7 ㉔野尻村	7 ㉔野尻村
鳥越村	—	⑳鳥越村(打当村支郷)	5 ㉕鳥越村	5 ㉕鳥越村
大倉村	—	㉑大倉村(打当村支郷)	8 ㉖大倉村	8 ㉑小倉村
榎木沢村	—	—	— ㉗榎木沢村	8 ㉔榎木沢村
田ノ沢村	—	—	—	— ⑲田ノ沢村
前山村	—	—	—	— ㉗前山村
土倉村	—	㉒土倉村(荒瀬村支郷)	8 —	— ㉑土倉村
大石沢村	—	—	—	— ㉒大石沢村
土山村	—	—	—	— ㉓土山村

出所)「宮御調覚帳」は翻刻【史料3】、「本村枝村書上帳」は翻刻【史料4】による。「六郡郡邑記」は、秋田叢書刊行会編・発行(1929)『秋田叢書』第2巻、pp.123-124、「六郡惣高村附帳」は秋田県公文書館所蔵「六郡惣高村附帳 但下三郡」(請求記号県A-27-1)による。

注1) 見出しの村名は、代表的な表記をとった。また「荒瀬八ヶ所」に相当する村をゴチックで示した。

注2) 各欄の村名の丸数字は各史料中の記載順、村名横の数字は戸数、—は該当記載を欠くことを示す。用語や表記は各史料の用法に従ったが、明確な誤記・誤植は訂正した。

注3) 寛政6年「六郡惣高村附帳」のうち、「岡畑村」は「長畑村」、「上比立内村」は「比立内村」の異称と判断した。

場にありながら、郷中寄合の席で暴力沙汰をおこしたり、決定ずみの議題を蒸し返して寄合を長引かせるなどの行状が述べられている。ここでは「肝煎役所」に本郷と枝郷のすべての村々の地主・長百姓が集まり、定期的に寄合がもたれていたことも知られる(遠く離れた枝郷の地主にとってみれば、寄合のための永逗留はたしかに迷惑であっただろう)。

この寛延4年の時点では訴訟沙汰は回避されたが<sup>(注8)</sup>、勘七の側でも反論の機会を窺っていたようである。つぎの【史料10】によると、その2年後の宝暦3(1753)年に、勘七は病氣療治の名目で久保田に滞在した際に出訴に及び、そのことで小沢銅山手代役を解かれる。これに対し郷中では勘

七本人の追放を決め、勘七の側では村の意に反して一家で出奔してしまう。同文書では、あとに残された居宅や馬の昼夜の番を郷中で担わざるをえなくなった経緯をふまえ、その負担軽減を願い出ている。

この勘七追放一件からは、村役人の選任のしかたや社会階層を読み取ることができる。さきの【史料9】では、勘七は2年前から小沢銅山手代役を務め、本来ならば長百姓の役から除くところだが、当時は「組頭長名之内茂水吞同前之御百性ニ御座候」という状況であり、他に勘七に代わる人材もいないことから、長百姓のまま差し置いていたと述べている。つまり長百姓の任免権は村がもっていたことになる(文書によって人数にばらつきが



あるのも、このような自由さに関連している可能性がある)。また「少々御高持御百性」として勘七に頼らざるをえないというのは、裏を返せば、新興の経済力をもつ長百姓たちがそれまでの村運営を動揺させている様相を物語っている。

最後に【史料13】は、本郷肝煎の継目に関連した興味深い史料である。病氣療養中の肝煎長左衛門に対し、万一の際には「御同性長右衛門」による後継を求めたもので、ここでいう長右衛門とは肝煎家のベッケ(分家)の者を指すものと思われる。表題にみえる「親方」は肝煎家の現当主個人を指した呼称であろう。差出には26名もの本郷と枝郷の村役人たちの連印がある(彼らは文中では「惣長名地主中」「一郷并支配一流」「一郷并支配地主中」とも自称している)。本郷肝煎の人選に枝郷村々の意向が関わっていること、とくに枝郷の地主たちを含めて村政上の合意形成がなされていることは重要である。

### 3.4 小括

以上では、肝煎湊家および荒瀬村を中心とする村落自治が成立し、安定して推移していく18世紀はじめの状況を中心に素描してきたが、ここでみた本郷一枝郷関係は、一面では若干の変化を迎えていくことにも触れておきたい。そのひとつは、“枝郷の枝郷”レベルにあった村が自立していく傾向である。幸屋渡村、幸屋村、中村、戸鳥内村がそれにあたる。4か村は正徳～享保期(1711～36)には“枝郷の枝郷”の扱いで、文書の差出にも加わっていない(前掲【史料3】・【史料4】参照)。ところが18世紀半ばになると、文書を作成する際、この4か村はつねに独自の地主を立て、村役人の連印に加わるようになる(前掲【史料9】・【史料13】参照)。おそらくこれに関連し、のちに湊家文書では「枝郷十二ヶ村」という定型表現がみられるようになる。

こうした考察をもとに考えると、荒瀬村を中心とする本郷と枝郷の村々は実質的なまとまりをもち、きわめて広い領域にまたがる村政システムを構成していたものと想定することができる。この点をより具体的に検証するため、次章では、近世の村々による森林資源の管理の問題を取り上げることにしたい。

広大な森林に囲まれた荒瀬村周辺では、材木・

薪炭の生産や飼料・肥料の採取をはじめ、多彩な森林の利用形態がみられた。こうした森林の利用に際しては、しばしば百姓や枝郷どうし、あるいは隣村との間で争論(山論)や交渉が発生した。争論の解決過程では村役人に調停が期待されたが、内済できなかった場合には、村役人らが藩による裁定を出願した。さらに、村役人は本郷と枝郷の村々の需要に応じて、藩とも森林の利用をめぐる交渉をした。

このような森林をめぐる問題は、山間地域を広く開発して成り立っている荒瀬村と周辺枝郷エリアの地域特性をよく反映しているだけでなく、現実には近世当時の本郷と枝郷の間で、もっとも活発に文書が交わされていたトピックである。そこで以下では、森林に関連する村どうしの交渉や争論、村役人による調停や藩の裁定の出願などを、村を主体とした森林資源管理の営みと捉え、そこに本郷と枝郷の村々のもつ共同性や藩権力との関係を読み取ってみたい。

## 4. 本郷一枝郷による森林資源管理の展開

### 4.1 荒瀬村周辺における森林の概況

#### 4.1.1 阿仁銅山の開発と銅山掛山の設定

本節では、次節以降で森林資源管理の具体的な営みを紹介する前提として、その舞台となった荒瀬村周辺の森林の特徴を概説したい。そこで、まずは阿仁銅山の開発について、説明するところからはじめよう。

近世の阿仁銅山は、小沢銅山・真木沢銅山・三枚銅山・市之又銅山など11の銅山から成り、寛文10(1670)年に開坑して、宝永5(1708)年に最盛期を迎えた。その後の出銅量は減少傾向にあったが、稼行は幕末まで継続した<sup>(注9)</sup>。

この阿仁銅山の発展・継続に不可欠であったのが、材木・薪炭である。その供給を図るため、藩は元文5(1740)年、銅山周辺に「銅山掛山」と呼ばれる藩営林を設定し<sup>(注10)</sup>、宝暦12(1762)年には「番山繰」を立案して森林の持続的利用を目指した<sup>(注11)</sup>。

こうした銅山掛山のうち、荒瀬村周辺にあって同村が藩から保護を命じられたのは、表3に示した14か所である。これら14か所の多くは、製炭用の林(炭木山)であったことから<sup>(注12)</sup>、その林相は、製炭に適したナラなどの落葉広葉樹(雑木)

表 3 荒瀬村が保護を担当した銅山掛山

No.	沢名	担当村
1	荒瀬川沢	荒瀬村
2	孫沢	荒瀬村
3	鳥坂沢	笑内村
4	根子沢	根子村
5	牛滝沢	比立内村
6	岩の目沢	幸屋渡村
7	志淵内沢	幸屋渡村
8	佐山沢	幸屋村
9	打当沢	打当村
10	野倉沢	打当村
11	打当内沢	中村
12	小倉沢	戸島内村
13	早瀬沢	戸島内村
14	戸島内沢	戸島内村

出所) 岩崎直人 (1939) 『秋田杉林の成立並に更新に関する研究』 興林会、p.67 より作成。

注) No 1 荒瀬川沢のみは、宝暦 10 (1760) 年に追加設定された場所である。

を主としたと考えられる。このうち元文 5 年に設定された 13 か所については、藩から「銅山方為用事、杉・雑木共ニ留置」くように命じられた「御文言」を書き写し、その遵守を枝郷村々との間で確約した際の史料が湊家文書にも残されている<sup>(注 13)</sup>。

#### 4.1.2 郷林の育成と御札山の設定

上記のような阿仁銅山向けの材木・薪炭生産は、周辺村々の百姓に金銭獲得の機会を与えた。彼らは銅山掛山での材木・薪炭生産に雇用されたほか、村持林である「郷林」や、個人持林である「符人林」を育成し、材木・薪炭を生産して阿仁銅山へと上納した(後掲【史料 34】参照)<sup>(注 14)</sup>。

なお、村方が郷林を育成する際には、藩に御札の下付を出願することもあった。たとえば享保 20 (1735) 年 4 月に荒瀬村が御札(合計 5 枚)の下付を求めた際の願書が【史料 8】として残されている。これは水野目林や郷林の育成を目的とした出願であったが、4 枚分については過去に御札が下付されていたため下付に至らず、1 枚のみが認可を受けている。

ここでいう御札とは、立木の伐出などを禁じたもので、御札を下付された林は「御札山」と称された<sup>(注 15)</sup>。こうして御札山となった郷林は「御林」とも呼ばれ(後掲【史料 18】参照)、藩権力のもとに強力に保護された。

表 4 には、文政 5 (1822) 年頃における荒瀬村の

御札山を一覧した。本表によると、19 か所のうち最低でも 12 か所が郷林として御札山になっていた。こうした郷林は、阿仁銅山向けの材木・薪炭生産にのみ利用されたのではなく、史料上には現れにくい、村内の土木工事で必要な材木や、煮炊きに用いる薪の確保など、様々な理由で育成されたと推測される。

また、同表からは、荒瀬村の御札山が水野目林や関筋類雪除林としても設定されていたことがわかる。前者は水源涵養林にあたり<sup>(注 16)</sup>、後者は関(用水路)が類雪(雪崩)で損壊するのを防ぐ林、すなわち雪崩防止林を指すと考えられる。これらの御札山も、自然条件の調整を期待する村方の要求によって設定されたようである(前掲【史料 8】および後掲【史料 35】参照)。

#### 4.1.3 湊家文書にみる森林資源管理

湊家文書には、上記の銅山掛山や郷林・符人林、御札山に加えて、村持の採草地や放牧地に関する史料が、比較的豊富に残されている。特に、百姓らが日常利用した採草地や放牧地の実態は、藩側で作成された史料では十分に捕捉できないため、村側に残された史料は貴重である。

これらの史料から、荒瀬村による森林資源管理に関する事柄を、時系列に整理したものが表 5 である。本表からは、荒瀬村やその周辺の村々に居住する百姓が、阿仁銅山向けの材木・薪炭生産以外にも、関普請に用いる槌木などの生産や肥料・飼料となる草の採取、スギの植栽や森林の耕地化など、多様な目的で森林を利用しており、しばしば争論や交渉が発生していたことが窺われる。

次節からは、翻刻した森林資源管理に関する史料のうち、とりわけ重要と思われるものを詳しく取り上げ、それを通じて研究上の論点を抽出したい。なお、史料は便宜的に①村内の争論・交渉に関するもの、②藩への交渉に関するもの、③隣村との争論・交渉に関するものの 3 つに分類して紹介していく。

### 4.2 森林をめぐる村内の争論・交渉

#### 4.2.1 枝郷間の山論と村役人の差配

まず、安永 3 (1774) 年に根子村の地主・長百姓らが作成した【史料 12】に目を向ける。本史料によると、根子村は萱草村が畑や放牧地などに利

表4 文政5(1822)年頃における荒瀬村の御札山

設定年	No.	場所	種別
正徳2年 (1712)	1	上ハ念仏沢下ハ段ノ上迄片平通	水野目林
	2	萱草沢より下村之後通越畑沢迄両平峯限水落台之内とも	水野目林
	3	比立内村之内鶏サマより上ハ比井野沢東南片平右沢口より高崎沢迄峯限折廻し水落次第川前平通とも	水野目林
正徳4年 (1714)	4	岩ノ目沢口より大川目通前片平上ハひるさ田迄	林(郷林か)
元文5年 (1740)	5	上ハ堂ノ沢より下ハ越畑沢迄大川前平通	林(郷林か)
天明8年 (1788)	6	長坂道両脇関ノ沢より上ハ谷地迄下ハ田ノ上迄大川片平通	郷村方新林
	7	笑内村金倉沢両平水落次第	郷村方新林
	8	幸屋渡村岩ノ目沢之内みつくり橋片平通	郷村方新林
	9	上比立内村観音堂境より上前平中段	郷村方新林
	10	戸島内村鳥海堂境より川下前平通深沢迄	郷村方新林
	11	打当村打当沢東平樋口迄	郷村方新林
	12	幸屋村佐山沢之内水上沢両平水落次第	郷村方新林
	13	伏影村横測台之上より上さ田迄	郷村方新林
	14	根子村笹長根より上大仏社前平通	郷村方新林
	15	萱草村佐山家之上片平	郷村方新林
	16	荒瀬川村西平滝の沢西平水落次第	郷村方新林
享和3年 (1803)	17	荒瀬沢ハ九両森下東北面江折回シ峯限水落次第沢口より大川前平通めつは沢大川口迄	郷林
—	18	根子村備前沢之内滝之沢両平峯限水落次第	水野目林
	19	比立内村田ノ沢両平水落次第并大川前平通南江折廻し内高倉沢出口迄	関筋類雪除林

出所)「秋田郡・小猿部・両阿仁村々御札山絵図 全一冊」(東北森林管理局蔵、図面72)より作成。

注)上記史料は、その記述内容から文政5(1822)年頃の作成と推定される。

用していた「長浜上へ之台」を自村の土地と主張し、畑として耕作したく申し入れた。これにより、両枝郷は同所をめぐって争論となり、本郷の村役人へ解決が求められた。その結果、同所は以前根子村の土地であったものの、享保20(1735)年の時点で、萱草村の出願を受けた本郷の肝煎名代と長百姓らが吟味し、萱草村へ附属されていたことが明らかになった。上記の裁定を受けた根子村は、萱草村の「長浜上へ之台」利用を認め、以後異論は唱えないと本郷の肝煎・長百姓らへ一札入れている。この事例からは、本郷の肝煎と長百姓らが、枝郷間の争論調停を担っていたことが窺われる。

これと類似した事例が、[史料18]にみられる。本史料は、文化11(1814)年に比立内村・幸屋渡村・幸屋村の地主・長百姓・関子らが、本郷の肝煎・長百姓と枝郷の地主に宛てた書付である。関子は、関を管理した百姓と思われる。

この書付によると、幸屋渡・幸屋両村は、比立内村の御札山である「田之沢より高倉迄」の林を、唐見内関の関林と認識していた。関林とは、同史料から関普請用の樋木などを確保するために保護・育成された林と考えられる<sup>(注17)</sup>。

こうしたなか、比立内村が同所のうち田之沢・赤井沢で製炭を開始したため、幸屋渡・幸屋両村の関子は、同所が関林である旨を比立内村へ訴えた。対する比立内村は、同所は関林でなく自村の郷林であり、そのうち「高倉沢より赤井沢口迄」の林は、唐見内関の普請用に保護・育成してはきたが関林には設定されておらず、残る「田之沢・赤井沢」も従来自村の小百姓が郷林として利用してきたと返答した。このように双方の主張は一致しなかったため、両者は本郷の肝煎・郷人に調停を求めた。

しかし、吟味しても同所が関林か郷林かは明らかにならなかったため、本郷の肝煎・郷人と枝郷村々の地主らは、同所に①～③の利用区分を設けて双方を納得させた。すなわち、①赤井沢は、比立内村の百姓が利用する場合、口銭などを7対3の割合で地元同村と、幸屋渡・幸屋両村の関子へ配分する、②田之沢は比立内村へ附属させる、③「高倉沢より赤井沢口迄」は関林として3か村で保護し、もし関普請以外の目的で立木を伐出する場合は、口銭などを3か村の関子で配分するよう内済した。

本史料は、本郷の肝煎・郷人と枝郷村々の地主



表 5 荒瀬村による森林資源管理の展開

和暦	西暦	月	内容	番号
享保15年	1730	6	◆ 荒瀬村、銅山掛山の関林（関普請に用いる槌木などの供給林）指定を出願	史料7
20年	1735	4	荒瀬村、水野目林・郷林育成などのために御札（合計5枚）の下付を出願するが、4枚分については過去に御札が下付されていたため、1枚のみ許可	史料8
明和 9年	1772	10	◆ 荒瀬村、土倉・小様村境問題で返答書を提出	史料11
安永元年	1772	12	◆ 土倉・小様村境問題で評議結果が代官へ通達	史料11
安永 期	1772-81	—	◆ 牛用の採草地として、大石沢上平が阿仁銅山へ「御貸上」	史料34
3年	1774	4	◆ 根子・萱草村間の山論が落着	史料12
9年	1780	10	◆ 小様村、塚之台開発に伴う関普請と引き替えに、「ねこや沢」の開発を土倉村に許可	史料14
天明元年	1781	5	◆ 荒瀬村、塚之台開発に伴う小様村の関普請を許可	史料15
文化元年	1804	7	比立内村御林におけるスギ植栽関係の山論が落着	史料16
4年	1807	4	◆ 荒瀬村、野尻台開発に伴い、「替地」として銅山掛山の利用を藩へ出願	史料17
4年	1807	4	◆ 荒瀬村、銅山掛山の関林指定を出願	史料17
9年	1812	—	◆ 荒瀬村、土倉村五郎兵衛所持の大石沢上平の林を引き上げ	史料34
10年	1813	—	◆ 土倉村五郎兵衛、大石沢上平の林を取り戻し	史料34
11年	1814	7	◆ 荒瀬村、比立内村御林をめぐる同村と幸屋渡・幸屋両村の山論を内済	史料18
12年	1815	—	◆ 大石沢下平をめぐる小様・土倉村間の山論が発生	史料19
13年	1816	—	◆ 荒瀬村、大石沢下平をめぐる小様・土倉村間の山論裁定を藩へ出願（のちに内済）	史料19 史料35
文政11年	1828	10	◆ 小様村、「家之上」林を伐採して土倉村と山論（土倉村御林一件）。荒瀬村、裁定を藩へ出願。荒瀬村、銅山本山役所の吟味に対し、返答書を提出	史料20 史料21
12年	1829	2	◆ 荒瀬村の採草地が、炭運送用の牛道とこの牛用の採草地に命じられる。荒瀬村、中止を藩へ出願	史料22
12年	1829	3	荒瀬村、上記採草地の「替地」を出願	史料22
12年	1829	4	荒瀬村牛方9人、小百姓が放牧地へ畑を開くのを容認	史料23
13年	1830	1	◆ 土倉村地主らが荒瀬村上平を相滝村長兵衛らへ売却	史料24 史料34
13年	1830	閏3	幸屋渡・幸屋村間の御林境をめぐる山論が落着	史料25
13年	1830	4	◆ 検使が土倉村御林一件を吟味	史料26
13年	1830	10	◆ 土倉村御林一件の評議結果が郡方吟味役へ通達	史料27
天保 6年	1835	閏7	◆ 幸屋・幸屋渡両村、採草地の売買を本郷へ届け出	史料28 史料29
8年	1837	2	荒瀬村、阿仁銅山の御用地以外を村方領とすることを藩へ出願	史料30
8年	1837	3	同上	史料31
9年	1838	—	銅山方が大石沢上平で薪を伐採。荒瀬村、本件で藩へ出願。銅山方が今後伐採しないよう裁定（翌10年か）	史料34 史料35
嘉永 2年	1849	9	◆ 相滝村長兵衛、土倉村五郎兵衛による大石沢上平での製炭を差し止め	史料33
2年	1849	12	◆ 土倉村五郎兵衛、相滝村長兵衛の吟味を本郷へ出願。その後、「年番」小又村と「組合肝煎」によって裁定	史料33 史料35
安政 4年	1857	春	◆ 小様村、大石沢上平で製炭を開始して土倉村と争論	史料35
4年	1857	9	◆ 荒瀬村、大石沢上平をめぐる土倉・小様村間の争論裁定を藩へ出願	史料35
4年	1857	9	◆ 荒瀬村、大石沢の林を水野目林とするよう藩へ出願	史料35
文久 2年	1862	4	土倉村藤右衛門の杉が焼失して小様村と争論。土倉村、調停を本郷へ出願	史料36
慶応元年	1865	4	◆ 土倉村の小様村附属が命じられる	史料37
2年	1866	1	◆ 荒瀬村、土倉村の小様村附属を受諾	史料37

出所) 湊榮興家文書より作成。

注) 本文で詳しく取り上げた事柄には◆印を付した。

らが、御札山をめぐる枝郷間の山論を、合理的に内済したものとして重要である<sup>(注18)</sup>。

#### 4.2.2 枝郷間の採草地売買と肝煎の加判

次に、天保6（1835）年、幸屋村が幸屋渡村へ採

草地を売却した際に作成された【史料28】と【史料29】をみてみよう。

2つの史料によると、従来幸屋村は幸屋渡村へ採草地を貸与してきたところ、緊急に銭が必要となり、郷中で相談して幸屋渡村へ当該採草地を売却

したく交渉した。これを受けた幸屋渡村は、郷中で相談して同所の購入を了承したため、両村は売買の事実を肝煎へ届け出た。加えて、幸屋村の地主らは売却証文への肝煎加判を出願した。

本事例からは、枝郷間における採草地売買に、肝煎への届け出と加判が必要であったことが確認できる。この事例は、枝郷村々が村請制の村としての実質をどの程度備えていたかを検討する上でも参照されるべきであろう。

### 4.3 森林をめぐる藩との交渉

#### 4.3.1 銅山掛山の利用交渉

はじめに、享保15(1730)年に作成された【史料7】を再び取り上げる。この史料は比立内村の御忠進開発に関する検使派遣を願ったものであるが(3.2参照)、この機を捉えて他に複数の要望が出されている。そのひとつとして、本郷の肝煎・長百姓は、打当村の本田関(本田に用水を供給する関)を維持すべく、銅山掛山の一部を関林として利用したいと藩に出願している。これに対する藩の最終的な返答は不明であるが、同様に荒瀬村が銅山掛山の利用を出願した事例が【史料17】にみられる。

この史料は、文化4(1807)年に本郷の肝煎・長百姓と枝郷の中村・戸島内村・野尻村・打当村各地主、および打当村金兵衛が連名で提出した書付の控えである。宛所の3人は、藩の検使と推測される。本書付の内容は、①野尻台の開発と②関林の新設に大別できるので、順番に解説する。

①金兵衛は給人の梅津与左衛門へ、戸島内村野尻台の御忠進開発を申し入れた。見分の結果、新田開発に必要な用水は、本田関の拡張によって確保することになった。しかし、従来野尻台は野尻・鳥越両枝郷の採草地・放牧地であったため、肝煎らは銅山掛山である早瀬沢を、その「替地」として利用したく出願した。

②肝煎らは、打当内沢に開設した関の普請に用いる樋木などを確保するため、銅山掛山である打当内沢の関林指定を出願した。従来、これとは別に水野目林が設定されていたが、それだけでは樋木などの供給に不足であるという<sup>(注19)</sup>。さらに、当該関林の指定が許可されれば、打当内沢の関を拡張して、震石という場所を御忠進開発すると上申している。

上記①・②の出願もどのように処理されたのかは不明であるが、肝煎や枝郷の地主らは村方の需要に応じて、銅山掛山の転用を藩に出願していたことがわかる。

#### 4.3.2 阿仁銅山の稼行に伴う摩擦と交渉

次に、文政12(1829)年、本郷の肝煎・長百姓と萱草村の地主・長百姓が作成した【史料22】に目を向ける。この願書には筆跡の異なる下札が4点付され、出願内容に対する返答が簡潔に記されている。下札の右上には数字が記されているが、「二」の札はみえず、剥落の可能性が考えられる。

本史料によると、藩は本郷と萱草村が採草地として利用してきた「そふ向」へ、阿仁銅山向けの炭運送に伴う牛道を通し、あわせて同所をこの牛用の採草地とするよう通達した。両村は中止を出願したが、藩は「そふ向より荒瀬村船場迄」を牛道とこの牛用の採草地に利用できなければ炭を運送できず、阿仁銅山の稼行に支障が出るとして、同所の「替地」候補を上申するよう指示した。これに対し、荒瀬村は村内に「替地」候補地はないと断った上で、以下のように村外の森林の連鎖的な転用を出願している。

①馬の放牧地として利用してきた「中佐山沢之内下馬寄」と、阿仁銅山が利用してきた中佐山沢のうち「みつき沢」を採草地に利用したい。

②中佐山沢のうち「中佐山村より上ほうつき山下タ迄」に繁茂する草を採取したい。

③上記の「中佐山沢之内下馬寄」と「ほふつき山下タ」は、従来馬の放牧地として利用してきたので、代わりの放牧地として銅山掛山の「荒瀬川勝しとけ沢之内越畑・千本杉両処台通り」などを利用したい。

④上記の「中佐山沢之内下馬寄」と「みつき沢」を地焼して、採草地として利用できるようにするまで、牛が歩けない「そふ向之内彦の沢并平通」の草を従来通り採取させてほしい。

⑤荒瀬村の採草地は「小沢海(街)道并上通野山川向法度山無残露熊道」であるが、ほかに「替地」候補はない。銅山掛山のうち孫沢を「替地」に出願したいが、遠方かつ残らず林であるため利用には適さない。ほかに「替地」候補もないので、馬草の調達費用として銭を下付されたい。

以上の出願を受けた藩は、①のうち前者は許可

するが、後者は許可しない、②～④は出願通り許可する、⑤は認めないが、馬持ちへ孫沢の「悪木」から伐出した薪を下付する<sup>(注20)</sup>と回答した。

この事例からは、阿仁銅山の稼行に伴い、藩と荒瀬村の間で、森林の利用をめぐる摩擦が生じていたことがわかる<sup>(注21)</sup>。また、自村の森林を利用できなくする藩の命令に対し、村役人はそれと引き替えに銅山掛山を含む村外の森林を利用できるよう藩と交渉し、一定の成果を獲得することができた。これが可能であった理由の1つには、同村の村役人や郷人が、周辺の森林の状況を熟知していたことがあると考えられる。

#### 4.4 小様川流域における隣村との争論・交渉

##### 4.4.1 明和～安永期の村境確定問題

先述したように(3.1参照)、小様川流域では、荒瀬村と隣村小渕村との間で争論・交渉が頻発した。本節では、この争論・交渉を時代順にみていきたい。

はじめに、明和9(1772)年(11月には安永に改元)、荒瀬・小渕両本郷の肝煎・長百姓らが、代官を通して各々の枝郷である土倉村と小様村(のちに本郷として独立)の境確定を出願した際の【史料11】に目を向けよう。前半は10月17日に作成された藩への返答書の控えて、後半は12月16日に代官へ出された評議結果の書付の写しである。

本史料によると、小様川流域には土倉村・土山村・大石沢村という荒瀬村の枝郷があり、この3か村の高請地は同村の「飛入高」として把握されていた。しかし、小様川流域における荒瀬・小渕村間の境を記した書付はなく、周辺の林も両村が入会利用してきた。

こうしたなか、荒瀬村は同流域の関根台へ新屋敷を普請した。同村は関根台を自村高請地の「捨り高」と主張したが、小渕村はこれを容認せず、両村は従来不分明であった村境、より具体的には土倉村と小様村の境の確定を企図した。担当検使による吟味結果は、以下の通りである。

まず、争論の発端となった新屋敷は荒瀬村高請地の「一ノ渡り」に相当し、「元捨高」の場所に当たることがかろうじて認められ、検地を受けるよう裁定された。ただし、新屋敷付近に同村が開いた新畑は、耕作せず「荒し置」くよう命じられ、今後「元捨高」の場所以外で同村が新屋敷を普請し、

耕地を開闢することは禁止された。また、関根台向という場所で両村が保護・育成してきた林の境も、同時に定められた。しかし、肝心の村境は、田地・屋敷の錯綜を理由に「先年之通覚形り」と結論された。この土倉村と小様村の境をめぐる不明確な裁定は、その後の山論の大きな要因として、荒瀬村に認識されていくことになる。

##### 4.4.2 安永～天明期の塚之台開発と関普請

このように、土倉村が荒瀬村の「飛入高」として小様川流域に所在したことは、用水確保をめぐる争論(水論)の発生を助長することにもつながったと推測される。以下に紹介する【史料14】・【史料15】は、小渕村が同村の塚之台を御注進開発するにあたって、用水確保のため、土倉村の本田関より上流へ新たに関を普請しようとした際のものである。この一件は水論を主題とするが、のちの山論にも関わってくるため、ここで触れておく。

まず、天明元(1781)年5月に作成された【史料15】に目を向けよう。この書付は、検使の吟味に回答する形で、本郷の肝煎・長百姓と土倉村の地主・長百姓が、小渕村による上記関普請を承諾したものである。承諾にあたって荒瀬村は、①早魃時には関根留を払って土倉村本田関への通水を優先すること、②普請時に本田関へ岩石を落下させないこと、③飲料水として利用している田之沢へ、「銅山悪水」が混入しないよう樋を渡すこと、④関普請を許可するのと引き替えに、その「余水」で、土倉村が自村の土地である「根小屋沢」を開発するのを認可すること、⑤普請の際、御林に支障のないようにすること、という5つの条件を提示している。この前年に作成された【史料14】は、これら5つのうち④の条件に関連するものと考えられ、既に安永9(1780)年10月の時点で、小渕村が新関の「余水」による「根小屋沢」の開発を荒瀬村に認めていたことが窺われる。

このように、荒瀬村周辺地域では、近世中期以降も小規模な新田開発が続けられ、これに伴い、用水確保がしばしば村落間の争点となった。例えば、年代は天保15(1844)年まで下るが、土倉村の地主・長百姓が小様村の地主に宛てた【史料32】では、土倉村が関を普請したものの思うように通水せず、小様村の塚之台関から用水を盗み、田地を耕作していたことを詫言っている。



また、進展する新田開発は、関普請に伴う関林確保の必要性を高めるとともに、肥料となる草の需要逼迫を助長し、森林をめぐる新たな問題を引き起こしたことが想定される。実際に、この安永期の塚之台開発は、のちの採草地をめぐる争論の遠因ともなっていた。

#### 4.4.3 文政期の土倉村御林一件

小様川流域における山論は、主に「家之上」という場所と大石沢で発生した。時代は若干前後するが、論述の便宜上、まずは文政期(1818～30)の土倉村御林一件を取り上げる。この一件は、土倉村が自村の御林と主張する「家之上」(村之上、村居後口山処とも呼称)所在の林を、小様村が事前の合意なく、文政11年10月に伐採した事件である。以下では、[史料20]・[史料21]・[史料26]・[史料27]に基づいて同一件の経緯を整理する。

はじめに、[史料20]は事件発生直後の10月5日に荒瀬村の肝煎・長百姓が提出した願書である。宛所の小川敬内は、郡方吟味役と推測される。本史料によると、小様村は「家之上」を自村の採草地と認識していたが、近年雑木が生育して草が減少したため、郷中で相談して同1日に雑木や松を伐採した。[史料27](後述)によると、小様村は、①近年塚之台と関根台<sup>(注22)</sup>を開発したために草肥需要が高まったこと、②阿仁銅山へ材木や米を運送する牛馬が頻繁に往来するようになり、草が食い尽くされたことを理由に、採草地の確保を喫緊の課題としていた。同所を御林と主張する土倉村は、小様村の行為を荒瀬村本郷に報告し、荒瀬村本郷は早速小様村「親郷」の吉田村肝煎へ抗議したが<sup>(注23)</sup>、同3日には小様村郷人50～60人が再度伐採を断行した。

これを受けた荒瀬村本郷は、ひとまず手近の銅山木山役所へ争論決着までの伐採差し止めを出願するとともに、吉田村肝煎へ翌日の見分立ち会いを要求した。しかし、翌4日に同村の肝煎・郷人は現れず、同5日荒瀬村本郷は改めて藩による見分と裁定を出願した。

ただし、検使の派遣と見分は「雪路」を理由に「来春雪消」まで待つよう命じられ([史料26])、反対に素早い対応をみせていたのは、伐採差し止めを出願された銅山木山役所であった。[史料21]

は、同10月に土倉村の地主・長百姓らが、銅山木山役所に詰めていた青木左一兵衛と生沢東に提出した返答書の控えである。本史料によると、青木らは「家之上」などを見分し、小様村から事情を聴取した上で、荒瀬村へ御林の境などについて尋問した。しかし、両者の主張に大きな変更はなく、争論の決着は最終的に文政13(1830)年まで待たねばならなかった。

[史料26]は、同13年4月に荒瀬村本郷の肝煎・長百姓と土倉村の地主・長百姓が検使へ提出した返答書の控えである。本史料によると、同12年春に予定されていた検使派遣は実行されず、荒瀬村はその後2度にわたって裁定を出願し、ようやく翌13年4月6日になって検使の吟味が実現した。吟味の過程で、藩は土倉村が御林の境界を誤認しており、「家之上」は御林の範囲外にあって、小様村の主張する通り同村の採草地に間違いないと結論した。

ただし、「数十年」にわたって同所の林を保護・育成してきた土倉村と荒瀬村は納得できず、安永期(1772～81)の塚之台開発に伴う関普請を引き合いに出し、従来通り「家之上」を御林として認定してくれるよう主張した。すなわち、塚之台開発の際、土倉村の御林に支障のないよう関を普請することが小様村へ命じられたのであるから、当時同村も「家之上」を御林と認識していたはずであると論を展開したのである。

以上を経た文政13年10月、本一件の評議結果をまとめた書付が、検使から郡方吟味役に示された。その写しが[史料27]である。本史料によると、土倉村御林一件は、御林境から「村居後口山処」(家之上)までを従来通り両村の採草地にすることで落ち着いた。土倉村の主張は認められなかったが、同村は裁定前に雑木の下付などを出願していたようで、この点については許可された。

#### 4.4.4 文化～安政期の大石沢山論

この大石沢の山論は、先の土倉村御林一件よりも、複雑な過程を辿る。順を追ってみていこう。

まず[史料19]は、文化13(1816)年に荒瀬村本郷の肝煎・長百姓と土倉村の地主・長百姓が作成した願書の控えである。冒頭では、明和9(安永元・1772)年の裁定で小様村と土倉村の境が「是迄之通覚形」とされた旨が確認されている。なお史料

中で明和元辰年とあるのは明和9年の誤りである。

本史料によると、文化12年に小渕村から、大石沢の下平は従来小様村の放牧地であるにもかかわらず、土倉村が利用していることについて苦情が持ち込まれた。対する土倉村は、同所は先年より土倉村と大石沢村の採草地・放牧地であると訴えた。そこで、「先規覚形」を確認すべく、荒瀬村は「親郷」の吉田村へ見分を求めたものの、従来明確な境はないので見分は不要であるとの返答があった。そこで、荒瀬村は検使の見分により、「先規覚形」の通り同所を土倉村と大石沢村の採草地とし、放牧地も別途命じてほしいと出願した。

この争論の結果は、[史料35]（後述）にみられる。本史料によると、同13年には検使が派遣されたが、村方で議論を尽くさないまま訴願に及んだことを叱責され、十分に相談してから再度上申するよう命じられた。そこで、荒瀬村は見分の延期を申し入れ、小様村単独の利用を容認する旨を吉田村へ示談し、内済している。

この大石沢の山論は、嘉永期になると、同沢の上平を争点として新たな局面をみせる。[史料34]は、その当事者となった土倉村の五郎兵衛が、大石沢上平の林をめぐる争論の経緯を説明した書付である。年欠であるが、嘉永3（1850）年の作成と推定される。

本史料によると、五郎兵衛は先年から大石沢上平の林を保護・育成し、薪に加工して、その「余勢」（稼ぎ）で相続してきた。同所は、安永期（1772～81）に諸物資運送用の牛280疋を他領から雇用するにあたり、採草地として銅山方へ「御貸上」になったが、結局雇用は中止されたため、同人は引き続き林を育成してきた。こうしたなか、五郎兵衛は文化9（1812）年に「諸繫」を滞納し、家財道具と大石沢上平の林を引き上げられたが、翌年には親類の助力を得て滞納分を納入し、菩提寺を通して本郷肝煎から同所を取り戻したという。

ところが、文政13（1830）年、五郎兵衛が阿仁銅山へ渡世に出掛けていた間に、同所の一部が土倉村地主の藤右衛門らによって、小様村枝郷の相滝村へ売却されてしまった（[史料33]）。これを知らなかった同人は、嘉永2（1849）年から大石沢上平の滝之沢で製炭を開始し、阿仁銅山へ上納していたが、9月には同所の購入を主張する相滝村長兵衛が製炭を差し止めた。当惑した五郎兵衛は、長

兵衛に事情説明を要求したものの返答がなかったため、調停を荒瀬村の箱番<sup>（注24）</sup>へ出願した。この際の願書が、[史料33]である。

事件の経緯を以上のように説明した五郎兵衛は、[史料34]の後半で文政13年の買入証文<sup>（注25）</sup>に疑念を向け、印形などの吟味を求めた。特に、長兵衛が当該証文を同13年から所持していたなら、天保9（1838）～10年における大石沢一件（表5参照）の吟味時に提出したはずであるのに、そのような事実はないと訴えた。このように、五郎兵衛は当該証文が偽文書である可能性を示し、従来通り同所の利用を認めてほしいと主張したのである。

この大石沢上平の売却問題が、その後どのように吟味されたのかは[史料35]から窺える。本史料は、安政4（1857）年に荒瀬村の肝煎・長百姓と土倉村地主の東左衛門が作成した願書の控えである。これによると、当事者である売主は全員が死亡しており、ほかに売買を記憶している者もいなかった。そこで、「年番」<sup>（注26）</sup>の小又村と「組合肝煎」が本件を吟味し、証文がある以上、売却されたことに相違はないため、元銭に利息を加えた額を買主へ返して決着するよう結論された<sup>（注27）</sup>。先述した五郎兵衛の主張がどのように処理されたのかは不明である。

しかし、上記の結論を得ても、大石沢をめぐる荒瀬村と小様村の争論は、根本的に解決しなかった。同じく[史料35]によると、小様村は安政4年春から大石沢上平で製炭を開始した。同所を土倉村の土地と認識する荒瀬村肝煎らは吉田村へ掛け合い、大石沢のうち下平は文化期に小様・荒瀬両村による入会利用と決定されたが、そのほかは従来自村が利用してきた場所であるはずだと主張した。加えて、そもそも境が確定されておらず、先年からの「覚形」とされているため、このように苦労すると述べている。

また、大石沢下平の揚ケ之上は、文化期には荒れていたものの（前掲[史料19]参照）、起こし返して天保2（1831）年に検地されたが、水不足のため嘉永2（1849）年から「休ミ高」として出願し、耕作できていなかった。そこで、「右沢（大石沢）木立之分」を水野目林に命じられたいとの出願もなされた。

以上のように、小様村と荒瀬村の境が確定していない以上、山論の再発は不可避であった。した

がって、この水野目林の設定願いには、水源涵養だけでなく、大石沢の林を水野目林として自村の禁伐林に指定してもらうことで、さらなる争論を回避する意図もあったと推測される。

再述となるが、秋田藩では、村方が郷林を育成する際、藩に禁伐の旨が記された御札の下付を出願することがあった。このように、森林資源の管理を担う村が藩権力を積極的に利用していこうとする点は、秋田藩の大きな特徴と考えられる。この背景には、森林に対する同藩権力の強力さと、これを認める村側の認識があったと考えられる。

#### 4.4.5 慶応期における土倉村の所属問題

以上のように、小様川流域における隣村との争論は、幕末まで継続した。こうした状況を受け、慶応期(1865～68)には、土倉村を荒瀬村から分離し、小様村に附属させることになった。

【史料37】は、慶応2(1866)年に荒瀬村と土倉村が、土倉村の小様村附属を受諾した際の史料である。両村による願書の写しと、土倉村の当高・検地帳が書き上げられている。まず、土倉村の郷中・地主・長百姓が連名で提出した願書によると、土倉村は小様村との境争論などで従来苦勞し、往々両村のためにもならないため、以後小様村へ附属するよう同4月に命じられた。そうすれば、採草地は「惣入会」になり、大石沢上平は従来通り林を保護・育成し、「親沢より下滝之沢迄」は大石沢村五郎兵衛に3分の1を任せ、3分の2は「惣割合」とし、下平は放牧地にするとして、小様村への附属を受諾している。荒瀬村の肝煎・同見習・長百姓が提出した願書も、土倉村による願書の通り取り扱われたいと結んでいる。

このように、荒瀬村側は、小様川流域における森林の利用方法の確定を主な論点にして、小様村への附属を受諾している。土倉村と小様村の山論は幕末まで継続し、最終的に土倉村は荒瀬村の「飛入高」という状態を解消して小様村に附属することになったのである。

#### 4.5 小括

阿仁銅山山麓に位置する荒瀬村では、阿仁銅山向けの材木・薪炭生産をはじめ、関普請に用いる榎木などの生産や肥料・飼料となる草の採取、スギの植栽や森林の耕地化など、多様な目的による

森林の利用がみられた。こうした森林の利用をめぐる枝郷間で争論が発生した場合には、肝煎を中心とする本郷と枝郷の村役人が、共同でその調停にあたった。

また、彼ら村役人は、村内の森林を利用できなくする藩の命令に対し、その中止や代替地の確保を要求し、一定の成果を得ることができた。そこでは、藩による村方の森林資源への介入がみられる一方で、反対に百姓による藩営林の利用を藩が容認する様子も確認できる。さらに、村方が郷林や水野目林などを育成する際に、藩による禁伐の保証を得るという行為からは、森林に対する藩権力の強力さと、それを認めつつ自身の利益に結びつけようとする村のしたたかさを窺うことができる。ここに、秋田藩領の村々における森林資源管理の大きな特質が表現されていると考えられる。

さらに、隣村との間で森林の利用をめぐる争論が発生した際には、肝煎を中心とする本郷の村役人が、当事者である枝郷の村役人と緊密に連携しつつ、村の代表として隣村の代表と交渉に臨む姿も確認できた。争論の激しさから、内済できずに藩による裁定を出願することもしばしばあったが、その過程—検使の派遣願い、見分の案内と立ち会い、取り調べに対する返答書の作成など—からは、本郷の肝煎・長百姓と枝郷村々、および隣村と藩との間の合意形成過程を読み取ることができる。

山間部の村落にとっての森林は、平場村落のそれと比べて、極めて重要な価値を持つ。この森林の利用をめぐる争論と交渉の過程が克明に記された湊家文書からは、数多くの枝郷を有する荒瀬村の村役人らが、その広域の村全体の相続を安定したものにするために重ねた営為の跡が窺われよう。

### 5. むすび

以上をまとめると、まず荒瀬村と枝郷村々のまともりは、17世紀の段階で「荒瀬八ヶ所」という広範な領域として形成されている。さらに元禄11(1698)年に至り、新たな本郷肝煎の設置というかたちで公認され、大阿仁川上流の村々は荒瀬村の枝郷として再編されたことになる。この広域的な村政運営は、本郷肝煎に統括される一方で、枝郷レベルの地主も公的な村役人としてそこに関与し、すぐれて重層的な村政システムを構成していたのである。後段で詳述したように、森林資源管理の



問題、とくに争論の解決過程や藩役人との折衝の場面には、広範囲にわたる村々とその村役人を主体とした紛争の処理や合意形成のありかたを明瞭に見て取ることができる。

解題を閉じるにあたって、近代以降の展望にも触れておこう。「荒瀬村肝煎」の文言は明治4(1871)年を最後に見られなくなるが、大区小区制が施行された明治5年以降にも、湊家は小区戸長および副戸長として村政運営に携わっており、近世の体制からの連続性が色濃く認められる。湊家にはこの時期の戸長の公務を記した日記が断続的に遺されているが、明治10(1877)年の「公私要用控」および「日記」によると、その職務は、上位機関への届出や陳情、会議への出頭にはじまり、地租金・民費区費・雪車税の徴収や不納者への督促といった一連の税務、給料・旅費・手当金などの出納管理、役人の地域巡回への対応、その他住民間の係争や諍いの仲裁など、多岐にわたっている。

こうした行政事務や地域生活に関わる案件は、多くが戸長を通して各村に伝えられた。その際の受け皿となり意志決定の主体となったのは、従来からの本郷一枝郷関係であった。話し合いの場は、「支郷村々伍長会議」「支郷寄合」などと呼称され、会議で「本郷枝郷熟議」「支郷伍長相談」がなされた記事も散見する。具体的な取り決めとしても、たとえば普請本郷枝郷惣持、旅費本郷枝郷合力、神社修繕費本郷枝郷分寄付など、普請の人足や入用の負担を本郷と枝郷の村々で共同負担する機会が多い。本郷一枝郷関係が明治期を通じて変容していく過程は、別途検討せねばならないが、すくなくとも明治初年の大区小区制のもとで、本郷一枝郷関係という仕組みが地域住民の意識の根底にあったことは十分に窺い知ることができよう。

## 付記

本稿は、2010～2013年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「東北地方における地域資源の管理・利用に関する社会史的研究：国有林資料を中心に」(課題番号22380079、研究代表者加藤衛弘)、および2014年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「江戸時代における林政の展開と森林資源の管理・経営システムに関する研究」(課題番号26・8649、研究代表者芳賀和樹)による成果の一部である。

## 注

- (1) 林野庁森林資源現況総括表(平成24年3月31日現在)。http://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h24/3.htmlより作成(2014年8月30日最終閲覧)。
- (2) 国有林史料に関する私たちの研究が2007年4月7日の『日本経済新聞』文化欄に大きく掲載され、日本学術会議も対応に乗り出した結果、同年9月末に成立した福田康夫内閣が昭和20(1945)年以前の旧営林局史料の国立公文書館移管を決定した。同史料は即刻同館つくば分館へ移管され、総数1万7561冊に上る史料は、移管後約1年という驚異的なスピードをもって、2009年6月24日から公開された。しかし、各森林管理局の現用資料の中にも重要な歴史資料が数多く残されており、今後国有林史の研究においては、国立公文書館つくば分館と森林管理局両者の史料研究が重要であろう。
- (3) 以下のような既発表論文がある。
  - ・芳賀和樹(2014)「寛政期の秋田藩林政と藩政改革」『徳川林政史研究所研究紀要』(48)、pp.39-57.
  - ・芳賀和樹(2013)「秋田藩阿仁銅山掛山における御用焼木生産—近世後期の請負生産と森林資源の持続的利用技術—」(河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像—「長期の一九世紀」を生きた地域—』岩田書院) pp.77-107.
  - ・芳賀和樹(2013)「文化期秋田藩能代木山における林政改革の展開—林政執行体制の整備を中心に—」『徳川林政史研究所研究紀要』(47)、pp.57-81.
  - ・成田雅美(2013)「廃藩置県後の官林伐木規制」『徳川林政史研究所研究紀要』(47)、pp.83-98.
  - ・加藤衛弘・芳賀和樹(2013)「『明治五壬申年調 官林盛衰概略考』の解題と翻刻—秋田県官林が秋田藩営林から継承した森林資源の記録—」『徳川林政史研究所研究紀要』(47)、pp.137-153.
  - ・芳賀和樹・加藤衛弘(2012)「19世紀の秋田藩林政改革と近代への継承」『林業経済研究』58(1)、pp.14-26.
  - ・芳賀和樹(2012)「文化期における秋田藩能代

- 木山の林政改革への着手—木山方吟味役小野崎又兵衛の調査・献策を中心に—」『徳川林政史研究所研究紀要』(46)、pp.39-60.
- ・芳賀和樹 (2011)「近世阿仁銅山炭木山の森林経営計画—天保14年炭番山繰を中心に—」『林業経済』64(7)、pp.19-36.
  - ・芳賀和樹 (2011)「近世阿仁銅山炭木山における御用炭生産—直釜の構造とその変容—」『徳川林政史研究所研究紀要』(45)、pp.75-92.
  - ・成田雅美 (2011)「東北森林管理局所蔵史料の構成と特徴」『徳川林政史研究所研究紀要』(45)、pp.93-105.
  - ・脇野 博 (2011)「一九世紀秋田藩林政と近代の秋田杉」『徳川林政史研究所研究紀要』(45)、pp.161-169.
  - ・脇野 博 (2011)「旧秋田営林局史料から見た明治初期秋田県下の官林」『秋大史学』(57)、pp.65-71.
  - ・脇野 博 (2010)「青森県下の国有林経営と地域社会 (2009年度シンポジウム 国有林史料から見た新しい地域史像)」『農業史研究』(44)、pp.16-26.
  - ・脇野 博 (2009)「秋田藩林政と森林資源保続の限界」『徳川林政史研究所研究紀要』(43)、pp.109-118.
  - ・加藤衛弘 (2006)「世界史的に貴重な国有林史料—その調査と保存— (動向 アーカイブズ学史料保存問題)」『地方史研究』56(4)、pp.88-90.
  - ・加藤衛弘・太田尚宏 (2006)「国有林史料の調査と近世・近代史研究への展望」『徳川林政史研究所研究紀要』(40)、pp.1-14.
  - ・加藤衛弘 (2006)「東北中山間地域の歴史的展開に関する基礎的研究—森林管理局・森林管理署所蔵史料の把握を中心として— (新年特集号 共同研究の成果とゆくえ・共同研究の現在)」『日本歴史』(692)、pp.104-106.
- (4) 福武直 (1949)『日本農村の社会的性格』東京大学出版会. 福武直編 (1954)『日本農村社会の構造分析—村落の社会構造と農政浸透—』東京大学出版会. 福武直・塚本哲人 (1954)『日本農民の社会的性格』有斐閣.
  - (5) 湊榮興・智子編集・発行 (2008)『湊文書』. 奥付には解説者として吉田英一氏、春日克男氏のお名前をあげてある。とくに近隣の比立内地区在住の研究家である春日克男氏は、自身でも古文書の学習会を開くなどの活動に携わっていたことから、『湊文書』の翻刻に協力を仰いだという。
  - (6) この“枝郷の枝郷”は、たとえば「本村枝村書上帳」のレイアウト上も一文字ほど下げて書かれており、当時、通常の枝郷と区別する意識があったことは確実である。このように本郷から枝郷へ、そして“枝郷の枝郷”へと繋がる村請制の重層的構成に関しては、別稿で詳しく考察したい。
  - (7) ここでいう捨高とは、あとの「御本田之内より右之高御指引」「式ツ五歩成より右捨高御引落」などの用例にもあるように、皆済計算の際に、川欠などを理由として、検地時点の高から控除される高を指す。
  - (8) ただし寛延4年の時点で、勘七は「御高並万事郷中諸役」を拒否して銅山に入り、切支丹御調帳からも省かれている。[史料10]を読むと、この時点で勘七を訴え出るかどうかを「七ヶ村肝煎中」が協議している事実がわかる。文脈からすると、切支丹御調帳から省く判断も「七ヶ村肝煎中」によっている。このような複数の本郷肝煎による村政運営システムについては別稿を準備している。
  - (9) 秋田県編 (1964)『秋田県史』第2巻近世編上、秋田県、pp.453-462.
  - (10) 岩崎直人 (1939)『秋田杉林の成立並に更新に関する研究』興林会、p.54. 元文5年の設定時点には25か所であったが、近世後期には50か所となった。岩崎直人 (1939)『秋田杉林の成立並に更新に関する研究』興林会、p.56、pp.66-68.
  - (11) 芳賀和樹 (2011)「近世阿仁銅山炭木山の森林経営計画—天保14年炭番山繰を中心に—」『林業経済』64(7)、p.24.
  - (12) 岩崎直人 (1939)『秋田杉林の成立並に更新に関する研究』興林会、p.67.
  - (13) 元文5年5月「御留山御文言之写し」(湊榮興家文書35、豎帳1)。これを含め、秋田藩の「銅山掛山」と地元村々との関わりを知らせる文書については、別途翻刻と解題を公表する予定である。

- (14) 芳賀和樹 (2011)「近世阿仁銅山炭木山における御用炭生産—直釜の構造とその変容—」『徳川林政史研究所研究紀要』(45)、pp.79-89.
- (15) 秋田県編 (1964)『秋田県史』第2巻近世編上、秋田県、pp.485-492.
- (16) 秋田県編 (1964)『秋田県史』第2巻近世編上、秋田県、p.489.
- (17) 関林は田林([史料18])・関根林([史料17])とも称されたが、関林に統一する。
- (18) 支郷における山論の事例は、[史料16]・[史料25]にもみられる。この2つの争論の要点については表5参照。
- (19) ここでは、水野目林が関普請に用いる槌木などの供給林としても捉えられている。
- (20) 下付した薪を売却することで、馬草調達費を弁用することが想定されたと考えられる。
- (21) 森林をめぐる阿仁銅山との摩擦は、天保8年の[史料30]・[史料31]、同9～10年の大石沢一件からも窺える。これらの争論の要点については表5参照。
- (22) 先述したように、明和期の村境確定問題で、土倉村による関根台開発は認められなかった。その後、小様村による開発が進められたのであろう。
- (23) [史料27]によると、小様村は「吉田村支配郷」と表現されていることから、[史料20]でいう「親郷」とは小様村にとっての「本郷」を指すと思われる。これに従えば、少なくとも文政期には小様村は独立した本郷から、吉田村の枝郷になっていたと推測される。同様の「親郷」文言は[史料19]にも見られる。
- (24) 湊榮興・智子編集・発行 (2008)『湊文書』、p.412によると、箱番とは「郷銭の出納を司る役」で、「長百姓から選ばれる」という。
- (25) 当該買入証文は、湊家文書に残されている([史料24])。
- (26) 一般に秋田藩領では、いくつかの本郷村を束ねた親郷—寄郷関係が編成されていたが、両阿仁地域では、親郷の代わりに年行事が置かれた。「年番」とは、この年行事を指すと推測されるが、今後の検討を待ちたい。
- (27) 同史料によると、争論落着の際、小様村からは同所が自村の土地であるとの認識を前提に、買主から同所を引き上げて伐採し、採草地にしたいとの出願があったが、認められなかったようである。

(受付2014年9月1日、受理2014年10月7日)



# 翻刻 秋田藩領荒瀬村肝煎・湊榮興家文書

## 凡 例

- (1) ここに翻刻するのは、秋田県北秋田市阿仁荒瀬地区に所在する湊榮興家所蔵文書の一部である。
- (2) 文書は年月日順に配列し、**【史料1】**のように通し番号を付した。
- (3) 文書番号は、筆者らが目録化の際に与えたものによった。
- (4) 漢字は常用漢字を使用した。
- (5) 変体仮名は仮名に改めたが、助詞の「者」「江」「而」「茂」「与」などは残した。
- (6) 適宜読点（、）と中黒（・）を補った。
- (7) 虫喰いや破損によって判読できない文字は、該当する文字数を□で示した。文字数が判断できない場合は〔 〕とした。内容が推定できる場合は（ ）内に注記した。
- (8) 明らかな誤字や当て字は、(ママ)とするか、正しい字を（ ）内に注記した。ただし頻出するものは初出箇所に限った。
- (9) 見消やそれに相当する抹消箇所には抹消線を付した（貼紙による修正も同様とした）。文字が完全に塗抹されている箇所は■で示した。抹消後に書き加えられた文字がある場合は、抹消部分の直後に示した。
- (10) 平出、闕字は原文のままとした。改行は原則として再現しなかった。
- (11) 割書は一部をのぞき再現せず、〔 〕で示した。
- (12) 振り仮名は原文のまま再現した。
- (13) 下札や附箋による加筆は、該当箇所に「 」内にいれて細字で示した。
- (14) 原文で朱書された文字は、カラーで示した。
- (15) 合点は「\」で示した。
- (16) その他、読みやすさを考慮し、一部の見出し等をゴシック体で表記した。原文で細字で書かれた文字は、その一部を再現した。

## 【史料1】

天和2(1682)年7月28日「御証文写(小又沢之内鷺之瀬上台など九ヶ所開発許可につき)」

(湊榮興家文書11、状1)

### 御証文写

- 一、大阿仁分小又沢之内鷺之瀬上台野形、同沢之内地蔵台、一大又沢之内打当村ゆる木石、同所之内野尻村、同比立内村菅野谷地、同沢之内いも台、同おわぶち台、同浦田村上惣戸、同本城村之内御本畑返り野開共ニ、右九ヶ処岩関等貴殿入目ヲ以自今以後普請被成、御忠進開被致度由、依之為検使ト平石藤右衛門・神沢八郎左衛門遣候所ニ、御蔵分之本田右開へ水不足無被遣候ハ、別而障り無之由、見分致候通御評定ニ申立被仰付候ニ付、本田右開へ水不足無キ様ニ御普請可被成事
- 一、於向後若本田右開之障ニ成候由何方より成共申出候ハ、検使遣見分之上障リニ成候ハ、御忠進開可被相止候事
- 一、右御忠進開貴殿入目ヲ以被致候ニ付、起高次第其内御定之通三ヶ可被下事

天和二年戊七月廿八日

黒沢太左衛門

中川宮内

梅沢藤十郎殿

### 御指紙写

- 一、大阿二(仁)笑内村之内地蔵台新開之事相心得候、本田之障リニ成候ハ、可被相止候、地形様子ニより可為歟先次第、田畑不成候前跡ニより蒔付候よしや被捍間敷候、仍而如件
- 延宝五年巳正月廿二日 梅沢半右衛門
- 梅沢茂右衛門殿

## 【史料2】

宝永2年(1705)11月「写(荒瀬村黒印御定書)」

(湊榮興家文書115、状1)

### 写

〔 〕役相定條々

免□(三)ツ成

高三百六拾四石四斗六升壺合 本田

同免

同九拾石六斗四升 新田

同式ツ五歩成

同百四拾六石八斗六合 新田

[ ] (同式ツ) 成

同五石四斗三升八合

新田

当高ノ式百九拾石五斗三升三合

此物成百七拾四石三斗式升

但水損干損其年之見分

次第たるへし

一、六ツ成高百石ニ付物成六拾石宛、蔵入□ (給)  
分共ニ百姓可納之事

一、升者判之升ニ而可計之、若悲 (非) 分ニ計取  
者於有之者急度可致披露事

一、口米之儀物成六拾石ニ付米壺石式斗宛可出之  
事

(28 条略)

右條々可相守之者也

宝永二年酉十一月日御判

### [史料 3]

#### 正徳元年 (1711) 8 月 18 日「宮御調覚帳」

(湊榮興家文書 20、豎帳 1)

(表紙)

「正徳元年

宮御調覚帳

卯八月十八日」

今度当村寺社林御吟味ニ付、別当肝煎老百性 (姓)

御先立仕無残御調為成申覚

あらせ村分

一、薬師堂社地〔南北六拾五間、東西百四拾四間〕、  
内〔六——、八——〕堂庭之内、但し南ハ  
小沢より北ハ堂ノ沢迄、西ハ堂ノ後中台より東  
ハ川端迄、別当水無村修験常覚院、右ハ片平山  
ニ而杉大小八拾五本、其外雑木少々御座候

茅艸分

一、山神堂社地〔南北四拾八間、東西六拾三間〕、  
内〔五——、六——〕堂庭之内、但北ハ入  
水せきより南ハ市兵衛畑際迄、東ハ堂の後十二  
ノ沢より西ハ道端迄、別当右同人、右者平地ニ  
而杉大小四拾九本、雑木御座候

右同村

一、地藏堂社地〔東西四間、南北六間〕、但三方ハ  
畑間、西ノ方ハ海道切、別当右同人、右者平地  
ニ而大杉壺本ニ御座候

伏影村分

一、白幡明神堂社地〔南北式拾八間、東西四拾四間〕、  
内〔三——、四——〕堂庭之内、但北ハ菊

助畑際より南ハ半助畑際迄、東ハ堂後堰端より  
西ハ藤吉田端迄、別当右同人、右者平地ニ而杉  
大小三拾八本、其外雑木御座候

右同断

一、山神堂社地〔南北十四間、東西廿式間〕、内〔三  
——、四——〕堂庭之内、但北ハ甚九郎畑  
際より南ハ彦右衛門田端迄、東者喜八郎畑際よ  
り西ハ彦右衛門田端迄、別当右同人、右ハ平地  
ニ而杉大小拾九本、其外雑木御座候

笑内分

一、山神堂社地〔東西四拾間、南北四十四間〕、内  
〔三——、四——〕堂庭之内、但西ハ堂ノ後  
水上沢出口より東ハ惣左衛門畑際迄、北ハ同人  
畑際迄、南ハ三之丞畑迄、別当右同人、右者台  
ニ而杉大小廿四本、其外雑木御座候

あらせ川分

一、弁才天堂社地〔九尺、九尺〕、別当右同人、右  
者沢之内ニ而木立無御座候

右同断

一、観音堂社地〔東西三十式間、南北三十八間〕、  
内〔四——、六——〕堂庭之内、但西ハ台  
頭<sup>カシラ</sup>より東者海道切、南ハ北小沢間、別当同人、  
右ハ片平山ニ而雑木柴立少々御座候

根子村分

一、観音堂社地〔南北三十八間、東西相廻り八十間〕、  
内〔三——、三——〕堂庭之内、但北ハ堂  
ノ後平頭より南ハ田ノ上関端切、東者たるミ  
より西者沢田左衛門四郎田ノ上迄、別当右同人、  
右者片平山ニ而杉大小拾本、其外雑木柴立御座  
候

右同断

一、山神堂社地〔南北拾八間、東西五十式間〕、内  
〔四——、四——〕堂庭之内、但北ハ隼人田  
ノ際より南ハ小関切、西ハたるミたるみより東  
ハ堤根迄、別当右同人、右ハ台ニ而杉大小拾式本、  
其外雑木少々柴立御座候

比立内分

一、天神堂社地〔南北十八間、東西廿六間〕、内〔式  
——、三——〕堂庭之内、但北ハ堂ノ後山  
際より南坂ノ下五右衛門畑際迄、東西ハ五左衛  
門畑間、別当右同人、右ハ台ニ而小杉三本、其  
外雑木少々柴立御座候

右同断

一、薬師堂社地〔東西十八間、南北三十三間〕、内

〔三——、三——〕堂庭之内、但西ハ森下より東ハさまの下迄、北ハ堂ノ後山ノ根より南ハ御坂下関端迄、別当右同人、右ハ台ニ而杉大小廿七本檜八本小杉壺本雜木少々御座候

右同断

一、薬師堂社地〔東西六間、南北廿貳間〕、内〔三——、五——〕堂庭之内、但東西ハ兩平切、南ハ堂ノ後小沢より北ハ鳥井前間右衛門・孫三良畑際迄、別当右同人、右ハ山ニ而杉大小三十壺本、其外雜木柴立御座候

右同断

一、八幡堂社地〔南北十壺間、東西拾三間〕、内〔貳——、三——〕堂庭之内、但小沢より東ハ堂ノ後より馬道林林より南ハ御坂下わかり道迄、西ハ小沢より東ハ堂ノ後沢道迄、別当右同人、右ハ山ニ而杉大小八本、小松貳本其外雜木柴立御座候

右同断

一、稻荷堂社地〔東西貳十五間、南北三十四間〕、内〔三——、三——〕堂庭之内、但東ハ右古畑際より西ハ小沢迄、南北野境迄、別当右同人、右ハ山ニ而杉廿九本、其外雜木少々御座候

右同断

一、熊野堂社地〔東西三十九間、南北八十間〕、内〔四——、四——〕堂庭之内、但シ西ハ堂ノ後小沢より東ハ半左衛門屋敷際迄、別当右同人、右ハ片平山ニ而杉大小廿四本檜壺本雜木柴立御座候

右同断比立内村

一、観音堂社地〔南北廿五間、東西三十間〕、内〔三——、四——〕堂庭之内、但北ハ野野山境より南ハ久作畑際迄、西ハ堂ノ上平頭より東ハ関端迄、別当右同人、右ハ片平山ニ而杉大小拾七本松壺本雜木少々御座候

右同所

一、阿弥陀堂〔南北拾間、東西十貳間〕、別当道心者念心、右ハ平地ニ而小杉壺本雜木少々御座候

右同断

一、熊野堂社地〔東西三十間、南北三十貳間〕、内〔貳——、三——〕堂庭之内、但西ハ蟹沢より東ハ山道迄、北ハ堂ノ後山道より南ハ御坂下海道端迄、別当右同人、右ハ片平山ニ而杉大小九本、其外雜木大小柴立御座候

打当分

一、山神堂社地〔南北十六間、東西廿間〕、内〔四——、四——〕堂庭之内、別当右同人、右者四方野形森ニ而雜木大小少々小杉壺本御座候

右同断

一、八幡堂社地〔南北八間、東西貳間〕、但三方ハ関、西ノ方古屋敷根迄、別当右同人、右ハ平地ニ而小杉八本御座候

右同断

一、鳥海権観権現堂社地〔南北廿四間、東西四十六間〕、内〔貳——、三——〕堂庭之内、但北ハ堂後平■頭より南ハ関端迄、西ハ馬道より北ハ郷林境迄、別当右同人、右ハ片平山ニ而小杉三本雜木大小柴立御座候

打当分小倉村

一、熊野堂社地〔東西八間、南北廿貳間〕、内〔貳——、貳——〕堂庭之内、但西ハ堂脇水上沢より東ハ郷村境切、北ハ堂後水上沢より東南ハ甚左衛門屋敷上迄、別当右同人、右ハ片平山ニ而道筋共ニ杉大小雜木柴立御座候

右之外外寺社林一切無御座候、御証拠迎ハ先年より無御座候得共者是迄只今迄立林ニ罷有申候、為其別当肝煎地主老百姓判形仕指上申候、以上

別当水無村

正徳元年

修験

卯八月十八日

常 覺 院

別当荒瀬八ヶ村之内

比立内道心者

念 心

荒瀬村

肝煎

六郎右衛門

同村

老百姓

善 左 衛 門

同村

老百姓

与 右 衛 門

茅艸村

地主

長 之 丞

伏影村

地主

喜 助



笑内村	本村	
地主	荒瀬村	先年小測村支郷ニ御座候所ニ元禄十
助 右 衛 門		丑年より相分り肝煎御立被成候、尤
根子村		仙北境ト申御銅山近在ニ御座候故肝
地主		煎立可申在所ニ御座候由被仰付候、
平 右 衛 門		殊ニ御百性中茂荒瀬村ニ肝煎御立被
比立内村		下候得者勝手ニ御座候由申上候、
地主	荒瀬村支郷	
久 作	荒瀬川村	家数貳拾七軒、何年以前ニ相分り申
比立内村		候哉年号相知れ不申候
老百性	荒瀬村支郷	
久 兵 衛	萱草村	家数貳拾四軒、右同断
打当村	茅草村支郷	
地主	佐山村	家数六軒、何年已前ニ相分り申候哉
儀 兵 衛		年号相知れ不申候
あらせ川村	荒瀬村支郷	
地主	笑内村	家数貳拾貳軒、右同断
与惣右衛門	荒瀬村支郷	
沢部甚左衛門殿	根子村	家数三拾軒、右同断
村上六郎右衛門殿	荒瀬村支郷	
大貫 円之 丞 殿	伏影村	家数拾貳軒、右同断
	伏影村支郷	
	おわ測村	家数三軒、何年已前ニ相分り申候哉
		年号相知れ不申候
	荒瀬村支郷	
	比立内村	仙北郡と秋田郡ノ境ハ、仙北郡下檜
		木内村ノ内小波内ト大阿二（仁）荒
		瀬村支配比立内村小台倉沢ノ内中ノ
		又山峯切水落次第境ニ御座候
		仙北郡上檜木内ノ内野田村と大阿仁
		比立内村小台倉沢ノ内境ハ、大仏山
		峯切水落次第二境ニ御座候
		仙北郡上檜木内ノ内坂本村と大阿二
		比立内村ノ境ハ、繋沢かきかけより大
		仏山迄峰続キ水落次第ノ境ニ御座候
	比立内村支郷	
	岩野日沢村	家数七軒、右同断
	比立内村支郷	
	幸屋渡村	家数拾六軒、右同断
	比立内村支郷	
	幸屋村	家数拾七軒、何年以前ニ相分り申候
		哉年号相知れ不申候
	比立内村支郷	
	大平村	家数三軒、右同断

## [史料 4]

## 享保 8 年（1723）3 月 6 日「秋田郡大阿仁荒瀬村郡境本村枝村御高共ニ書上ヶ帳」

（湊榮興家文書 21、豎帳 1）

（表紙）

「 享保八年

秋田郡大阿仁荒瀬村郡境本村枝村御高共ニ

卯三月六日 書上ヶ帳

控 」

荒瀬村

御黒印高

免三ツ成

一、高三百六拾四石四斗六升壹合

本 田

同

同免

一、同九拾石六斗四升

新 田

同

免貳ツ五歩成

一、同百四拾六石八斗六合

新 田

同

免貳ツ成

一、同五石四斗三升八合

新 田

当高ノ貳百九拾石五斗三升三合

御蔵入

一、当高貳百七拾九石四斗四升五合 只今有高

御開御蔵入

一、同 貳拾貳石壹斗八升貳合 同新田

比立内村支郷

長畑村 家数六軒、右同断

比立内村支郷

巢生村 家数四軒、右同断

荒瀬村支郷

打当村 仙北郡ト秋田郡境上檜木内ノ内戸沢村かつちと大阿二打当村ノ境ハ、上ハやすノ森よりこまかた朴木坂鍵掛迄峯続水落次第境ニ御座候  
仙北郡上檜木内ノ内戸沢村ト大阿二打当村惣瀬沢ノ境ハ、鬼ヶ又トヘリ川いかり花峯切水落次第二境御座候

打当村支郷

中 村 家数拾八軒、何年已前ニ相分リ申候哉年号相知れ不申候

打当村支郷

戸島内村 家数拾三軒、右同断

打当村支郷

野尻村 家数七軒、右同断

打当村支郷

鳥越村 家数五軒、何年已前ニ相分リ申候哉年号相知れ不申候

打当村支郷

大倉村 家数八軒、右同断

荒瀬村支郷

土倉村 家数八軒、右同断

右之通荒瀬村御黒印高唯今有高共ニ相違無御座候、以上

享保八年卯

三月六日

石井八左衛門殿

荒瀬村肝煎

伊 左 衛 門<sup>㊟</sup>

荒瀬村地主

権 助<sup>㊟</sup>

萱草村地主

長 之 丞<sup>㊟</sup>

笑内村地主

太 治 兵 衛<sup>㊟</sup>

伏影村地主

松 兵 衛<sup>㊟</sup>

根子村地主

平 右 衛 門<sup>㊟</sup>

比立内村地主

久 作<sup>㊟</sup>

打当村地主

治 五 兵 衛<sup>㊟</sup>

[史料 5]

享保 12 年 (1727) 5 月 4 日「(荒瀬八ヶ所・小湊村御皆済目録写)」

(湊榮興家文書 26、状 1)

(端裏書)「御皆済」

延宝六午年御皆済目録写シ

壹石七斗貳升四合卯畑返リ御開扱より入

高四百八拾三石四升八合 荒瀬八ヶ所

内 壹石九斗 開忠進ニ肝煎ニ被下候跡より

同 四斗六升九合 川欠跡より

残高四百八拾石六斗七升九合

此物成三ツ納、百四拾四石貳斗四合

午畑返リ開入

高五拾貳石九斗九升五合 右同村開

内 八升 午川欠調川尻半兵衛

同 五斗五升 同畑返リ同

同 貳斗石貳斗九升 同開同

残高五拾石七升五合

此物成二ツ半納、拾貳石五斗壹升九合

元禄十三辰年御皆済目録写

高四百八拾三石九斗八升貳合 菊地十左衛門

荒瀬八ヶ所

内 壹石九斗 小湊村肝煎被下候跡より

同 壹石八斗七升六合 川欠除屋敷跡より

同 貳拾七石五合 辰より永荒調原井

同 拾三石八斗六升四合 同指引

残高四百三拾九石三斗三升七合

此物成三ツ納、百三拾壹石八斗壹合

高百拾七石五斗七升壹合 右同村開

内 八石貳石三斗九升 肝煎被下候跡より

同 壹石八升壹合 川欠跡より

同 貳石貳斗壹升八合 辰より永荒調石同人

同 壹石六斗壹升九合 同指引

残高百拾石貳斗六升三合

此物成貳ツ五歩納、廿七石五斗六升六合

白米~~ノ~~三石壹斗八升七合

天和三亥年御皆済目録写

但此帳小湊村荒瀬村一指引ニ

見得候、小湊村支配郷之時分

高八拾三石六斗九升八合

小湊村

内 壹石壹斗八升三合 川欠跡より  
 残高八拾貳石五斗壹升五合  
 此物成五ツ納、四拾壹石貳斗五升八合

高貳拾石六斗壹升貳合 同右村開  
 内 三斗九升貳合 亥ノ川欠調助川七右衛門  
 残高貳石貳斗貳升  
 此物成四ツ半納、九斗九升九合

# 宝永元申年別水御開御皆済目録写

高三拾石壹斗三升九合 御代官福地五左衛門  
 荒瀬八ヶ所

内 壹石貳斗四升六合 肝煎被下候跡より  
 同—七石貳斗壹升七合—同指引  
 残高貳拾八石八斗九升三合  
 此物成貳ツ半納、七石貳斗貳升三合

(付箋)「此捨り高天和式年御開帳内貳ツ五歩成高之内川欠捨り  
 申候所ニ、別水御開貳ツ成より引可取、御本田添開貳ツ五歩高  
 捨り高より内引被下置度候」

高五石六升九合 右同村  
 内 四斗貳升九合 川欠跡より  
 残高四石六斗四升  
 此物成貳ツ納、九斗貳升八合

右之通り御皆済目録写指上ケ申候、已上  
 享保十二年未五月四日

## [史料 6]

享保 12 年 (1727) 5 月「(枝郷土倉村川欠地の捨高  
 訂正その他につき願書)」

(湊榮興家文書 28、状 1)

(端裏書)「控」

御代官正田太郎右衛門殿申立候ハ、村々御高調  
 御用小松三左衛門殿・川井権八殿御出、捨り高  
 御吟味有高書上之節、御本帳古キ御張紙之内免  
 三ツ成高三斗九升貳合、天和年中荒瀬村枝郷土  
 倉村ニ而御皆済捨高直ニ候而引合不申候故吟味  
 致候へ者、小測村之内ニ三斗九升貳合先年川欠  
 在所覚無是捨高有是候、然ハ荒瀬村支配郷共ニ  
 元禄十一丑(ママ)年まで小測村ニ而支配仕候故、  
 其節免違ニ而小測村之内江入申候と存候、其以  
 後荒瀬村肝煎被立置、土倉村ハ荒瀬村よりへた、  
 り申候村故小測村支配ニ而罷有候所ニ、五年以  
 前御吟味ニ而荒瀬村御高之内故、此末荒瀬村ニ

而支配可致由被仰渡支配致候へ共、右違之義存  
 当り不申無調法ニ奉存候段申立候、御高調ハ捨  
 高ニ書上申候、右之外天和式年御開高之内七斗  
 九升八合免二ツ成と御座候へ共、先年より御皆  
 済ニハ貳ツ五歩ニ入御座候、其以後元禄十一寅  
 年ニ右高之内四斗貳升九合川欠ニ罷成候節右捨  
 高貳ツ成と免付被成候故、御皆済ニ茂貳ツなり  
 之内、別水御開之内ニ而御指引被成置候、尤  
 御墨(黒)印ニも宝永以前之事故貳ツ成高江入  
 御座候、右之外支配郷根子村ニ寛文御帳之内本  
 田開屋敷免三ツ成之所八升延宝六年ニ川欠ニ罷  
 成、右捨高御皆済ニ三ツ成高内ニ御座候間、右  
 捨高三ツ成之引ケニ被直置被下度段、去霜月中  
 申立候所ニ、御用御取込ニ而當春中御代官様ニ  
 而被仰立候ニ付、此度各々様御出ニ御座候間、  
 色々之次第共ニ委細申上候

一、免三ツ成高三斗九升貳合寛文十二年御本帳付  
 御本田ニ而捨高ニ罷成、天和式年亥四月助川七  
 右衛門殿御代四郎兵衛殿御調ニ御座候所ニ、右  
 捨高當村御皆済ニハ御指引無御座、小測村ニ而  
 四ツ五歩成之内より御指引御座候行違ニ罷成候、  
 右高之義ハ荒瀬八ヶ所之内ニ而御本田之内より  
 右之高御指引被成下候へ者可然存候段申上、段々  
 御吟味被成置御金蔵御本帳江茂御引合被遊候所  
 ニ、三ツ成之内ニ相極り申ニ付、色々之御皆済  
 共ニ御引合御覽被成候所ニ、右之通違ニ御座候  
 段得其意奉存候

一、免二ツ五歩成高七斗九升八合、古来之出高天  
 和式年御開高之内ニ御座候、右高之内元禄十一  
 寅年四斗貳升九合川欠ニ罷成、川上孫兵衛殿・  
 井上佐内殿・戸島弥太右衛門殿御調ニ御座候所  
 ニ、御皆済より御指引ニ者貳ツ成と罷成、別水  
 御開之内より御指引出申候得共、貳ツ成ニハ無  
 御座候間、御皆済より右四斗貳升九合貳ツ成之  
 内より御引被下、貳ツ成之所ハ右高程出高ニ被  
 成置、本田並之開貳ツ五歩成高より御指引被下  
 候へ者當り障り無御座候間、右之通ニ御直シ被  
 下度候と申上、此度御調之上御直シ被下置候筈  
 ニ被仰渡、是又右之通ニ被成下度候、右貳ツ成  
 与出申次第御吟味被成置候得ハ、郷帳ニ先肝煎  
 代ニ候哉、四斗貳升九合之所ニ郷免貳ツ成と加  
 筆致指置候故、御三人御調之時も貳ツ成与御調  
 申請、其上 御墨印御改ニ茂貳ツ成ニ入申様ニ  
 相見得申候、全御三人様之御免違共不申上、其



節之肝煎ニ不吟味与相見得申候

一、支配郷根子村ニ御本田屋敷之内三ツ成高八升延宝六年川欠ニ罷成、其節御調川野理右衛門殿・川尻半兵衛殿御調ニ式ツ五歩成と被成置、御金蔵ニ而も式ツ五歩成ニ而御指引出申候へ共、右高之儀ハ御本帳付開三ツ成ニ御座候故、此度御調之上式ツ五歩之所ハ御皆済出高ニ被成置、三ツ成御本田開之内より御指引被下申筈ニ御調申請候、右式ツ五歩と御両人之御調ニ出申訳ハ如何致候与御吟味被成候所ニ御張紙ニハ免付無御座候、御皆済ニ計式ツ五歩ニ入被置申候、惣し而御本帳付開与計有是分ハ御本田同前ニ三ツ成与ニ御座候、忠進開分ハ式ツ五歩成ニ御座候所ニ定而此御免違と相見得申候

一、申立候外ニ天和式年七ヶ村御開帳之内式斗三合元禄十三辰年屋敷畑ニ成、へり目安東十左衛門殿・後藤又左衛門殿・富田理右衛門殿・原井清右衛門殿御調ニ御座候所ニ、右捨高三ツ成と被成、御金蔵御皆済ニも出申候、此度御吟味被成置候所ニ式ツ五歩成より引申筈故、三ツ成所ハ式斗三合出高ニ被成置、式ツ五歩成より右捨高御引落被下候筈ニ御調申受候、右高三ツ(ママ)と出申訳御吟味被成候所ニ郷帳ニ付紙ニ而三ツ成と加筆有之申ニ付、右之通御調被成置候と相見得申候

一、支配打当村御本帳之内申立之外ニ七斗八升式合、先年畑返り出目御座候而、其節延宝四年吉成平治右衛門殿・桜田采女殿・神沢八郎左衛門殿御調ニ御座候所ニ、右七斗八升式合御皆済ニ重高ニ罷成申候ニ付、今度其節之御皆済高年限ニ御吟味被成候へハ、右同年ニハ比立内村ニも壹斗六升畑返り出目右御三人御調ニ御座候、尤郷帳両冊ニも御調書付御座(ママ)故、右式枚之分高合三ツ成九斗四升式合と御皆済ニ出申筈之所ニ七斗八升式合りんし入申候而、壹石七斗式升四合と御皆済ニ御座候へハ、七斗八升式合之分ハ重ニ入申様ニ相見得申候、尤郷帳付紙筆限共ニ別左様之高外ニ出高も御座候かと色々吟味仕候得共、右式枚之外出高無御座候、尤此度段々御引合御覽被遊候通相違無御座義ニ候間、此上ハ右七斗八升式合りんし之外三ツ成御本田開之内より御引落シ被下候様ニ奉願候、委細其節之御皆済ニも相見得申候

一、此度御調之上免違捨高直シ被置被下候ハ、出

高ニ罷成分ハ其免限之捨高より御引落シ被下、又ハ免違ニ而へり高ニ罷成候所ハ本高より御指引被成下候様ニ奉願候

一、右段々御高行違ニ御座候儀、御高調之節より吟味仕候事故其以前ハ一切存当らず只今まで罷有候段無調法可申上様も無御座、其上 御墨印ニも免限有高之通引合不申段御吟味被成置候、御墨印之儀ハ宝永式年酉之年ニ而御改、以前より之免違高違ニ御座候、此儀ハ先肝煎代ニ調仕指上申事故、何之高を取合三ツ成・式ツ五歩・式ツ成までニ書上申候哉只今 後墨印取合申儀も罷成兼申候間、何分ニも宜様ニ被仰上御高違之外ハ被直置被下度奉存候

一、当村之儀ハ古来より荒瀬八ヶ所と御皆済ニ被出置申候、尤 御墨印も八ヶ村一本ニ被成下頂戴仕罷有候、支配郷共ニ御本田免三ツ成其外後開別水御開共ニ御座候、此御免ハ式ツ五歩・式ツ成ニ御座候、御本帳付開と計御座候分ハ御本田同前ニ而三ツ成ニ御座候、御本帳之内ニも忠進開ハ式ツ五歩ニ御座候

右之通段々申上候趣相違無御座候、御高違無調法之段ハ宜様ニ被仰上被下度奉願候、為其支配地主共ニ判形仕指上申候、以上

享保十二年  
未五月

佐藤半兵衛殿  
岩堀吉右衛門殿  
妹尾庄吉殿  
岩屋八右衛門殿

荒瀬村肝煎  
伊左衛門  
茅草村地主  
長之丞  
笑内村地主  
太治兵衛  
伏影村地主  
喜助  
根子村地主  
原右衛門  
比立内村地主  
久作  
打当村地主  
治五兵衛  
荒瀬川村地主  
権助  
土倉村地主  
半助

[史料7]

享保15年(1730)6月7日「(支郷村々の新開地竿受その他につき願書)」

(湊榮興家文書30、状1)

当春中御代官正田太郎右衛門殿ヲ以申立候ハ、当村支郷比立内村孫市御忠進開辛勞免高未ノ年御檢使之上御代銀被下置、御公義様へ指上ケ御蔵分ニ罷成候、其後右之開御打直申立候様ニ被仰渡候ニ付申ノ年より毎年申立候処ニ、御普請高御用其外御用多ク当村へ御檢使御出無御座候此度願上候、右御開御打直シ御檢使被下置度候、右御開之内御本田畑返り御座候、外ニ先年重開ニ御竿申受候、右本畑御百性かつきニ罷成候迷惑致候間畑返り被成下度候、其外支郷村々ニ切添御開・新屋敷御竿入被下度候、御開場ニ罷成候場処二三ヶ処見立申候、御本田草かへへも相障不申候間、御開ニ被仰付被下度候、右之外捨り屋敷二三軒御張紙ニ被下度候、并ニ支郷打当村ニ御本田関打当沢与申処より関筋通り申候、右沢先年より雜木御留山ニ御座候間銅山炭木山ニ明被置段々剪尽、漸ク支沢之内黒殿沢・道行沢と申計ニ相残り申候間、関根林ニ被下度候、御本田樋掛ニ御座候ニ付夫々諸木払底ニ罷成、御本田荒シ申之外無御座候、当春中右品々申立候処ニ、春中ハ御用多ク夏中比立内村■開御打直被成可被干と可被成置と相濟候ニ付、此度各々様御出ニ御座候間御先立致候

一、比立内村孫市御忠進開御打直之義各々様御吟味被成候処ニ、四年以前右御開御打直ニ被仰付候筋相見得不申、其上孫市御忠進開辛勞免之分ハ無殘代銀被下置有高ニて御蔵入ニ被召上候へハ御打直被成候ニ及不申由御申ニ御座候、郷中へハ四年以前御代官より被仰渡候故申立候へハ此度御吟味ニ而御打直止被置候段御申ニ御座候間畏入申候

一、右御忠進開之内御本田畑返り御座候処、先年重開ニ御竿申受候故、右本畑高御百性かつきニ罷成迷惑致候ニ付、畑返りニ被干度置と被直下度と願申上候、是又在処御吟味被成置候へハ、御本張付御開年々出開共ニ殊外地形入組、新開畑返り筆境一向相知不申候、先立可仕様無御座候、孫市開御打直ニ御座候へハ無殘御竿入候事故、御調ニも可罷成と申立候へハ御打直相止候、右畑返り在処計御調訳不罷成候由御尤奉存候、

其上御本張付ニも御忠進開御座候へハ猶孫市御忠進開計御打直不被為成候ニ付、右之在処も止止被置候間、郷中ニ而末々筆境等吟味仕右本畑御調之義ハ追而可申立由承届ケ申候

一、枝郷村々内御開場之義申立候、右在処ハ御本田其外草かゐ等水本共ニ相障リ申場処ニ無御座候間、何分ニも被仰立郷中御高不足之在処ニ而迷惑致候間、被仰付被下度候

一、荒瀬村之内大孫沢・滝之下モ兩処あく、但御留山之内御座候へハ川畑ニ而木立無御座場処ニ御座候

同所

与 右 衛 門

開申立申度候

一、右同村之内萱草村山作沢口・蟹沢口

同処

弥 兵 衛

右同断

三左衛門

開立申度候

一、右同村之内打当村仙北渡り

同処右同断

全 兵 衛

一、右同村之内と、ろ之上台

同処右同断

八 兵 衛

右之通関筋堀(掘)通シ御開仕、符人ニ罷成度由申立候、尤御本田水本等へ相障リ申場処ニ無御座候

一、支配郷打当村御本田関根林之義申立候処、山本御見分之上各々様御申ニハ、右申立候黒殿沢・道行沢兩処之義ハ先年銅山炭木山ニ被仰付候在処ニ御山方へ相障リ可申義も御座候間、小沢御山仕菅原新兵衛ニ御尋被成候へハ、同人申上候ハ銅山より向寄之在処木立等も能御座候而たくわへニ致、炭竜延引致、矢板・留木等計出シ置申候、其上先年より炭木山ニ被仰付御証拠も処持仕、猶又御山も段々剪尽山重も不足迷惑仕候、樋木等之御用ニ候ハ、何方之御山より成共御用ニ仕候、違配不致間敷候間為剪被置候義違背仕間敷候間、右兩沢郷山ニ被仰付候義迷惑千万ニ奉存候段申上候ニ付、右之訳私共ニ御申被成候、御山方之申様左様ニも可有御座■度候所、打当村之義ハ御本田二十石式拾石余樋懸り御座候而

大木等も入申在処ニ御座候、両沢共ニ不罷成候義ニ御座候者、右支沢一ヶ処成共関根林ニ郷中へ被仰付被下候へ者段々取立先々樋木等ニも願上度奉存候、只今左様之大木多ク無御座所、大方桂少木ニ御座候間、御札立被置候而成共不苦候間、関根林ニ被仰付郷中ニ而相守申様ニ仕度候、只今之通ニ而ハ炭木ニ罷成ニて計候ハ、迷惑可仕と奉存候故申上候間、何分ニも被仰上被下度奉存候

一、当村支配郷之内切添新開屋敷御竿申受候へハ、右ハ御給人御指紙場処ニも無御座候、御本田畑返り之分ハ免三ツ成、重開ハ式ツ五歩成ニて御皆済ニ出申候、其外捨り屋敷・捨り高御張紙申受候、是又相違無御座候、為其判形仕指上申候、以上

享保十五年  
戌六月七日

荒瀬村肝煎  
治 右 衛 門  
同村長百性  
善 左 衛 門  
同  
長 兵 衛  
同  
惣 左 衛 門  
同  
平 右 衛 門  
同  
久 作  
同  
九 左 衛 門後  
同  
治 五 郎前

佐藤半兵衛殿  
杉山六郎治殿  
助川久治殿

[史料8]

享保20年(1735)4月29日「覚(枝郷荒瀬川村ほうつき山などに五枚の御札被下度につき)」

(湊榮興家文書33、状1)

覚

林役人

一、大阿仁荒瀬村より申立候、当村支配荒瀬川村御立林、正徳弐年荒瀬川上ミ両平森吉下より櫃端沢迄相守罷有候、四年以前右沢二ノ又御直山

御用ニ鍵ノ滝より両平森吉下迄被明[ ]  
峯中ノ又沢ほうつき山川目通櫃端沢右三ヶ所ニ御座候、然ハ当村之義ハ伐山無御座、近所ばらかや等かり取相続罷有候所ニ、去年中よりかや草銅山出申ニ付、金ほり共入込ニ罷有りばらかや刈尽迷惑仕候、依之ほうつき山杉苗多ク御座候得共雑木有之候故杉苗生立兼候間、御慈悲ヲ以右下柴之分被下置候ハ、杉苗取立指上可申候、左之御札之儀ハ三枚被下置、内壹枚ハ櫃端沢御田地水野目、同壹枚ハほうつき山、同壹枚ハ鍵ノ滝・小松峯・中ノ又沢右三ヶ所江立置申度候、右之外支配郷戸鳥内村之内鳥越と申所関なて除之ため関林ニ致指置申候、此度御札壹枚被下置度候、并本郷之内荒瀬沢と申所郷中取立林ニ仕度候間、御札壹枚被下置度申立候

一、右之通申立候ニ付御検使被仰付、林山所々見分之上次第申上候得ハ、荒瀬川村御札林去年被明置、残山之内ほうつき山・鍵ノ滝・小松峯・中ノ又沢・櫃端沢共ニ御札三枚被下置度申出候得共、正徳弐年ニ御札被立置候得者、別而御札被立置候ニ及申間敷段々申上候、支配郷戸鳥内村之内鳥越と申所吟味致候得ハ、元来御札山之内ニ而別而御直山御用ニ被留置候故、是又御札ニ及申間敷候、其外本郷之内荒瀬沢ハ郷中取立林ニ之事故御札被立置可申旨申上候所ニ、御吟味之上右之様ニ可被仰付候

一、ほうつき山ハ同かけ平より下ほうつき・上ほうつき・森合・越戸・さやま迄荒瀬川村焚用ニ下柴御免被成置候間、青木・雑木共ニ随分取立可申候

一、櫃端沢之内務沢・小沢共ニ峯限り水落蟹沢櫃端村後迄御留山ニ被仰付候

右ほうつき山共ニ前平通御留山ニ被仰付候

一、本郷荒瀬沢ハ九両森■下・荒瀬沢東北西打廻シ峯限水落沢口まで下草ニ而も刈取へからさるもの也

右之通岩□吉右衛門・笹村太左衛門・高久[ ]

岡武兵衛御検使ニ而相済書付之写、以上

享保廿年卯

片岡治左衛門

四月廿九日

河村武右衛門

荒瀬村

肝煎殿へ



[史料 9]

寛延 4 年 (1751) 3 月「乍恐口上書ヲ以奉願上候御事 (郷中寄合にて長百姓勘七不屈につき)」

(湊榮興家文書 41、状 1)

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一、当十七日郷中相談之義御座候而肝煎役所江長名共寄合相談致候所ニ、当村勘七長名百姓ニ御座候故為寄候所ニ昼之内者寄不申、暮頃より寄合場江参候而段々郷中相談之所ニ、右勘七無筋不屈之義申出シ我侭申事故、長名共旧冬より寄合相談相究候段具申聞ケ候得共不屈成義申候而、きせるを持直し箱番吉兵衛ニ打かゝり申事故、無扨吉兵衛勘七を打申候得者、勘七持直シ申候きせるニ而吉兵衛を打申候而、兩人共ニ手疵を得、肝煎役所ふみちらし、肝煎長名物なしニ致罷歸候故、則郷中より勘七方江不屈之段申断候御事

一、前書申上候通勘七方江右不屈之段相断申候得ハ同人方より申参候ハ、拙者不屈之段被仰越不得其意候、近々御さいきよ可被下杯と無筋不屈之義申出シ、一向得心不仕、兩度迄相断候得共前書申上候通我侭計申候而得心不仕、却而御披露申立候杯と申候而、内事ニ茂成兼無扨申上候御事

一、年内より支郷村々より地主長名共数度寄合相談御座候得共、此度寄合迄ニ勘七式三度ならて寄合江出不申、然者数度之寄合支配郷中相談之上相究候義も勘七出候而無筋義申出シ、村々地主長名永逗留致迷惑ニ奉存候御事

一、勘七義小沢御山御手代役茂去々年中より相勤申候者ニ御座候故、長名役相除可申候得共、少々御高持御百姓ニ御座候故、無扨長名ニ致指置申候、然者勘七代リニ相立申御百姓茂無御座、組頭長名之内茂水吞同前之御百姓ニ御座候而、家数五拾軒計御座候得共御高纔式拾五六石御座候在所ニ而日用取同前ニ御座候故、前書申上候通り長名ニ致指置申候御事

一、右勘七義当所之生之者ニ茂無御座、仙ニより万吉所江聲ニ参候者ニ而、数度口論等致候得共、近所ニ而取押内事ニ致指置申候、惣而郷中不和合之者ニ御座候、然者当村支配郷共ニ全山林麓郷ニ御座候而諸吟味迷惑ニ奉存候間、此末郷中吟味之筋相立候様ニ被成下度奉願上候御事

右之通乍恐宜被仰上、郷中吟味之筋相立申

様ニ被成下度奉願上候、以上

寛延四年未三月

平井治右衛門殿

荒瀬村肝煎

吉 十 郎

同村長百姓

德 兵 衛<sup>㊦</sup> \

同

儀 兵 衛<sup>㊦</sup> \

同

吉 郎 兵 衛<sup>㊦</sup> \

同

長 十 郎<sup>㊦</sup>

同

平 之 丞<sup>㊦</sup>

同

清 助<sup>㊦</sup>

同

久 右 衛 門<sup>㊦</sup> \

同

藤 左 衛 門<sup>㊦</sup> \

同

与 右 衛 門<sup>㊦</sup> \

戸島内村地主

治 五 兵 衛<sup>㊦</sup>

中村地主

弥 右 衛 門<sup>㊦</sup>

幸屋村地主

清 十 郎<sup>㊦</sup>

幸屋渡村地主

久 兵 衛<sup>㊦</sup>

根子村地主

弥 吉<sup>㊦</sup>

笑内村地主

惣 左 衛 門<sup>㊦</sup>

伏影村地主

九郎左衛門<sup>㊦</sup>

茅草村地主

吉 右 衛 門<sup>㊦</sup>

上比立内村地主

市 十 郎<sup>㊦</sup>

下比立内村地主

太 治 兵 衛<sup>㊦</sup>

荒瀬川村地主

長 作<sup>㊦</sup> \

土倉村地主

半 助<sup>⑩</sup>／

此前書御披露申上候筈之所ニ、  
勘七方より訴訟之段別紙書付  
郷中肝煎方へ指出、立而訴訟  
ニ可致候故、此願事指上不申  
内事ニ致延引仕候、以上  
未三月廿二日

[史料10]

宝暦3年(1753)3月「御披露願事控(勘七退転後の居宅・馬の見継人足につき)」

(湊榮興家文書42、豎帳1)

(表紙)

「  
御披露願事控

」

乍恐口上書ヲ以御披露中上候御事

- 一、当月朔日小沢御山杉原伝兵衛殿北村藤助殿より御手代理右衛門ヲ以郷中へ御断ニ御座候者、御手代鈴木勘七義旧冬病気暇申立、りやうじニ久保田へ罷登御目安差上候子細ニ寄り、右勘七義両御検使様より永暇被仰付候、依而今日より御山御召抱ニ無御座候間、左様ニ相心得候様ニと御断ニ御座候御事
- 一、前書之通御山より御断ニ御座候ニ付郷中寄合相談致候ハ、御大切成御目安等差上此末又候如何様成義申上候茂相知不申、依而勘七子共亀松事当所御百性ニ而御高壱石三斗所持致候而家内頭ニ御座候故、郷中より両夫ヲ以申断候ハ、親勘七義御目安差上候不屈ニ付御山より御断ニ御座候、左候得者親勘七義郷中ニ差置候義不罷成候間、為退候様ニ亀松方へ申渡候御事
- 一、右之段亀松方へ申渡候得者同人方より姉聳吉三郎ヲ以申出候ハ、親を為退候事大切之事ニ候得ハ、書付ヲ以被仰付被下度由申参候故、書付出可申段遣吉三郎ニ申渡候、左候得者吉三郎申候ハ、左様ニ御座候ハ、右書付へ郷中肝煎判形致可被下と申事故、郷中より申聞候者判形ニハ不及候間、左候ハ、亀松ニ直々可申渡候間亀松同道ニ而参候様ニ申渡候得ハ、則亀松同道ニ而参候故、前書申渡候通段々申渡候得者、得心致罷帰候御事
- 一、前書之通得心致罷帰候所ニ同十三日晚小渕村彦右衛門・吉三郎兩人ヲ以肝煎方へ申参候者、

先日被仰付之通明日郷中退相立候間、御田地家屋敷馬共ニ郷中御立合ニ而受取可被下と勘七方より申参候、依而肝煎吉三郎ニ申聞候ハ勘七方より幾度申参候而も取受候義不罷成、殊ニ亀松家内ニハ子細無之候故、勘七壱人為退候様ニ申渡候、使共ニ亀松方より申出候ハ、郷中ニ而取受可申段申聞候御事

- 一、翌十四日無至来致家内中無残り退申候、依之吉三郎ニ申渡候ハ、其方兄弟ニ御座候故右居宅馬共ニ此沙汰相済候迄預見継可申段申渡候、尤兩隣郷中共ニ見継候間、其段相心得候様ニ申渡候得ハ、同人申候ハ親勘七義如何分程之存知寄も不相知候間、依而預候義も立会见継共ニ不罷成と申事ニ候故、無扨小渕村肝煎万吉儀ハ勘七親ニ御座候故、右之趣以両夫為相知候所ニ、同人方より申参候ハ郷中退不申以前ニも為御知被下候ハ、如何様ニも可仕候得共、退候已後私方ニ而も何共可致様無之候間、其元思召次第ニ可被成段申参候御事
- 一、右之仕合ニ御座候故致方も無之、殊ニハ馬等も指置候義ニ御座候得者、御大切之馬故郷中兩隣立会ニ而亀松居宅見分仕候而昼夜番ヲ付置見継申候得ハ、大目人足出シ御百性迷惑千万ニ奉存候、殊ニ作場最中別而苗代時ニ指掛り、殊之外迷惑千万ニ奉存候、乍恐御慈悲ヲ以御田地等も相仕付申様ニ御吟味之上御裁許被仰付被下度奉願上候御事
- 一、右勘七義未ノ春迄郷中御百性相務罷有候得共、兼而郷中不和合其上未ノ年無筋義申出郷中より御披露申上、如何分ニも御吟味可申受と七ヶ村肝煎中迄御内意申上、御披露ニ罷成候所ニ、勘七方より度々郷中へ訴訟其上書付ヲ以此末御高並万事郷中諸役共ニ子共亀松名代ニ致、亀松姉聳吉三郎ニ後見為致、私義一向御高事・諸郷用江ハ一切構申間敷由訴訟ニ御座候故、郷中ニ而内事ニ致、七ヶ村肝煎中より右願申下ヶ内事ニ致差置申候、尤勘七義其節より当所切支丹御調帳相除キ、御山へ入申候、其節勘七方より郷中へ訴訟書付則指上候間、御被見被下成候上、以御慈悲郷中御百性御助被下置候様ニ奉願上候御事

右之通ニ御座候間、乍恐以御慈悲宣布被仰上、御百性御助被下置度奉願上候、以上

荒瀬村肝煎

宝暦三年 長 左 衛 門㊦  
 酉三月 同村長百性  
 徳 兵 衛㊦  
 平井治右衛門殿 同  
 義 兵 衛㊦  
 同  
 藤 左 衛 門㊦  
 同  
 平 之 丞㊦  
 同  
 吉 郎 兵 衛㊦  
 同  
 惣 五 郎㊦  
 長百性  
 吉 兵 衛㊦  
 同  
 長 兵 衛㊦  
 同  
 久 右 衛 門㊦  
 同  
 五 郎 惣㊦  
 同  
 与 右 衛 門㊦  
 同  
 長 十 郎㊦

(裏表紙)「当所 勘七」

〔史料 11〕

明和 9 (1772) 年 10 月 17 日「小様村・土倉村境二付御答書控」

(湊榮興家文書 51、豎帳 1)

(表紙)

「 明和九年

小様村・土倉村境二付御答書控

辰十月十七日 小瀨村 」

御代官田口五右衛門殿を以小瀨村・荒瀬村より申立候ハ、小瀨村支配郷小様村沢目之内、先年より荒瀬村飛入高有之、土倉村・土山村両村支郷ニ而御高并ニ家数入組罷有候、其外鮎(相)滝と申所無残小瀨村支郷ニ御座候、大石沢と申所荒瀬村分ニ御座候、右沢目之内両村支郷入組罷有候、殊御銅山方禁ニ而近年畠小屋同前ニ罷有候者共、屋鋪御竿願申上候ニ、内々土地入組甚迷惑ニ奉存候、依之恐多存候得共、御檢使御

序を以御見分之上、両村支郷村境被立下、御百性御助被成下度奉願候段、当春中申上候ニ付、茂又新太郎殿御組合御見分之趣被仰渡候得共、其節御用銀被仰付、肝煎・長百性共ニ米内沢村江相詰候ニ付、申延願仕候所被御聞届、此度各様被為出御吟味ニ御座候故、左ニ御答仕候

一、右沢目之義ハ小瀨村支配小様村沢目ニ有之、土倉村・土山村・大石沢村共荒瀬村飛入高ニ而、御帳付之外荒瀬村ニ而自由致候義も罷成間敷趣御尋ニ御座候、小様沢目之義ニ御座候得ハ飛入高之外自由不罷成候段申上候所ニ、村境ニ相成候諸書付も有之哉御申ニ御座候得共、先年より小瀨村一沢目之事故、外ニ村境証拠ニ相成候書付迎も無之、艸木共ニ是迄入会ニ而罷成有候所、去年中関根台と申所江荒瀬村ニ而新屋鋪相立候ニ付、地形境明白不仕、荒瀬村ニ而ハ御本帳付之内畠高捨り高之場所と心得、新屋敷ニ仕候得共、小瀨村沢目之内ニ御座候得者、新屋鋪出ニ而小瀨村分ニも不罷成、左候得者甚迷惑至極ニ奉存候故、荒瀬村へ延引之趣申遣候所、捨高之場所新屋敷ニ仕候趣申義ニ御座候而、双方意得不罷成、双論之上願申上候而ハ格別御苦柄筋ニ罷成候故、境一通被立下度段願申立候

一、荒瀬村江御尋被成候者、関根台新屋敷御竿申受候哉御尋ニ御座候、去年中普請仕候義ニ御座候得者、于今御竿願不申上罷有候、依之各様御申被成候者、新屋敷之義ハ兼而御停止ニ被仰渡候所、いか、致候而新屋鋪立置候哉御尋ニ御座候、三枚銅山下タニ而畠小屋同前ニ立置候而、御不審ニ預候而ハ可申披様無御座候、何分御執成被成下度奉願候

一、小瀨村江双方共ニ小様村沢目と覚罷有、然ハ御田地・屋鋪共ニ入組候所江何れ所限境被立置候義も不罷成、是迄覚形を以境相守罷有候而者如何有之哉御申ニ御座候、前々申上候通当村沢目之内屋鋪出候而ハ、艸木等ニも悉ク指障リニ罷成迷惑至極奉存候、何レ御見分之上両村入組不申様ニ被成下度奉願上候

一、右之通申上候ニ付、両村肝煎并ニ支郷地主・長百性共ニ御先立仕、場所御見分ニ入置申候所、荒瀬村ニ而新屋鋪ニ致候場所、荒瀬村御帳付一ノ渡りと申候而元捨高之場所ニ有之由御申ニ御座候、乍去一ノ渡りと申場所小瀨村御帳付ニ有之候所、水上ニ而右場所とハ覚不申罷有候得共、



御吟味之上相済候義ニ御座候得者、彼是所存形  
り申上候義曾而無御座候、右家近所新畑相見得  
候ニ付御糺被成置候處、荒瀬村ニ而切開候段申  
上候處、荒し置候様ニ被仰付ニ付、何分被仰含  
之通此末手入仕間敷御答仕候、尤此末新屋敷・  
新畠共ニ手入致候義ハ堅ク相成間敷様委細奉畏  
入候

一、荒瀬村へ土倉村・土山村共ニ屋敷御竿申受候  
哉御吟味ニ御座候、土倉村屋敷之内御本帳付ニ  
御座候得共、右屋敷ニ只今罷有不申ものも有之、  
畠地之内へ引越罷有、土山村・大石沢村之義ハ  
畠地屋敷ニ仕、御竿不申受罷有候段御答仕候所、  
去ル申年起返り方被立置候節被仰渡之次第も有  
之候所、無其儀御竿不申受罷有候段御不審ニ御  
座候、至極無調法之至ニ奉存候間、何分宜御執  
成被仰上被下度奉願上候

一、関根台向両村取立林御座候所、双方覚違ひ有之、  
御見分ニ入置候所、林帳可有之御吟味ニ御座候  
故、両村より差出御覧ニ入置候所、小淵村御帳  
ニハ土様沢水上ミより両平水落次第土様前平通  
下モハ土様淵端迄と有之候、荒瀬村御帳ニハ淵  
之上土様脇下モ者境田道迄と有之候所、淵双方  
覚違ひニ而、荒瀬村ニ而覚罷有候者前平之内岩  
さけの所様淵之下タと覚罷有候得共、各様御申  
被成候ハ左様ニハ有之間敷、土様前平通と御座  
候へハ小淵村御帳へ引合候ニ付、あらせ村へ右  
之趣被仰含候所、是迄右場所迄と心得罷有候得  
共、御吟味之上被仰付候得ハ何分奉畏候、左候  
ハ、此末前平通り無残小淵村分ニ相極、崩ノ沢  
片平より下モ是迄之通御帳へ引合候通様脇より  
境ニ被立下、郷人共立会被仰含候通ニ被成下度  
奉存候

一、小淵村江荒瀬村御百姓共新畑等起し差置候義  
不心得罷有候哉御申ニ御座候、所々飛入高御座  
候事故境紛敷、是迄ハ無其義罷有候得共、新屋  
敷所々江出、無扨此度御苦柄奉掛候段申上候所、  
此末荒瀬村ニ而新屋敷・畠高等開発致候ハ、  
其節無怠御訴可申上段承知仕候、畢竟当村之義  
者隣郷吉田村江加伝馬相勤候故、銅山下ニ而金  
堀等家持候ニも迷惑ニ相成候故、屋敷持兼罷有  
候者も有之様奉存候、左候得ハ当村家数不足之  
村居迷惑至極ニ奉存候、兎角荒瀬村へ被仰付候  
故、新屋敷之儀ハ敷敷致間敷趣被仰付被下度奉  
願候

一、両村境双方覚違ひ御苦柄奉掛候、此末無異論  
先年之通覚形りを以相守り可申、全体入組候村  
居ニ而心得違無之様ニ可仕段奉畏候

一、右御用ニ付、吉田村ニ式夜御止宿被成置候、  
御賄之義者御定法之通ニ而相勤申候、尤御下々  
ニ至迄御非分之義無御座候

右段々申上候通相違無御座、為其両村肝煎・  
地主・長百姓共ニ印形仕差上申候、以上

明和九年  
辰十月十七日  
上神谷藤左衛門殿  
小松弥八郎殿  
大槻藤治殿

小淵村肝煎  
久 藏  
同村長百姓  
庄 兵 衛  
同  
五 兵 衛  
小淵村地主  
七 郎 兵 衛  
荒瀬村肝煎  
長 左 衛 門  
同村長百姓  
長 十 郎  
同  
五 郎 惣  
土倉村地主  
彦 之 丞

御代官

田口五左右衛門

御代官所秋田郡大阿仁小淵村・荒瀬村より申立  
候ハ、小淵村支配郷小淵村沢目之内、先年より  
飛入高有之、御高并ニ家数入組罷有候、殊ニ御  
銅山方禁ニ而近年畑小屋同前ニ罷有候もの共屋  
舗御竿願申上度候得共、土地入組甚タ迷惑奉存  
候、依是両村支郷村境被立下度奉願上候ニ付、  
御検使被差越御吟味被成置候所、右沢目之義者  
小淵村沢ニ而荒瀬村所々飛高有之、境入組難立  
置、関根台新屋舗之儀者荒瀬村分ニ御竿可申受、  
元捨高地形之外向後荒瀬村ニ而新開・新屋敷被  
停止置候

一、関根台向両村取立林是迄双方覚違有之場所、  
林帳面ニ引合候通、土様沢水上より両平水落次  
第土様前平通小淵村分、崩れ之沢より下モハ荒  
瀬村分、郷人訴状申出候通相済候

右之通御評義之上相済候間、村々郷人共江可  
被申渡候

辰十二月十六日  
 以上  
 上神谷藤左衛門  
 小松弥八郎  
 大槻藤治  
 右之通、十二月廿四日御代官様より小又村より被  
 仰付候写取差置申候  
 安永元年  
 辰十二月廿四日覚書

[史料 12]

安永 3 (1774) 年 4 月 12 日「差上申書付之事 (長浜  
 上へ之台を萱草村が自由致候ても、向後違見申上  
 間敷候につき)」

(湊榮興家文書 54、状 1)

差上申書付之事

一、乍憚申上候、当村地形長浜上へ之台と申所、  
 茅草村より野畑切開、馬まき等ニ致来候得共、  
 当然不自油 (由) 茂無御座候故、其通ニ致罷有  
 候得共、近年木山方より諸方御吟味ニ付野畑場  
 所茂無是、依而前書申上候長浜上へ之台、於当  
 村ニ畑蒔可申茅草村江申断候得ハ、右場所之義  
 者先年本郷肝煎殿・長名、両村地主・長名御立  
 会吟味之上、茅草むら江相片付申候段申参候、  
 然共於根子村ニ者一向左様之訳覚候者茂無御座  
 存之外成事と相心得、両村取あへニ罷成、無扨  
 御苦柄申上候御事  
 一、前書申上候場所、先年享保廿卯ノ年茅草村よ  
 り願出候而肝煎殿御名代吉兵衛殿・長名五兵衛  
 殿、両村地主・長名立会吟味之上相尋候得ハ、  
 右場所別而差障り茂無是段挨拶ニ付茅草むら江  
 相片付候、右之訳御尋ニ預り、地主・長名一向  
 存不申一言可申開様無御座、至極無調法ニ奉存  
 候、前書長浜上へ之台と申所、是まで之通於茅  
 草村ニ自油致候而茂向後違乱申上間敷候、依而  
 御訴訟申上候得者早速御耳聞被成下、難有仕合  
 ニ奉存候、為後日之地主・長名印形如斯御座候、  
 以上

安永三年  
 午四月十二日  
 本郷肝煎  
 長左衛門殿  
 同村長名  
 根子村地主  
 徳右衛門㊦  
 同村長名  
 弥吉㊦  
 同  
 半左衛門㊦

長十郎殿  
 同  
 徳兵衛殿  
 同  
 五郎惣殿  
 同  
 与右衛門殿  
 同  
 吉郎兵衛殿  
 同  
 藤左衛門殿  
 同  
 儀右衛門殿  
 同  
 金五郎殿  
 同  
 久右衛門殿  
 同  
 卯吉殿  
 同  
 吉五郎殿  
 同  
 惣五郎殿  
 同  
 長兵衛殿  
 同  
 善兵衛㊦  
 同  
 六之丞㊦  
 同  
 文左衛門㊦  
 同  
 平左衛門㊦  
 同  
 七郎兵衛㊦  
 同  
 松兵衛㊦  
 同  
 四郎兵衛㊦

[史料 13]

安永 5 年 (1776) 7 月 20 日「親方継目証文之事 (肝  
 煎長左衛門病氣のため同姓長右衛門による継目御  
 勤願いにつき)」

(湊榮興家文書 57、状 1)

親方継目証文之事

一、此度御貴公様御病氣御大切相見得候ニ付、  
 万一之儀有之候ハ、御同性長右衛門殿継目御勤  
 被成下度趣、一郷并支配一流願申上候、万一子  
 細等申者有是候ハ、一郷并支配地主中何方迄茂  
 罷出、右願之趣相違為致間敷候、尤此度早速御  
 快氣ニ茂候ハ、今暫之内是迄之通御務被成下度  
 願申上候、為其惣長名地主中連判証文差上申候、  
 以上

安永五年  
 申七月廿日  
 肝煎  
 本郷長名箱番役  
 長十郎㊦  
 同丁箱役  
 吉郎兵衛㊦

長左衛門殿

同  
長 兵 衛<sup>㊦</sup>  
同長名  
与 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
同  
五 郎 惣<sup>㊦</sup>  
同  
藤 左 衛 門<sup>㊦</sup>  
同  
金 五 郎<sup>㊦</sup>  
同  
甚 之 丞<sup>㊦</sup>  
同  
卯 吉<sup>㊦</sup>  
同  
惣 兵 衛<sup>㊦</sup>  
同  
儀 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
同  
惣 五 郎<sup>㊦</sup>  
同  
久 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
同  
吉 五 郎<sup>㊦</sup>  
萱草村地主  
吉 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
伏影村地主  
九郎左衛門<sup>㊦</sup>  
根子村地主  
平 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
笑内村地主  
金 兵 衛<sup>㊦</sup>  
幸屋渡村地主  
久 兵 衛<sup>㊦</sup>  
幸屋村地主  
清 十 郎<sup>㊦</sup>  
比立内村地主  
作 藏<sup>㊦</sup>  
戸鳥内村地主  
三 郎 兵 衛<sup>㊦</sup>  
中村地主  
弥 右 衛 門<sup>㊦</sup>  
打当村地主  
九 左 衛 門<sup>㊦</sup>

荒瀬川村地主  
辰 之 助<sup>㊦</sup>  
土倉村地主  
彦 之 丞<sup>㊦</sup>

[史料 14]

安永 9 (1780) 年 10 月 27 日「覚 (ねこや沢を土倉村郷人共勝手に任置候につき)」

(湊榮興家文書 62、状 1)

覚

一、当村地形之内塚之台と申所、毎度当村より新開御注進申上候、然ハ其元御支配土倉村本田堰より水上留切堰堀通塚之台へ水引取候ニ付、此度御取合ニ及、土倉村領分ねこや沢口御帳付畠有之候所空地無残、土倉村郷人共勝手ニ任置候儀相違無御座候、勿論開発高有之候而も右場所之儀ハ土倉村御高ニ相違無之候、仍而為後日之書付指上申候

小測村仮役

安永九年

五 兵 衛

子十月廿七日

同村長名

荒瀬村肝煎

庄 兵 衛

長左衛門殿

小様村地主

七 郎 兵 衛

[史料 15]

安永 10 (1781) 年 (4 月に改元して天明元年) 5 月 5 日「(小様村の関筋立置願いに伴う御見分御尋につき答書)」

(湊榮興家文書 62、状 1)

(端裏書)

「安永十丑年

小柳伝左衛門様御組合」

御代官田口五右衛門殿ヲ以、小様村より願申上候ハ、右村沢目塚ノ台と申処、御田地新開取立申度ニ付、当村支郷土倉村御本田関口より七拾間余川上ニ而関根留致、夫より東ノ方当村関上段通関筋掘通、難処之所ハ穴関ニ致、夫より土倉村御田畠之内関筋ニ致、右村屋敷脇より直々海 (街) 道通関筋相用意、右村吞水ニ致候田ノ沢出水掛越樋ニ致、新発仕度段願申上候ニ付、此度各様被為出場処御見分ニ御座候故、肝煎・長百性御先立御見分ニ入置候処、右村願之通関筋立置候而も指障無之哉御尋ニ御座候、御覽被



成置候通小川之事故、夏中日和続ニ御座候得ハ水不足仕候事ゆへ、御本田関根留上ミ留切候而ハ如何共迷惑千万ニ奉存候間、関根留致候義ハ御免被成下度段申上候処、各様被仰候ハ、開関筋之事ゆへ何つ逆も干魃之節水不足ニ候ハ、右関根払置、本田関へ是迄之通水引取候様ニ可致被仰付ニ御座候得ハ、関根留之儀ハ別段障無御座候得共、右関当村御本田関上段へ長間之場処上関堀通し、至而難所之所ハ穴関ニ致候由ニ御座候得ハ、当村関筋石砂埋ニ相成候儀指見得、何共迷惑千万ニ奉存候間、相成御事ニ御座候ハ、右関筋不被仰付様ニ仕度段申上候所、各様被仰候ハ、新発有之時ハ少分ニも御益筋ニ相成候儀、彼是御障申上候事ニ有之間敷、猶又本田関へ不相障様ニ堀方普請之儀小様村へ可被仰付間、大段之障無之候ハ、小様村願筋へ落合可然段精々被仰含、御尤千万ニ奉畏候、左候ハ、干魃之節ハ右関根留取払、当村御本田関へ水引取候様ニ被仰付被下度、猶又当村関上段通岩関・穴関共ニ普請之節、当村御本田関へ岩石等猥ニ堀落、水行指障ニ不相成様ニ被仰付被下度、別而土倉村屋敷前相通、右村吞水ニ相用意候田ノ沢之儀ハ、水出も不足ニ候得共、川水之儀ハ銅山悪水掛ニ而吞水等ニ相用意候儀不相成、右田ノ沢之水一ト通ニ而相立候村居、右出水へ此度新関水入交候而ハ何共迷惑千万ニ奉存候間、右出水下タ関筋相通、田ノ沢水ハ上関ニ致、右村ニ而掛越樋拵置候様ニ被仰付被下度奉存候

一、右関筋成就致候ハ、余水ヲ以根小屋沢字所畠地上段相通候関筋ニ御座候間、根小屋沢畠高有之処并空地無残、小様村より指出候手形之通土倉村郷人勝手ニ開発被仰付被下度段願申上候処、其旨具サ小様村へ被仰渡候得ハ逐一奉畏候段御答申上候

一、右関筋相通候地形之儀ハ多分両村御帳付林之内ニ御座候間、是又右御林へ不相障様ニ被成下度品々願申上候所被御聞届、其次第具サ小様村郷人共へ被仰含之処、少も指障ニ不相成様ニ可仕、田ノ沢吞水之義も上関ニ致、掛越樋ニ而是迄之通悪水等少も相交不申様ニ可致、猶又関筋成就之上余水ヲ以根小や沢畑地・空地共ニ為開可申段御答ニ及候ニ付、右之通ニ而も指障有之哉御吟味ニ御座候、前書段々申上候通り新関と申難所之場処上関ニ而相通候故、往々指障も可

有之候得共、少分ニも当時御益筋ニ相成候儀、猶又当村申上候通ニ被仰付候事ニ御座候得ハ御障も難申上候ゆへ、何分小様村願之通関筋被仰付候儀奉畏候

右段々申上候通相違無御座候、為之肝煎・長百性印形仕書付指上申候、以上

荒瀬村肝煎

安永十年丑五月五日

小柳伝左衛門殿

遠藤六左衛門殿

高井重太郎殿

長左衛門

同村長百性

五郎惣

同

与右衛門

支郷土倉村地主

彦之丞

同村長百性

庄兵衛

#### [史料 16]

文化元(1804)年7月「差上候書附之事(市十郎植立杉などの件で以来御苦柄申上間敷候につき)」

(湊榮興家文書 79、状 1)

差上候書附之事

一、当所取り立御林、上ミ者蟹沢より田野沢・つもり沢両平峯限り水落次第と存罷有候処、右御林之内つもり沢北平、当処市十郎先代より杉植立段々野場地江植継候ニ付、当所草飼ニ茂相障り候故願申上候処、此度御書被成置御見分之上、左之通り被仰付候

一、つもり沢峯より水落次第、先規より市十郎植立候杉之儀者御帳付ニ茂罷成居候故、末々共ニ郷中ニおひて茂見継致、市十郎入用之節者共々願申上同人ニ相任候様ニ被仰付承知仕候、且右場処雑木之儀者郷中取り立御林之地ニ候間、以来郷中ニ而相守り猥ニ不相成様ニ急度取立可申被仰付、是又畏入申候

一、つもり沢峯限りより北江向キ候野場地江市十郎杉植立有之、少々柴立茂有之候場所、同人自分林ニ可仕被仰付承知仕候、且又右植候場所之外柴壺本たり共場処取り広ケ、杉并雑木共ニ植立不相成趣市十郎ニ茂蔽敷被仰付是亦畏入申候、追々郷中立会仕急度境相立、末々違論等不仕様ニ可致、猶斯被仰付候上者以来右御林之儀ニ付御苦柄等曾而申上間敷候、仍而為後日之地主・長名・小百性并市十郎共ニ連印仕書付指上申候、

以上	比立内村地主
文化元年	三十郎 <sup>㊦</sup>
甲子七月	同所長百性
本郷肝煎	長四郎 <sup>㊦</sup>
長左衛門殿	同所長百性
同	甚三郎 <sup>㊦</sup>
長名衆中	同 同
	作右衛門 <sup>㊦</sup>
	同 同
	市十郎 <sup>㊦</sup>
	同所小百性
	利助 <sup>㊦</sup>
	同 同
	市左衛門 <sup>㊦</sup>
	同 同
	市兵衛 <sup>㊦</sup>
	同 同
	弥太郎 <sup>㊦</sup>
	同 同
	平藏 <sup>㊦</sup>
	同 同
	久四郎 <sup>㊦</sup>

〔史料17〕

文化4(1807)年4月15日「(野尻台草飼馬放場の替地および関根林設定につき願書)」

(湊榮興家文書82、状1)

御地頭梅津与左衛門殿江願申上候、枝郷打当村金兵衛、此度戸島内村之内字処野尻台御差紙下御忠進申上候ニ付、御見分之上村方江被仰含候ハ、開発之儀外ニ関筋廻り方無之ニ付、先祖より有来候御蔵分御本田関へ加ひ関ニ致候得ハ御差紙下開発ニ相成可申候、往々開発成就致而も其年ニ寄旱魃等ニ而水不足之節ハ、新田日枯ニ相成候而も御本田水之儀者は迄之通相支申義ハ曾而無之候、猶関筋破損等之節ハ同様に足差出ふしん可致候、右之外村方相障義も有之候ハ、可申聞段被仰含委細奉承知候、当村之儀者一体御高不足、此末御田地出来致候得ハ御百性助りニも相成、殊ニ上之御益筋ニ奉存候へ者外ニ差障り可申様無之候得共、御見分之通野尻台之儀者野尻村・鳥越村右両村草飼馬放場ニ御座候、尤戸島内村草飼場大野与申所入会草飼仕候得共、

川向ニ御座候而雨天之節ハ川越難相成、其節野尻台より草飼相弁不申候へハ外ニ何方迎も刈取可申場所無御座候、右野尻台草飼馬放場御開発被成置候而者外ニ替地之場所無御座候故、右場所開発之儀者御免被成下度御訴訟ニ奉存候

一、野尻台開発致候得者右替地之場所無之哉御尋ニ御座候得とも、村方之内ニハ替地ニ相成候場所無御座候、御銅山方御掛山之内鳥越村家之上より長滝口迄之所少々台地御座候、川越不相成節草飼馬放場ニも相成可申、尤右場所木立無御座候間、上之御取扱ヲ以右替地ニ被仰付被下度奉存候

一、先年為開発之御人足代拝領仕、打当内沢之内江関筋相通し御田地開発仕、寛保三亥年御竿申受、七、八ヶ年以前洪水ニ而関筋無残破損仕百間余関形も無之ニ付、郷人足三百人余差出川堀替古川留仕水引取罷有申候、然ハ此末洪水等有之破損之節、諸材木・木柴共ニ才覚可致様無御座候、迷惑至極ニ奉存候、水野目御林御座候得とも少分之事ニ御座候故、何卒打当内沢之内下モ道行沢より見通沢迄関根林ニ被仰付被下度奉願上候、右場所御銅山御留山之内ニ御座候、願之通被仰付被下置候ハ、此末急度見継成木為致関根助成之外御銅山御用ニ相立候様仕度奉存候、願之通被仰付候へハ、空地も不少有之間関切広ケ普請仕、御田地開発仕度奉存候間、右之通被仰付被下度奉存候

一、右之通り願申上候ニ付御尋被成候ハ、金兵衛於先祖ニ関筋切広ケ、菅ノ谷地野形開発心懸候得共開発不致、打捨差置候関筋、同人物入致関筋相立候得とも、難所之関筋ニ而末々成就之程無覚束相見得候、依而野尻台開発致候外有之間敷、何れ本田関筋見分可致、逐一御見分ニ入置候へハ、大川関根留上ケ候得者水不足与申義も有之間敷候間、金兵衛願之通御本田関切広ケ候而野尻台開発致候外有之間敷、開発成就致候而御本田・新開共ニ水不足ニ不相成、格別余水有之上、右余水ヲ以樋掛渡、菅ノ谷地開発致候外有之間敷被仰含ニ御座候、仍而同人余力無御座候間御地頭へ御本入願申上候外無御座候間、何分御願申上開発可仕奉存候、乍去鳥越村・野尻村両村草飼馬放し場共ニ迷惑仕候間、御銅山御掛山之内早瀬沢之内鳥越村家ノ上ミ長滝口迄川悪戸、草飼馬放場ニ被仰付被下度奉願上候

一、打当内沢之内下モ道引沢、関根林ニ被仰付候へハ関筋切広ケ開発可致申上候、左候得ハ何れ之場所開発致候哉御尋ニ御座候、仍而御先立仕御見分ニ入置候所、刈積ニ致候而何程出高ニ可相成哉御尋ニ御座候、御答申上候ハ大方三千刈も可有之場所ニ御座候段申上候、右場所字所御尋ニ御座候、字所震石与申処ニ御座候、定而与左衛門殿御差紙下ニ可有之御尋ニ御座候、全ク御差紙下ニ無御座候、寛保三年御検使岩堀吉右衛門殿打口ニ而ゆるき石台新開出高、免式斗五升成高壺石三斗五升八合、内六斗五升四合御蔵分、同七斗四合梅津藤十郎分御出高ニ御座候、御地頭御忠進被成置候事ニ御座候、此度ゆるき石御開発被成候而も御忠進開ゆへ御割合ヲ以御地頭辛勞免拝領被成候事ニ奉存候

一、野尻台金兵衛御忠進開発致候ニ付、御本銀拝借仕出高之上辛勞免拝領可被仰付、其節辛勞免拝領不致、御本入銀御返済致、御本入銀御返済相済候上、辛勞免拝領可致御答申上候

右段々申上候通相違無御座候、為其肝煎・地主・長百性印形仕差上申候、以上

文化四年

卯四月十五日

石川孫左衛門殿  
林 弥左衛門殿  
佐 藤 兵 吉 殿

あらせ村肝煎

長 左 衛 門

同村長百性

与 右 衛 門

中村地主

弥 右 衛 門

戸島内村地主

作 右 衛 門

野尻村地主

佐 太 郎

打当村地主

長 兵 衛

同村

金 兵 衛

右之通御検使様より御下書拝領、相認差上申候、御下書ハ御返し申上候事

[史料 18]

文化 11 (1814) 年 7 月「御林一件済口書附 (唐見内堰林につき)」

(湊榮興家文書 91、豎帳 1)

(表紙)

「上 御林一件済口上書附

比立内村

幸屋渡村

幸 屋 村 」

差上候書付之事

一、幸屋渡村・幸屋村より申出候者、比立内村田之沢より高倉迄御札山先規より唐見内堰林之事ニ指心得罷在候所、近年来右御林之内田之沢・赤井沢比立内村ニおゐて炭木山ニ願申上明山ニ罷成候ニ付、幸や渡村・幸屋村関子相談之上比立内村江堰林之儀駈合ニ相及候所、右村より申出候者全関林ニ者無之、右御林之儀先年より当村郷林御札山ニ有之候、尤右御林之内上ミ高倉沢より赤井沢口迄北平之儀者唐見内堰向寄之場所ニ而先規より右関筋普請用木ニ備置、関用之外手入不仕見継罷有候、田之沢・赤井沢之儀者当村御林ニ紛無之故、前々より数度御明山願申上難渋之節者小百性取扱罷有候段申出候所、猶又幸屋渡村・幸屋村より申出候者、先年右場所堰林ニ願申上候古キ書付も有之候得者全堰林と存罷有候段、比立内村ニ而者右御札御文言ニ堰林と申儀曾而無之候得者郷山ニ相違無御座趣双方申募事不相分、本郷江申出肝煎・郷人両々吟味致候得共、田林・郷山之訳駈と不相分、御上江願申上相片付可申儀ニ候得共、御時節御苦柄恐入、殊ニ右御林之内高倉より赤井沢口迄先年より関林ニ備置、諸普請等之節者右場所より諸材木相用罷有候得者、以来迎もからみ内難所之関筋普請用木不足も有之場所併赤井沢口式ヶ所之沢留、夫より下モ土堰ニ候得共長間ニ候場所在之候得者、右堰筋普請之節高倉より剪出候而者出し方難渋、諸失却ニも相抱候事故、右赤井沢式ヶ所之留普請并ニ夫より下モ堰筋破損等も在之普請之節者、赤井沢向寄ニ候ゆへ右場所より用木相弁可申、随而於比立内村ニ後來御明山等願申上候節者、赤井沢御林之内ニ而口銭又者木品たり共、七歩三之割合ニ而七歩通者地元比立内村ニおゐて請取可申、三歩通者幸屋渡村・幸屋村関子中江配分可致、田之沢之儀者一円比立内村取合片付可申、高倉沢より赤井沢口迄之場所者は迄之通堰林ニ相片付、三ヶ村ニ而守護可致、若以来関用木之外右場所ニ而御明山願申上候節者、三ヶ村関子中ニおゐて配分致定

右之通、本郷肝煎・郷人并ニ枝郷地主中取扱



を以両村へ申含候所、双方納得右ニ相極以來  
右ヶ条表之通相守り、聊も異論申上間敷段兩  
村地主・郷人・関子共迄受形相済、此度一件  
申断内事ニ仕候儀相違無御座候、依而為後日  
之連印書付如件

文化十壹年  
戌七月朔日  
本郷  
肝煎殿  
長名衆  
枝郷村々  
地主衆

比立内村地主  
三左衛門<sup>㊦</sup>  
同村長名  
市十郎<sup>㊦</sup>  
同  
長四郎<sup>㊦</sup>  
同  
甚三郎<sup>㊦</sup>  
同  
作右衛門<sup>㊦</sup>  
同惣代小人頭  
吉左衛門<sup>㊦</sup>  
(ママ)  
関子中<sup>㊦</sup>  
幸屋渡村地主  
久治<sup>㊦</sup>  
同村長名  
長之助<sup>㊦</sup>  
同  
久藏<sup>㊦</sup>  
同  
孫市<sup>㊦</sup>  
同  
惣太郎<sup>㊦</sup>  
同  
孫作<sup>㊦</sup>  
同  
関子中<sup>㊦</sup>  
幸屋村地主  
清十郎  
同村長名関子  
清之丞  
同  
甚助

(表紙)  
「上

荒瀬村控  
之分」

乍恐書附を以奉願上候御事

枝郷  
土倉村

一、当高拾貳石九斗六升八合  
一、家数拾軒  
一、人数四拾弍四人  
一、馬数拾壹疋

ノ

右之通寛文十二御本帳付御高守護之枝郷村ニ御座候、全体右村之義者小渕村枝郷小様村沢目之内飛入高ニ御座候而、先年より格別村境と申も無之、草飼馬放し場先年覚形を以方限相守相続罷有候所、去ル明和元(ママ)辰年、両村郷之儀ニ付村境被立下度段御苦柄願申上候所、御檢使神上屋藤左衛門殿御組合被為出、両村肝煎・郷人御先立仕場所御見分ニ入置候所其節被仰渡候、御田畑・屋敷共ニ入組候所江何れ所限り境被立置候儀不相成候得者、是迄之通覚形を以境相守り御苦柄相省可申、且於土倉村ニ新屋敷・新畑等切開候而ハ小様村沢目往々迷惑之趣尤之事ニ候間、以來新屋敷・新畠切開候儀不相成候段御ヶ条書を以被仰渡相済罷有候所、当去春中小渕村より申参候者、大石沢と申処先年より小様村内馬寄ニ在之候所、土倉村ニおいて自由致候段甚以心得不申趣取合ニ御座候故、土倉村地主・郷人吟味致候所、全左様之場所ニ者無御座、先年より土倉村大石沢兩所草飼馬放場ニ御座候而、かくるみ沢と峯分ケニ而双方相守罷有申候、全体右大石沢之儀者御本帳付御田地水上、殊ニ右沢目之内あけの上と申書処不殘御本帳付畠地、近年荒地ニ罷成居候得共、往々起返ニ相成候場所ニ而、右一沢水落相違も無之、土倉村持分ニ而先年より自由致罷有候場所故、右形を以駈合ニ相及候得共請引無之、土倉村之義者飛高之事故、御高地之外悉皆此方地形ニ候得共、大石沢上ミ平前者土倉村江為任置候場所ニ而、沢より下モ者不殘此方内馬寄ニ相違無之趣強而申分ニ御座候、然者右大石沢之儀者土倉村草飼馬放場共ニ纔敷場所壹ヶ所ニ而外馬寄迎も無是、年々其方地形かくるみ沢三之亦等江馬野放候節者、入合相頼馬寄入致罷有候体ニ而、自由致場所迎

[史料 19]

文化 13 (1816) 年「(大石沢を土倉村草飼に被仰付、小渕村より手入無之様被成下度につき願書)」

(湊榮興家文書 92、豎帳 1)

も無之、大石沢壺ヶ処草飼場ニ而御田地守護罷有候所、右場所迄ニ其方江自油被致候而者、有来候御田地守護可致様無之、一村潰ニ相及申外無御座候間、双方立会見分之上、先規覚形之通場所相守、

御上御苦柄相省、村方ニおいても双方迷惑無之様ニ致度候間、立会見分可被成趣親郷吉田村専七方迄取合ニ相及候所、同人方より申参候者、右見分之義小淵村郷人共江申談候所、先年より境無之場所故立会見分等ニ不相及趣申参候、依之無撫右之様不相極迷惑仕候間、御時節柄恐入候得共奉願上候、当秋廻り御検使様御序を以場所御見分被下置、先規覚形之通右場所土倉村大石沢草飼ニ被仰付、小淵村より手入無之様被成下度、隨而馬寄場所無之事ニ小淵村江相頼入置候ニ付勞煩仕候間、御憐愍を以馬寄場所三之亦之内分ヶ被下候歟、又者入合ニ被成下候而、年々取扱迷惑無之様被成下度、乍恐奉願上候御事

右之通ニ御座候間、乍御苦勞宜敷様被仰上被下置、土倉村壺村御田地守護御助被成下度乍憚奉願上候、以上

文化十三年

亥子

舟坂慶藏殿

荒瀬村肝煎

長左衛門<sup>㊟</sup>

同村長百性

長十郎<sup>㊟</sup>

同

与右衛門<sup>㊟</sup>

同

善左衛門<sup>㊟</sup>

同

惣兵衛<sup>㊟</sup>

同

五郎右衛門<sup>㊟</sup>

同

金五郎<sup>㊟</sup>

同

長藏<sup>㊟</sup>

土倉村地主

彦之丞<sup>㊟</sup>

同村長名

藤右衛門<sup>㊟</sup>

同

金之丞<sup>㊟</sup>

同

庄兵衛<sup>㊟</sup>

同

五郎兵衛<sup>㊟</sup>

# [史料 20]

文政 11 (1828) 年 10 月 5 日「枝郷土倉村御林一件願 (五郎兵衛沢御見分につき)」

(湊榮興家文書 108、堅帳 1)

(表紙)

「枝郷土倉村御林一件願

上

荒瀬村」

乍恐以口上書附奉願上候御事

当三廿日朔日、枝郷土倉村郷人訴申出候者、当八月丹正月中当村立林之内五郎兵衛沢と申処江、隣郷小様村之者罷越雜木徒伐仕候を見当取押、小様村江申断候処、以来徒等無之様ニ郷中取扱も有之候間、此度之儀者内済ニ致呉候様達々訴訟ニ付、隣郷合之事故已来形申断内済聞済罷有候処、其後小様村地主方より土倉村郷人参呉候様ニ申来罷越候処、地主申聞候者土倉村之儀ハ小様沢目之内飛入高之村居ニ而、御高地より外当村地形ニ候間木草等迄手延不相成、猶其元村之上木立之場処、此方草飼之場処ニ候所、近年木柴相生し草飼不足致候故、追々伐取候趣申事故、挨拶致候者全く左様之筋ニハ無御座、当村之儀寛文十式之御竿ニ而御本帳付惣高拾三石余之村居ニ而、御林者勿論草飼馬放場共ニ先規覚形法切も有之、守護罷有、猶又家之上御林儀茂之儀も御帳付之場所ニ候得者、為何か其村ニ而自油被成候筋有之間敷懸合指置候処、今朝式、三拾人小様村より罷越無至来ニ右林伐倒候故、勿候得共不得止乱妨之振舞致方無之趣申出候故、不打置小様村親郷吉田村肝煎方江立会見分之上取扱致度、夫レ迄猥ニ伐取候儀御取防被下度段郷人を以取合ニ相及候処、挨拶申来候ハ、被仰越ニ付小様村郷人吟味致候処、全く土倉村地所ニ無之、前度此方草飼之処、近年木柴生茂り草飼不足致候故、郷中相談之上伐取候趣申参当惑之次第ニ候、然者御林法切之儀ハ南者滝之沢より下モハ田之上と申、御帳付林ニ而家之上囲之内同様手近之場処ニ御座候故、右形を以取合ニ相及可申処、翌三日早朝人勢五、六拾人相催右場処江罷越、鯨波を上ケ大木・小木ニ不限伐倒候勢ひ、誠ニ恐敷趣次第ニ候趣訴申出候ニ付、指当り致方無御座、

銅山木山下浜御役処手近之事故、右形御届ケ申上、何卒御威光を以両村取合相済候迄、右御林乱妨ニ伐取候儀、御指留被成下度段願申上、夫レより吉田村肝煎方江明日早々場処立会見分致呉候様申遣、翌四日肝煎・郷人土倉村江罷越候得共、吉田村肝煎・郷人壱人も参不申、無扨伐跡見分仕候処、御林之内三ヶ式通り雜木伐倒、右之内五尺廻りより六尺廻迄松木八本、壱尺より貳尺迄拾三本伐倒申候、右御林之内植立杉式、三千も有之分、是者伐取不申残置申候、右之通り之仕合ニ御座候得者、此上如何様之理不仁ニ相預リ候も難計難済至極ニ奉存候、依是御時節柄恐入奉存候得共、御届ケ奉申上候間早速御見分被下置、右御林相立候様、随而小郷之枝郷一村御救被成下度御訴訟ニ奉存候御事

右之通り御座候間、宜敷様御取扱被下置度、乍憚奉願上候、以上

文政十一年  
子十月五日  
小川 敬内 殿

荒瀬村肝煎  
長 左 衛 門㊤  
同村長百性  
長 重 郎㊤  
同  
善 左 衛 門㊤  
同  
与 右 衛 門㊤  
同  
五郎右衛門㊤  
同  
金 五 郎㊤  
同  
常 吉㊤

〔史料 21〕

文政 11 (1828) 年 10 月「(御林御見分御尋につき答書)」

(湊榮興家文書 109、豎帳 1)

(表紙)

「

控 」

当村御林小様村懸り合之場処御見分御尋ニ付、乍憚御答、左ニ奉申上候

一、御尋、土倉村御林之内滝之下もと申字ニ而、南者滝之沢より下モ者田之上迄と申、法切之内小様村之者多勢罷越、当朔日・三日兩日無至来

ニ伐取候段訴申出ニ付、此度場処見分之上小様村郷人■■■相尋候処、右村郷人共申出候ハ、全ク私共伐取候場所ハ土倉村御林ニハ無御座、当村草飼場ニ候処、近年木柴生茂り草飼不足仕候故伐払、元形草飼ニ仕度段申出候ニ付、右草飼と申証拠ニ而も有之哉相尋候処、郷人申出候ハ境田道と申処先年より両村法切ニ而右より下モ無残当村草飼場ニ御座候段申出候、此儀如何致候哉

御答、御尋之趣御尤ニ奉存候奉承知候、右境田道と申所全ク村境と申儀ニハ無御座御林法切と奉存候、右御林法切左ニ奉申上候

崩之沢

一、雜木

郷中

南者崩之沢より北者境田道迄

右之通り之御法切ニ而元文四年御帳付林ニ御座候

一、又々御尋被成候者、小様村郷人申出ニハ、此度土倉村ニ而御林之内伐取候事ニ申上候得共、左様ニハ無御座、南者滝之沢より下モハ田之上迄と申御林ハ、滝之沢前平より土倉村之下タ田之平通り、先年御林之由老人共覚形茂有之、且又私共伐取候場処、右御文言之内ニ無之訳者、境田道と申処、滝之沢より余程下モ江通り候道筋ニ御座候、左候得ハ滝之沢と境田道之間田之平通り、右村御林ニ可有之段申出ニ付、段々見分致候処、小様村郷人申出之通、滝之沢より田之上迄之法切正徳年中之御帳付林、崩之沢より境田道之法切者元文年中御帳付林と相見得候、左候得ハ先御帳付法切滝之沢を飛越跡御帳付法切境田道と有之候得ハ、法切混雜致不相分、此儀如何指心得候哉

御答、御不審御尤ニ奉存候、右御林法切兩所入組候儀者、先年之事故具サ御答可申上様無御座、郷人共不穿鑿仕候儀一言可申上様無御座恐入奉存候、老人共より伝承候ニハ、滝之沢と申沢御覽被下置候通り上江引通し不申、浅キ沢ニ御座候而、沢頭不少平通り木立之場処、先法切御文言ニ不足仕候故、元文年中御取立林御帳付願申上候節、右沢頭取からみ境田道迄と願申上候由ニ御座候、乍去御答之儀者覚形一ト通ニ候得者、強而申上候儀者無御座候得共、此度小様村之者伐取候場処御覽被成下候通り、南者滝



之沢より下モハ田之上迄と申御法切ニ突合  
之場所ニ而、為夫か先年より御林ニ守護仕、  
前度より両三度炭釜等入置候得共、小様村  
より一言申断等ニ預り候覚も無御座、近ク  
者廿四年巳前文化式丑年炭釜相立、其節三  
枚銅山かこち沢と申処ニ大切有之節、右鋪  
主江売上候儀ハ村方之者并ニ近村迄目下覚  
罷有候事ニ御座候、猶又右御林之内下モ之  
沢と申処、前々より青木植立仕、当時尺以  
下迄式千余御座候、右之内文政五午年壹尺  
廻り・式廻り迄三拾本、下浜御役処江願申  
上拝領仕、水無村佐五兵衛ニ売払、郷中難  
渋相凌候節も御座候、右之通先年より右法  
切御林と指心得守護仕候場処ニ而、右御林  
下モ外レ境沢と申所、両村先規より覚形之  
法切ニ而、右沢下モ端通り御覽被成下候通  
り小様村ニ而漆木植立仕、右沢より上是迄  
手延等ニ預り候覚曾而無御座候、此度ニ相  
限り理不仁之致方一村可相立様無御座、乍  
恐御苦柄奉願上候、且又滝之沢平通りより  
村之下タ田之平先年御林之事ニ小様村より  
申上候由、全ク左様之場所ニハ無御座、委  
細御見分被成下候通ニ御座候、此度被伐取  
候御林之内残松之木何程有之哉御尋ニ付、  
左ニ奉申上候

一、式本 六尺廻より七尺廻迄  
一、十二本 五尺廻り  
一、拾九本 四尺廻り  
一、七拾本 三尺廻り  
ノ百三本

外ニ小松も有之候

右之通御尋ニ付御答奉申上候儀無相違無御座  
候、仍而連印御答書奉指上候、以上

文政十一年	荒瀬村枝郷地主
子十月	藤 右 衛 門
青木左一兵衛殿	同村長百性
生 沢 東 殿	庄 兵 衛
	同
	銀 蔵
	同
	彦 之 丞
	本郷荒瀬村肝煎
	長 左 衛 門

# [史料 22]

文政 12 (1829) 年 3 月「(草飼場を御用炭御運送の  
新牛道とすることに伴う替地につき願書)」

(湊榮興家文書 112、堅帳 1)

(表紙)

「  
上

」

乍恐以口上書奉願上候御事

一、当二月中委曲書載を以奉願上候通、本郷荒瀬村・  
枝郷茅草村右両村先年より之草飼場処そふ向と  
申処、今年御用炭御運送ニ付新牛道御通し、隨而  
牛飼料場ニ被成置候段被仰付、左様仕候而者両  
村惣当高五拾石余、家数九拾八軒、人数六百式  
拾壹人、馬数八拾式正有之村居、必止(至)と潰  
ニ相及申外無御座難渋至極仕候ニ付、御延引被  
下置度段、郷人出符(府)仕奉願上候処、段々御  
取扱其向重き御掛合等も被下置、猶又被仰含候  
者、村方迷惑形無余儀事ニ候得共、そふ向より  
荒瀬村船場迄牛道并ニ飼料場ニ不被成置候而者  
御用炭御運送不相成、左候而ハ御銅山方御指支  
御大事ニ茂相至候ニ付、是非右場処御用地ニ可  
被成置、仍而替地之場処ニ而も有之候ハ、願可  
申上段共ニ御叮嚀被仰含難有仕合ニ奉存候、此  
上御苦柄奉願上候茂恐入候得共、外ニ村方之内  
替地ニ相成候場処迎も無御座ニ付、猶又村方取  
合之上茅草村より願申出候場処、左ニ奉申上候

一、中佐山沢之内下馬寄と申処、是迄馬放場ニ御  
座候得共、今年より馬入置不申地焼仕、草飼場  
ニ取立申度、同沢之内みつき沢と申処、是迄茅  
草御山ニ而茅苧、又者牛等被入置、御自由被成  
候得共、今年より御指留被成下、村方江為御任  
被成下候様仕度、当時草飼ニ相成不申候得共、  
段々取立是又草飼ニ仕度奉存候

(下札)「一、下モ牧ハ草飼場ニ申付候、貢沢ハ銅山江相障候  
場処ゆへ難指免候」

一、同沢之内中佐山村より上ほふつき山下タ迄之  
内、鋪主居小屋処々有之候、間々草立之所刈取  
弁用仕度、是又其向鋪主江被仰含、彼是勞煩等  
無之様被成下度候

一、下馬寄・ほふつき山下タ是迄馬放場ニ仕罷有  
候得共、草飼ニ取立候得者、馬寄無御座候間、  
御掛山荒瀬川勝とけ沢之内越畑・千本杉両処台  
通り馬寄場ニ被仰付被下置度候、外ニ大沢之内

やけん沢奥通同断奉願上候

(下札)「三、ほふつき山下タ、草飼方限り付置指免候、しとけ沢之内越畑・千本杉、右両所之伐り掛ケ之地蔵と申所之路通り馬放し場ニ借置候、大沢之内やけん沢奥通り右之方半分借被下候」

一、そふ向之内彦の沢并平通牛之足相立不申処、草刈取候儀是迄之通為御任被成下度候、右者下モ馬寄・みつき沢両処草飼ニ取立候内両三年中草飼致方無御座、如斯願申上候

(下札)「四、願之通り被仰付候、乍去其向之もの指障之筋も申聞候処ハ堪(斟)酌可致候事」

一、本郷荒瀬村之儀者、御存知被成下候通小沢海(街)道并上通野山川向法度山無残露熊道共ニ牛飼料場ニ御座候得者、外ニ替地願申上候場処無御座、当村担御掛山孫沢之内草飼替地願申上度奉存候得共、村方よりハ手遠之場処、殊ニ者不残木立ニ而草飼ニ可相成空地無御座、左候得者外ニ替地願可申上場処無御座、そふ向一方之草飼牛飼料ニ相成候而者、四拾九疋之馬数飼料必止と難洪至極ニ奉存候、仍之御時節柄願申上候義恐入奉存候得共、外ニ致方も無御座候間、一ヶ年式拾貫文宛馬草取扱料御合力被下置度奉願上候、左候得者右を以青引葛藁之類相調拾軒之馬持配分仕、馬取扱申度奉存候間、此段宜敷御聞届被下置度、右両段奉願上候間、御憐愍を以願之通被仰付被下置、困窮之両村数多之馬数御助被成下度、乍恐奉願上候御事

(下紙)「五、錢ハ御障有之難被下置ニ付、孫沢より悪木ヲ以、馬持之もの共江薪沓棚つゝ、向三ヶ年被下置候」

右之通奉願上候間、御苦勞乍千万宜敷様ニ被仰上被下置度、乍憚奉願上候、以上

文政十二年	荒瀬村肝煎
丑三月	長 左 衛 門 <sup>㊤</sup>
	同村長百性
	長 十 郎 <sup>㊤</sup>
	同
	善 左 衛 門 <sup>㊤</sup>
	枝郷茅草村地主
	吉 右 衛 門 <sup>㊤</sup>
	同村長百性
	仁 兵 衛 <sup>㊤</sup>
	同
	八郎右衛門 <sup>㊤</sup>
	同
	喜 藏 <sup>㊤</sup>

[史料 23]

文政 12 (1829) 年 4 月「差上候書附之事 (牛放場を畑にしても差障り無之につき)」

(湊榮興家文書 114、状 1)

差上候書附之事

一、上者越島御林脇古畑通りより、下者さうに向寅野新堰之上迄、今年より当村小人共畑願申出候ニ付、牛放場差障り無之哉之儀御再念御尋ニ御座候、影台通り江銀山ニおゐて畑開候ニ附、牛相障候而ハ早々勞煩有之候ニ付、逆も牛入置候事ニ不相成候間、小人中願之通り相任せ申度、元来大川向之儀者、草飼料食尽只今ニ而ハほお計リニ而牛飼料ニも不相成、依而畑ニ仕候得者、跡々草も相立、又候草飼ニ可成可申、右年数之内ハ小沢海(街)道より木揚場之方并ニ露熊路ニ而草飼相弁、向通りへハ牛遣不申様ニ相成可申奉存候段申上候処、左候ハ、右場処畑地ニ相任せ可申、万一牛方共馬牧草飼場向新林道脇より小様村土孫田之下并ニ馬牧共ニ牛入置草飼之障ニ相成候節ハ、見当次第取捕野牧牛ニ而も牛方惣割ニ而壹疋ニ付三貫文づゝ過料取立させ、受取可申候間、其段左ニ相心得可申、依而一札可差出被仰附委細畏入申、全ク馬牧草飼等へハ曾而相障申間敷、為後日之連印一札、依而如件

惣牛方

連印

当処牛方

文政十二年	清 助 <sup>㊤</sup>
丑四月	清 兵 衛 <sup>㊤</sup>
当処	福 松 <sup>㊤</sup>
肝 煎 殿	五 郎 惣 <sup>㊤</sup>
惣長名衆中	丑 松 <sup>㊤</sup>
	巳 兵 衛 <sup>㊤</sup>
	善 治 <sup>㊤</sup>
	鶴 松 <sup>㊤</sup>
	留 兵 衛 <sup>㊤</sup>

[史料 24]

文政 13 (1830) 年正月「林売渡証文之事」

(湊榮興家文書 116、状 1)

林売渡証文之事

一、調錢五貫文ニて永代売渡ス申候処、実正御座候、右林場所之儀ハ、大吉沢・弔又両沢之内、右ハ目当り平沢切、左ハ滝の有永根境なり、い

せはつ上ニニり道とし候而もかまひ御座なく候、  
右場所之儀ハ土倉壱郷之地主・郷人之取合ニ而  
売渡ス申候、仍而為後日印判如件

土倉村

売主

地主

文政十三年

藤 右 衛 門㊦

寅正月 相滝村

庄 兵 衛㊦

長 兵 衛殿

甚 五 郎㊦

長 四 郎殿

彦 右 衛 門殿

# [史料 25]

文政 13 (1830) 年閏 3 月 23 日「覚 (幸屋渡村・幸  
屋村御林境の件で末々異論仕間敷候につき)」

(湊榮興家文書 117、状 1)

覚

此度幸屋渡村・幸屋村御林境論地之儀申出候ニ付、  
不得止事、両村地主・郷人立会之上、場所致見分候、  
且其節両村江相尋候者は迄其村御林境何れの場所  
と差心得罷有候哉、幸屋村より申出候者菅生村林  
継之沢より野場続当村御林境と存罷有候、幸屋渡  
にて申出候ハ幸屋村御札御文言にハ鶏様よりと御  
座候得ハ右様切りと心得罷有候段申出候、仍而幸  
屋村へ申談候者其村覚形菅生村林之次之沢野場継  
御林境と差心得候儀心得違ニ可有之、其詮者御札  
御文言

荒瀬村支配比立内村之内鶏様より上江ハひいの沢  
東南片平石沢口より高崎沢迄峯限打廻水落次第川  
前平通共、幸屋村水之目林ニ立置之間、下草にて  
も刈取べからざるものなり

右之通之御文言ニ候得者、右様より上ミ野場ニ預  
候御文言にハ無之相見得候、且又幸屋渡村へ申聞  
候ハ其村にてハ鶏様切と心得居候段申聞候得とも  
全左様之御文言にハ無之、前平通御林ニ相立候処  
ハ惣名鶏様御文言之内と相見得候、左候へ者雙方  
心得違之覚形ニ相見へ候、仍而此度致見分候処、  
鶏様之肩より大川前へ引続候山崎にて被立置候字  
所と相見得候間、以来右峯脇之山崎を以境相護、  
雙方異論無之御林守護可致候、然者右山崎より少々  
御林舒ヒ有之候、右舒之所是迄幸屋村にて御林之  
内と心得守護いたし、幸屋渡村にても幸屋村御林  
之内と相心得、右村へ自油為致差置候段不心得之  
至ニ候、仍而此度右山崎を境ニ致候得者、林舒之

東南平通幸屋渡村へ相片付候故、右林舒之木立是  
迄幸屋村にて見盲指置候事故、毛之上ハ幸屋村へ  
相任せ伐取可申、下地ハ幸屋渡村にて已来守護可  
致、右之通両村江申諭候所双方覚違、此度方限立  
被下候場所至極御尤承知仕候上者、以来右山崎境  
と仕、両村共ニ納得仕末々異論仕間敷候、為後日  
之両村地主・長名連印書付指上候儀、依而如件

幸屋渡村

地主

文政十三年

久 兵 衛㊦

寅閏三月廿三日

同村

肝煎

長名

長左衛門殿

惣 太 郎㊦

長名

同

善左衛門殿

久 松㊦

常 吉 殿

同

立会比立内村

久 藏㊦

地主

同

三左衛門殿

孫 作㊦

同

長 之 助㊦

幸屋村

地主

善 治㊦

同村

長名

清 之 丞㊦

同

長 治㊦

同

甚 助㊦

# [史料 26]

文政 13 (1830) 年 4 月「乍恐書附を以御答奉申上候  
御事 (下ノ沢などを土倉村御林に被仰付度につき)」

(湊榮興家文書 51、豎帳 1)

乍恐書附を以御答奉申上候御事

一、去々子十月朔日、枝郷土倉村御帳付林江隣郷  
小様村之者共三拾人計不時ニ罷越、雑木・松之  
木之類無到来ニ伐側 (倒) 候故、郷人共罷出相  
尋候処、此方之草飼場所へ相生シ候木柴切払、  
草飼ニ致候趣ニ而、乱■■妨之振舞中々取防可  
申様も無之段本郷荒瀬村へ伺申出候ニ付、不打  
置小様村 [ ] 吉田村肝煎方へ前段之仕抹 (始



末)并明日早々立会場所見分之上取扱致度、夫迄乱ニ切取不申様、其向御差留止被下度、郷人を以取合ニ相及候所、返書申来候ハ、小様村郷人吟味致候所、全土倉村地処ニ無之、前每此方草飼之場所近年木柴生茂り草飼不足致候故、郷中相談之上伐取候段申参、誠ニ当惑之次第ニ御座候故、猶又申遣、立会、方切等之義申遣取合ニ相及申度存罷有候所、又々三日早朝人勢五、六十人相催、右場処へ罷越大音上ケ、大木・小木ニ不限伐側候勢、ケ様ニ候得者、右御林無残伐被取候外無之段伺申出候ニ付、指当り取防可申様無御座、銅山木山下浜御役処手近之事故、其節御詰会御林方青木左一兵衛様へ右之段願申上、何卒御威光を以両村取合相済候迄乱防ニ伐取候義、御指止被成下度段願申上、夫より吉田村肝煎方へ立会之義達々申遣、場処見分之上方切等之訳ケ掛合ニ相及候得共、小様村ニ而ハ境田道より下無残右村草飼場之由申募、土倉村之義ハ正徳年中より御帳付林之事故、右形り掛合候得共聞済無之、止事を不得同年十月中委曲書載を以御苦柄奉願上候所、其後御沙汰も無之ニ付、猶又去丑六月中御取扱之義奉願上候得共、去年中も御沙汰無之ニ付、又々当春迷惑形奉願上候所、此度各々様吉田村へ御廻在被下置、当六日右場所御見分可被下置段被仰付、私共御先立仕委曲御見分被成下、難有仕合奉存候、且御見分向被仰含候者、土倉村御林御文方限御文言、南ハ滝ノ沢より下ハ田之上迄ト有之候、右場処何方と指心得御苦柄願申上候哉御尋ニ付、其節御答奉申上候ハ、御覧被成下候通南滝ノ沢より村々後口通下ハ坂ノ下田ノ上迄之方限と指心得、先年下并沢■■■二本有之、右沢口迄之御田地水掛り川田之上ニ相当り候場所故、右沢口方限りと指心得、先年より御林守護罷有候段夫レため村端シ下モノ沢ト申所へ廿年以前右沢之内ニ者青木式千本程、当時壺尺より三尺廻り迄植立等も仕指置候段奉申上候所、其節被仰含候ハ、村方寛形大ニ相違致候、全ク左様之御林ニハ無之、家之上奥山之義ハ御林方限之外と相見得候、其詮ハ村より下沢ニツ有之、右之内野■■■場境之沢、小様村孫畚面ニ田ノ沢ト字有之候、左候得者は迄其村寛形之林ニ候得者、南ハ滝ノ沢より下ハ田ノ沢迄ト方限相立可申場処ニ候、然ル所正徳年中林ニ立置候方限之義ハ、南ハ滝ノ沢

より下ハ田ノ上迄と有之、猶又小様村郷人共申出候ハ、先年滝ノ下御田地之上平通下ハ坂ノ下御田地之上迄林ニ有之由、左候得ハ右御林方限田ノ上平通ニ相限り、全ク村之上奥山へ相からみ候方限ニハ無之、左候得ハ是迄其村にて林ニ立置候家ノ上境田道迄之間ハ、小様村申出之通、先年右村草飼之地処ニ相見得候間、此度より相改小様村草飼山ニ片付可被置段被仰含恐入奉存候、仍而ハ此度御見分御取調之上、是迄数十年林ニ取立候場処村方心得違ニ可有之段被仰含、此上彼是違背可申上様も無御座奉存候得共、委曲御覧被成下候通、滝ノ沢より下田ノ端上ニ相当り候場所者ミヘ■■■先年林立可有之と御申之場所ハ纔之■■■通りニ而、永続御林等ニ可相成場処ニもとハ相見得不申、偏ニ村方心得ニハ滝ノ沢より下之沢口迄御田地ニ候(ママ)御座候故、右御田地之上迄家之上無残右御林御文言之内と御林■■■之指心得と指心得、数年来之取立林ニ御座候へハ、当時之郷人共何代以前と申事も存不申、猶又安永年中小様村太右衛門・七郎兵衛と申もの、塚ノ台開御注進申上候節、右堰筋土倉村御本田堰上通新堰相通申度願申上候ニ付、其節近藤惣左衛門様・中川弥右衛門様・坂本吉五郎様・■■■大和田兵吉様御組合被為出、右新堰相通候而土倉村指障無之哉御尋之節奉申上候、当村本田堰上前新堰相通候而ハ、堰間軒数余分ニ相隔候義ニも無之候得ハ石砂堆り等之難渋日々出来、往々御本田堰指障り可申、猶又当村御林之中堰筋相通候事故、是以御林取立ニも相障旁迷惑形其節ケ条ニ申上候通ニ御座候所、其節小様村より申上候ハ、新堰相通候時節之義ハ土倉村要水障り無之節を見合、石砂堆出来之節ハ早速人勢相重候而も早速堀上、右迷惑筋無之様ニ可仕、猶又林之中堰筋通置候とも、全諸木へ不相障様一郷嚴重ニ申会、小人共迄ニも急度申渡候事故、是又指障ニ相成間敷段其節小様村郷人共より達而申上候ニ付、其段又々土倉村へ被仰含候ニ付、無扨右堰筋相通候事ニ御答申上候義ハ、其節之御ケ条御覧被成下候通ニ御座候、左候候(ママ)へ者右林之義ハ前以小様村ニおゐても土倉村御林と差心得候義ニ可有御座、左候得ハ先年より右御方限之内之御林と存奉存候、且又右村之後口十間とも御離レ不申処ニ御座候得ハ、右之所草飼ニ相成候時ハ斯元より■■■支配

ニ相成、万一野地焼野火等ニ而も相生候節ハ、  
村居住居も相成不申、誠ニ亡所仕候外無御座難  
洪至極ニ奉存候、猶又村下田ノ沢と申字小様村  
孫畚面ニ有之由、右■沢右並沢土倉村ニ而者下  
ノ沢ト申相唱候沢并村之上ミ御林方限ニ相立候  
滝ノ沢、右両沢右村孫畚面ニも無御座候由、左  
候得ハ元より土倉村ニ相属候地所ニも可在御座  
と奉存候間、右下ノ沢よりは迄■之通土倉村御  
林ニ被仰付被下置度奉願上候、下ノ沢より田ノ  
沢迄は又不少御林ニ取立罷有候得共、右木立之  
所無残小様村草飼ニ被仰付被下候而も、此義ハ  
無拠も無御座奉存候■■間、御慈悲（悲）を以  
数年来守護之林長く相保、至而小郷困窮之一村  
御助被成下度、乍恐御訴訟ニ奉存候御事

右之通ニ御座候間御帰之土此段宜敷被仰上  
被下置度、小郷困窮之村居とハ乍申御本帳  
付之枝郷ニ御座候間、宜敷様ニ被仰土被下  
置数多之御百姓御救被成下度、乍憚奉願上  
候御事

	荒瀬村
	肝煎
文政十三年	長 左 衛 門
寅四月	長 名
小村丹右衛門殿	長 十 郎
御 代 正 八 殿	善 左 衛 門
岩 谷 惣 助 殿	与 右 衛 門
	常 吉
	吉 三 郎
	五郎右衛門
	枝郷土倉村
	地主
	甚 五 郎
	長 名
	藤 右 衛 門

# [史料 27]

文政 13 (1830) 年 10 月「土倉村一件済寄御検使ケ  
条写 (御林方限につき)」

(湊榮興家文書 118、豎帳 1)

(表紙)

「 文政十三年  
土倉村一件済寄御検使ケ条写  
寅十月 』  
覚

蓮沼仲支配所

吟味役

小川敬内を以秋田郡大阿仁吉田村支配郷小様村  
より願申上候者、荒瀬村枝郷土倉村之儀者当村  
之内江飛入高二付、右御田地相応之林・草飼共  
方限等相分り罷有候処、明和年中関根台向両村  
取立林双方覚違有之、御苦柄筋ニ相成、御検使  
奉願上候処、上神谷藤左衛門御組合被為遣、両  
村御吟味被成置候所、双方分明仕其節之御ヶ條  
被仰渡筋相守罷有申候

一、右林荒瀬村御林帳方限測之上土様脇下モ者境  
田道迄ト有之、右境田道下之儀者小様村・土倉  
村入会之草飼場所ニ候処、自然柴立候分三拾年  
已前より土倉村ニ而最寄ニ付柴取立置候故、右  
ニ而者往々草飼不足致候間、伐取候様小様村先  
地主代より数度申遣候得共、彼是延引罷有候内  
ニ段々木立手広ニ相成、別て近年草飼不足ニ付、  
元形草山ニ致候間、当村ニ而右木立伐取候様、  
土倉村江当春中より申遣候処、なんととても勝手  
ニ致候様挨拶ニ而、其後一円無沙汰ニ付、不得  
止又々伐取候様厳敷懸合候処、土倉村より庄兵  
衛・甚五郎を以申参候者、是迄盛木ニ相成候処  
伐取草山ニ致候義至極迷惑仕候間、是迄之通り  
林ニ為立呉候様願候得共、近年塚之台・関根台  
式ヶ所開発ニ而、式拾石余之出高二罷成、殊ニ  
近年来小渕村より三枚・一之又御両山江諸材木・  
米運送之牛馬往来繁ク、途中泊野放等致候ニ付  
草飼自然相尽、誠ニ御田地守護形相抱り候ニ付、  
是非此度両村ニ而立会伐取候様致度、弥得心無  
之候得者、当処有人ニ而伐取候外無之申断候遣  
候得共、其後ハ何れ之返答も無之、唯一寸逃れ  
之致方ニ付、当月朔日小渕村・小様村人数罷越  
伐取候所、荒瀬村肝煎より本郷吉田村肝煎方江  
利不尽之趣断ニ付、何れ双方分明致候迄伐取候  
事指控候様吉田村肝煎より申付候得共、全ク分  
明之地所ニ者無之、当村入会草飼山江自然生候  
木立ニ相違無之ニ付、又々翌三日両村人数罷越  
伐取候処、荒瀬村より水無下夕浜御役所御詰合  
青木左一兵衛殿・生沢東殿江御訟申上候ニ付、  
何れ両村肝煎・郷人立会如何様之訳ニ而願も不  
申上伐取候哉可申出、吉田村肝煎御吟味ニ付伐  
取候事ハ指留、三ヶ壺余伐残差置申候

一、当月十一日、荒瀬村肝煎・郷人、土倉村郷人、  
吉田村肝煎、小様村地主・郷人右地処立会見分

致候処、土倉村郷人申候者、当所御林方限り上ミハ崩れ之沢より下モ者境田道迄壺ヶ処、境田道上滝之沢より下モハ田野平境沢迄一ヶ処、右式ヶ処共ニ御帳付林之趣申条ニ候得共、小様村郷人申候者左様ニハ無之、境田道迄土倉村ニ候得共、境田道より下モハ小様村・土倉村入会草山ニ相違無之、滝之沢より田之平迄等有之候、土倉村御帳付林ハ家之上へ者不抱滝之沢より田之沢通と先年より申伝へ相違無之と両村争論何れ相分り兼申候、仍而御時節柄恐至極ニ奉存候得共、御検使様被下置地処御吟味被成置度奉願上候

一、小様村之儀ハ御見聞被下置候通全体草飼不足ニ而馬寄場込も無之在所故、御銅山御掛山之内へ願申上馬寄入罷有申候、前書奉申上候通別而近年御開発并ニ御銅山へ諸物運送之牛馬往来野放致候ニ付自然草飼相尽、年増馬番共取候不足仕候得ハ、右御懸合之場処先年形之通り草飼山ニ不被成下候時ハ、必止と御田地守護形ニ相抱り申候、依而願之通被仰付御百性共御助被成下度奉願上候

一、荒瀬村枝郷土倉村より願申上候ハ、御帳付林隣郷小様村之者共大勢罷越無至来ニ伐取乱妨之致方故、其節右村郷人并ニ本郷吉田村肝煎方へ様々懸合ニ相及候得共、不届当之挨拶ニ而難相分、無拠同年十月中委曲書載を以郷人出符(府)之上御検使願申上候処、其節被仰渡候ハ今年最早雪路ニも相成候事故、来春雪消次第御見分被下置度候段被仰付、去春中御渡り奉致候得共御沙汰も無御座、長々ニ相成候而ハ伐倒候諸木朽損草木生茂り伐跡方限等も粉敷、随而御林取立ニも相障り迷惑至極仕候ニ付、猶又去丑六月右形書載を以御見分願奉申上候得共、今以御沙汰も無御座難決至極ニ奉存候、兼而願奉申上候通、御高拾三石余至而小郷之枝郷、殊ニ一之又・三枚銅山禁郷ニ而金堀入込之村居ニ御座候得ハ、右様々之御取扱御手延ニ相成候而者、様々御林徒等相生じ迷惑至極ニ奉存候、依之御時節柄恐入奉存候得共、当春雪消次第御検使様被下置場処御見分、先規御林方限り守護仕小村之枝郷多数之御百性共御助被成下度、乍恐奉願上候

一、右之通両村より願申上候ニ付、御検使被差越品々御吟味被遂置候処、小様村より申上候ハ草飼山之儀ハ荒瀬村にて枝郷土倉村帳付林之趣申

上、御吟味被成置候処、帳付林之儀ハ滝之沢下より田之上迄と有之、土倉村前度川向ニ住居之処、勝手を以右帳付林境通り引越、屋敷四軒之内壺軒ハ境通りへ相抱り、残り三軒より山所之儀ハ帳付林へ不相抱候段御吟味被成候処、あらせ村ハ御受申出、前文之通右帳付林境通りより村居後口山処共、両村草飼入会山ニ被仰付候

一、土倉村申出候ハ、草飼入会山ニ御受申上候山処、数年来取立林ニ御座候間雑木ハ被下置度、青木も不少取立罷有候ゆへ御用等ニ相成候迄符人へ被仰付被下度申出ニ候、依而青木之分ハ御用木ニ相成候迄符人へ被仰付、雑木之義ハ土倉村へ被下置候間、来春迄之内ニ伐取可申候、一兩年中ニ伐取不申候ハ、土倉村小渕村・小様村郷人を以伐取可申候、右木之分ハ土倉村へ被下置候

右之趣御吟味之上相済被仰渡候間、此旨荒瀬村・小様村へ可被申渡候、以上

寅十月

小松丹右衛門

御代庄八

岩屋惣助

右本紙直々吉田村へ相返し候事

# [史料 28]

天保6(1835)年間7月「乍憚以書付奉願上候御事(幸屋村草飼場処永代売渡につき)」

(湊榮興家文書 125、状 1)

乍憚以書付奉願上候御事

一、当村草飼場処之内小谷地水落次第、深沢水落次第、小谷地尻者東南外小根地土より向小沢共ニ左山越し道迄峯限り

右場処之義者幸屋渡村草飼不足ニ付、右村より願申出ニ付先年より右村へ貸置候場処ニ御座候、然者此度郷中ニ而難指延錢入用ニ付、郷中一統相談之上、当村之義者草飼不足之村方ニも無之、外ニ入用之場処ニも無之候ニ付、此度幸屋渡村へ永代売渡申度取合ニ相及候処、幸イ之事ニ候間、買入申度双方相談相決、此度右場処へ境相立候通り、三拾六貫五百文ニ売渡申候、何卒右之趣宜御聞届被下置度奉願上候、猶売券証文へ御加判被下度奉願上候、以上

幸屋村地主

天保六年

善 治<sup>④</sup>



未閏七月	同村長名
肝煎	長 治 <sup>㊤</sup>
長左衛門殿	清 三 郎 <sup>㊤</sup>
	小人頭
	清 九 郎 <sup>㊤</sup>
	郷 中

## [史料 29]

天保 6 (1835) 年閏 7 月「乍憚以書付奉願上候御事  
(幸屋村草飼場処永代買入につき)」

(湊榮興家文書 126、状 1)

乍憚以書付奉願上候御事

幸屋村草飼場処之内小谷地水落次第、深沢水落次第并ニ小谷地尻者東南外小根地土より向へ小沢共ニ左山越し道迄峯限り、右場処之義者当村草飼不足ニ付、先年より幸屋村より借用相弁じ罷有候処、此度右■村ニ而難指延錢入用ニ付、当村へ永代売渡申度段郷中一統より取合ニ付、村方相談之上此度永代買入申候、何卒右之趣宜御聞届被下置度奉願上候、以上

	幸屋渡村
	地主
天保六年	久 兵 衛 <sup>㊤</sup>
未閏七月	同村
肝煎	長名
長左衛門殿	久 藏 <sup>㊤</sup>
	久 松 <sup>㊤</sup>
	郷 中 <sup>㊤</sup>

## [史料 30]

天保 8 (1837) 年 2 月「(幸屋村と萱草銅山の境につき願書)」

(湊榮興家文書 132、豎帳 1)

(表紙)

「

上

荒瀬村控 』

乍恐以口上書奉申上候御事

当村枝郷幸屋村地形之内あぐと合沢之儀、前度茅草御山と掛り合之義、其節確成書付ニ而も有之候ハ、書付面ニ致可申出被仰付候得共、外ニ慥成書付等無之候得共、其節銅山御詰合錦引考蔵様・木山御詰合湊与市様御見分被下置候通、茅草御山と村方之境と申義者無之、当村絵図も有之候得共、

南は仙北境、西し者小阿二(仁)川目、東者小又境・小測境、北者水無村境と有之、村方領之内ニ小沢銅山・茅草銅山と計有之候得者、外ニ村方と御山之境と申義者先年より曾而覚無御座、御山御用地之外村方領と差心得、是迄自由仕来罷有申候、且又茅草御山近処迄御田畠も有之、夫々御高守護仕罷有申候、右あくど合沢之義者文政十二年御帳付ニ仕書上申候、且亦あくど合沢御林前度御明山願申上、炭釜相立銅山御用炭御請負仕候事も御座候得共、其節者茅草銅山より一向彼是之申出も無御座、村方自由仕罷有申候、茅草御山本番役橋本永助殿勤中ニ相成候節より掛り合ニ罷成候場処ニ御座候、其以前ニ者茅草御山より右場所江矢板取ニ参ニ在有(ママ)之故、村方之者見当り吟味仕候処心得違仕候故強而申訳ニ預差免し遺候訳も有之候、右之通りニ御座候間、一ト通右場所御見分之上御山御用地之外村方江御任被下置、小郷之村方御助ケ被下置度、乍恐奉願上候御事

右之通ニ御座候間宜敷様御取扱、小郷之村方御助被下置度奉願上候、以上

天保八年	荒瀬村肝煎
西二月	長左衛門
豊田宇左衛門様	同村長百性
菊地恒助様	長 十 郎
上	同
	善左衛門
	幸屋村地主
	清 十 郎
	同村長名
	長 治

## [史料 31]

天保 8 (1837) 年 3 月「乍恐以口上書奉申上候御事  
(幸屋村と萱草銅山の境につき願書)」

(湊榮興家文書 133、豎帳 1)

乍恐以口上書奉申上候御事

当村枝郷幸屋村地形之内あくど合沢御林之儀、前度茅草御山と懸り合有之ニ付、其節慥成書付ニ而も有之候ハ、書載を以可申上被仰付候得とも、外ニ慥成書付迎も無御座候得とも、其節銅山御詰合綿引孝蔵殿・木山御詰合湊与市殿御見分被下置候通、茅草御山と村方之境と申儀者無之、享保十三申年改絵図も村方ニ有之候へとも、南者仙北境、西者小阿仁川目、東者小又境・小測境、北者水無

村境と有之、村方領之内ニ小沢銅山・茅草銅山と有之候へ者、外ニ村方と御山之境と申儀者先年より覺無御座、御山御用地之外村方領と差心得、是迄自油仕来罷有申候、且又右あく合沢之義ハ先年より村方取立之場所ニ而、去ル寛政八辰年奥左山村庄右衛門と申者、手内難洪形有之、右場所炭釜願申出、村方江口錢差出し炭焼取小沢御山江御うり上ケ■仕、跡々共ニ村方取立相応之林ニも罷成候処、文化十酉年中新林御帳付仕、方限り左ニ奉申上候

枝郷

幸屋村

一、雜木

西かふか様峯続南野場地より北者薄様沢峯きり右之通り書上仕、村方林ニ相違無御座候、然所茅草御山木(本)番役橋本永助勤中より、猶是支ニ預り右場所懸り合ニ預り村方迷惑千万ニ奉存候、其以前迄ハ奉前条奉申上候通炭釜等相立候へとも、外ニ支等ニ預候ニも無御座自油仕来候場所ニ御座候、依之何卒村方先年形之通御山御用地之外村方へ為御任被下置、困窮之村方御引立被成下度、乍恐奉願上候御事

右之趣宜敷御聞届被下置、困窮之村方御引立被成下度、乍憚奉願上候、以上

天保八年

西三月

豊田宇左衛門殿

菊地恒助殿

荒瀬村肝煎

長左衛門

同村長百性

長十郎

同

善左衛門

同

与右衛門

[史料 32]

天保15年(1844)8月1日「一札指出候事(塚ノ代関の水盗み取り吟味につき)」

(湊榮興家文書 148、状1)

一札指出候事

私共関ふしんも水も入不申、春中□■御村塚ノ代関より水ぬすみ取り是迄自油致、田地耕作仕候処相違無御座候得者、私共立合見分之上御吟味ニ預り、其上本郷肝煎殿迄申立ニ相成、誠ニ恐入奉存候、依之達々御云々申上候処、早速御免被下置忝仕合ニ奉存候、以来是迄通之致方有之ニおゐてはいかなる御取扱ニ相成候而も少も御うらみ申上不申候、

猶又過料と被仰付候而も早速指出可申候、為其地主長名連印一札如件

天保十五年

辰七八月一日

小様村

地主

全左衛門殿

土倉村地主

藤右衛門

同村長名

藤左衛門

同

銀藏

[史料 33]

嘉永2(1849)年12月「(相滝村長兵衛御吟味被成下度につき願書)」

(湊榮興家文書 160、堅帳1)

(表紙)

「

上

土倉村」

乍恐書付ヲ以奉願上候

一、私儀先年より大石沢住居仕、何角御厚德ヲ以家内相続仕難有仕合ニ奉存候、然者去ル何年已前文化九壬申年十二月七日、郷中諸郷役滞不少有之、本郷表より厳敷御才足ニ預り、郷人大勢御越被成、家賤(財)諸道具直段付改、不足処林地共ニ御引上ニ相成無扱御事ニ奉存候、其後親類中へ無心申入候而錢調達仕本郷へ上納(ママ)無残上納仕候、林等之儀者菩提寺へ願申上候処、同寺より本郷肝煎殿へ御頼之御状条、右林地形共ニ不残拝領被仰付罷有候処、其後天保元庚寅年私銅山へ渡世ニ参、留主中右林之内壱ヶ処、土倉村売主藤右衛門・正兵衛・甚五郎右三人、買主小様村枝郷相滝村長兵衛・彦右衛門・長左衛門右三人売払候由、証文表地主藤右衛門と有之候、然者当春中より木山御役処へ願申上候而炭焼上納致罷有候処、然者九月始方右地場処炭焼共参候処、相滝長兵衛と申者右林へ買入証文持参致候而、当人共へ此方之林ニ御座候間、木伐り取事者相成不申と山刀・正切取り押へと可申厳敷迫立られ、炭焼共早々右場処より逃参誠ニ当惑致、依而之(ママ)木山方へ炭上納相成兼、誠ニ恐入至極奉存候

右之通乍憚被仰上、何卒相滝村長兵衛御吟味

被成下度、急段炭焼方へ相成候様ニ御取極被成下度奉願上候、以上

土倉村地主

嘉永貳年

五郎兵衛<sup>㊦</sup>

西極月

御本郷御箱元

[史料 34]

戊（嘉永 3 <1850>）年 8 月「荒瀬村枝郷土倉村五郎兵衛、大石沢林などにつき演舌書取」

（湊榮興家文書 319、堅帳 1）

大石沢荒瀬村支郷土倉村五郎兵衛演舌書取左之通り

（貼紙）「荒瀬村枝郷土倉村五郎兵衛演舌書取左之通り」

一、私事先祖より土倉村之内大石沢住居ニ而、先年より大石沢林取立毛ノ上薪伐出、右余勢ヲ以相続罷有候所、去ル安永年中三枚・壱ノ又御両山薪炭・諸品御運送之牛貳百八拾疋御他領より御雇、右牛飼料場ニ銅山方へ御貸上ニ相成、無扨伐払申候申候（ママ）、其後御雇牛御延引ニ相成候ニ付、大石沢又々取立林ニ仕相続罷有候、然所去ル三拾九年以前文化九■壬申年十二月中諸繫不少滞本郷より厳敷御吟味ニ而、地主彦五郎之丞始多勢本郷より才足人兩人罷越、家財諸道具代付本郷へ御引上ケ被成置候得共ニ相成候得共、諸繫都合不相成、私取立林大石沢御引上ニ預迷惑仕候得共ニ付、無扨仕合翌文化十■癸酉正月中親類中之助力ヲ以、諸繫不納分都合上納仕候、林之義ハ菩提寺江願申上候処、本郷肝煎長左衛門殿へ御申入被下早速御返被下候付、右林之義ハ何方ニも懸り障無御座候

一、天保元寅年手内難洪ニ相成ニ而相続難相成、銅山方へ働ニ参

一、去ル嘉永元申十二月中木山御役処へ願申上、大石沢林字処滝ノ沢と申所御明山被仰付、御銅山御用炭御受負仕、去酉春中より炭釜相立焼取上納罷有候処、九月初方小様村枝郷相滝村長兵衛・彦右衛門兩人焼炭釜へ罷越、釜子共へ此処ハ我々買取候故、炭釜相立候義不相成早々引取可申、斯申候而も引取不申候得ハ山刀・■切鐮取押ひ其上手を立追払候外無之、左ニ相心得可申と申断ニ而罷帰、釜子共私方へ罷越長兵衛・彦右衛門ニ追立られ働方相成兼候間、御暇被下度趣申聞候而罷帰申候、誠ニ当惑仕候付、相滝

村彦右衛門江大石沢江炭釜相立候処此度其方如何之訳ニ而釜子共追立候哉、自分之炭釜ニも無之御銅山御用炭御受負致、春中より焼取罷有申候、何れ御挨拶承度可致と掛ケ合候処、有無之挨拶も無之罷帰■候故、向林村六郎兵衛と申ものへ、右之訳御取分被下度頼入候処、急段之義ニ候得ハ取扱相成兼、五、七日も御控被成候ハ、取扱可致趣挨拶故差控罷有候得共、何れ之沙汰も無之候付、御受負炭不納相成候而ハ恐入候事故、無扨本郷箱番・長名中へ願申上、御取扱ニ相成申候

一、廿壱年已前ニ地主藤右衛門名前并ニ村方長名兩人甚五郎・正兵衛印形ニ而、相滝村へ売払候と証文有之由、右証文之印形等御吟味被成下度、乍恐奉願上候

一、右証文廿壱年已前より相滝村ニ而所持ニ候得者、拾貳ヶ年已前右林一件ニ付、本郷肝煎長左衛門殿銅山御詰合様迄御掛合被下候程之懸り合ニ、其節指出可申所ニ、其節ハ証文も無之と相見得候処、只今ニ至り買証文有之候と申、仍而御吟味被成下度段奉願上候

一、私諸繫不納仕、諸品道具・林迄郷中へ本郷江被引上候節ハ、三拾九年已前之事ニ御座候

一、地主藤右衛門売払候証文ハ拾貳ヶ年廿壱ヶ年ニ罷成り、既ニ拾年余之引違ニ御座候

一、右林実ニ売払候事なれハ、是非私之印形も取り可申と奉存候

一、拾貳ヶ年已前諸繫不納致候ニ付、被引上可申候と御尋ニ御座候得とも、拾貳ヶ年已前ニ諸繫滞り候得者、此節本郷ニ而郷人共も長名衆も差心得も有之筈ニ御座候得共、全く其節諸繫滞候等無之候、滞り有之候得者本郷へ引上ケニ相成可申、地主■被引上可申様無御座候引上ケ候而他村へ売払可申様無御座候

一、元錢江十三かけニ申候て返し呉候様相滝村六郎兵衛へ示談ニ及候義ハ、聊之義ニ付御苦柄ニ相成候も恐入奉存候故左様ニ談し候、御不審ニ預り候而ハ恐入奉存候

右之通りニ御座候間、御憐愍を以是迄之通り右林私江為御任ニ相成候様御取扱被下置度奉願上候以士

右之通ニ御座候、以上

荒瀬村

枝郷



戌八月  
八丹

土倉村  
五郎兵衛

## [史料 35]

安政4(1857)年9月「(大石沢林売買をめぐる土倉村と小様村の争論などにつき願書)」

(湊榮興家文書 51、豎帳 1)

(表紙)

「上

荒瀬村  
控」

乍恐以口上書奉願上候

枝郷

- 一、当高拾三石壺斗九升三合 土倉村  
一、家数四七軒  
一、人数四拾貳人  
一、馬数拾三疋

右之通寛文十二御本帳付御高守護之枝郷村ニ御座候、全体右村右村之荒瀬村之義者小様村沢目之内飛入高ニ御座候而先去年小沢村加郷ニ御座候所、元禄十一十一一年被仰付候者一沢之義ハ仙北郡境、殊ニ長沢目銅山禁之村居ニ候へ者肝煎被立置候段被仰渡、於村方も左様被成下度段奉申上被仰付候、■然ハ枝郷土倉村之儀ハ義ハ(ママ)小沢村向寄マ沢目之事故被仰付、小沢村右村支配ニ而罷有、其後荒瀬村へ相属候ニ付、先年より格別村境と申も無之、草飼馬放場前々より覚形を以方限相守相続罷有候所、明和元辰年両村聊之義ニ付、村境立被下度段御苦柄願申上候所、御検使神上谷藤左衛門殿御組合被為出、両村肝煎・郷人御先立仕、場所御見分ニ入置候所、其節被仰付候者、御田畑・屋敷共ニ入組之所へ方限境被差立置候儀も不相成候故、是迄之通覚形を以境相守、御苦柄相省可申、且於土倉村新屋敷・新開等致候而ハ、小様村沢目往々迷惑之趣尤之事ニ候間、以来新屋敷・新開不相成段、御ヶ条書を以被仰渡相済罷有候、然処文化十二亥年小様村より申聞候候(ママ)者、大石沢と申所下も平通小様村内馬寄場ニ候所、於於土倉村自由致候段、難心得段取合ニ御座候得共、全左様之場所ニ無御座、右沢御本帳付御田地水上ミニ而、殊ニ右沢下も平之内揚ヶ之上と申処、多分御本帳付畑地ニ御座候故、前々より右沢水落自

油致、草飼馬放場かくるみ沢峯分ニ而双方相守罷有候所、右沢下も平小様村江被引取候而ハ一村相立不申ニ付、段々懸合ニ相及候得共請引無之、土倉村之義者飛入高之事故、御高地之外悉皆此方地形ニ候得共、大石沢上平ハ土倉村江為任置候場所ニ而、下も平ハ此方内馬寄ニ相違無之趣強而申分ニ御座候故、双方立会見分之義申遣候得共、元より境とても無之事故、見分ニ不相及段申聞ニ御座候故、御苦柄恐入候得共、其節無撫御検使願申上候所、翌文化十三子秋中小野崎五兵衛殿御組合、比内扇田村御回在向江両村肝煎御才足ニ付、罷出候所被仰含候ハ、両村より願申出候馬寄場出入、両村訴状ニ肝煎・郷人立会之上申合形、猶隣郷親郷之取扱形等も相見得不申、甚タ未熟之事ニ而御検使見分形取扱ニハ不相見候、土倉村ニ而御高守護形ニ抱候儀ニ候得者、何義ニも吉田村ニ而彼是不申段申聞も有之候得ハ、土倉村飛入高之事故、地元村江何義も折合和談致候ハ、御苦柄ニ相成間敷、何レ退き兩人得と申合可申出被仰含候ニ付、其節御見分之義御取延願申上、罷帰之上郷人共申合候ハ、先年大石沢家数七、八軒も有之所、追々相潰レ当時壺軒ならて無之候得ハ、押而御苦柄ニ相成候も恐入、御検使様被仰被仰含之通和談ニ不致候而ハ往々村方為筋ニも相成間敷故、大石沢下平小様村入合ニ為相相任御苦柄相省申度、右形本郷吉田村江示談致、乍併近処手近之場所草勝手ニ被引取候而ハ土倉村迷惑致候間、不省致呉候様頼合致候所事分り候、取合筋ニ候得ハ彼是不申趣ニ而御苦柄相省内済罷有申候、然ハ右沢上平之義ハ多分木立ニ御座候故、追々取立永ノ目并ニ抜切マ薪并ニ炭釜入置、三枚銅山江売上、右余勢を以相続罷有候ニ付、去ル嘉永元酉春中大石沢五郎兵衛炭釜願申上、同沢之内滝之沢と申所焼取罷有候所、小様村枝郷相滝村長兵衛・彦右衛門兩人山所江罷越、先年買入候場所故炭釜指留候段申聞ニ付、左様之儀一向存不申段懸合ニ相及候所、去ル文政十三寅正月土倉村地主藤右衛門、長名庄兵衛・甚五郎、証文ニ御買入候段申聞ニ御座候、右証文見候所、左之通ニ御座候

林売渡証文之事

一、調銭五貫文ニ而永代売渡候所実正ニ御座候、

右林場処之義ハ、大石沢・二タ又沢之内、右ハ目当り平沢限滝之有長根境なり、いせばつ上江轉道通し候而も構無御座候、右場処之義者土倉地主・郷人取合ニ而売渡申候、依而為後日印判如件

土倉村売主

地主

文政十三年 藤 右 衛 門  
寅正月 庄 兵 衛  
相滝村 甚 五 郎  
長 兵 衛 殿  
彦 右 衛 門 殿  
長 四 郎 殿

右之通之証文ニ御座候、然ハ地主藤右衛門凶作以前病死仕、庄兵衛・甚五郎凶作之節死亡、跡式も無之、二十年以前之事ニ而村方心得候もの無御座、殊ニ天保九戌年三枚於於銅山、右場所より無至来ニ薪伐出候ニ付、支配人吉田久兵衛江懸合候所、先年牛飼料場ニ願申上御貸上ニ相成候場所故、村方ニ申断ニ不相及段申聞ニ付、其節銅山御詰合片岡慶助殿江申上、以来銅山ニ而手入致間敷被仰含罷有候、委曲之義者長兵衛・彦右衛門近所之事故心得も可有之候所、其節迎も一向申聞も無之、甚不束之義ニ御座候故勞煩仕、双方御苦柄ニ相成候所、年番小又村佐右衛門并ニ組合肝煎取扱被仰付段、御吟味之上右林買入証文有之候上ハ売渡候ニ相違無之故、元錢五貫文利息相加、正錢ニ相直ス庄（長）兵衛・彦右衛門江相返候（ママ）可申被仰付奉畏候得共、不少錢高ニ御座候得ハ迷惑形願申上、札ニ而式百貫文差出候事ニ肝煎共取扱ニ而相濟候所、小様村より申立候ハ、右林場所小様村領分ニ而土倉村ニ不預場所ニ候得共、長兵衛・彦右衛門心得違を以買入候事故、兩人より引上伐払小杉出、草飼ニ致度願申上候得とも、其節睨と御取扱ニも不相成罷有申候、然所当春より小様村ニおゐて右兩場処江炭釜入置焼出罷有候故、本郷吉田村江懸合之上組合同役立会候、与得見分仕候所、吉田村申聞候ハ、大石沢二タ又之内、右ハ大石沢、左リハ滝之沢と申字ニ而、大石沢より下モ文化年中草飼兩村入合ニ相極り居候得ハ、土倉村ニ不抱趣申聞ニ御座候、当村ニ而ハ全ク左様ニ無御座、一体大石沢之内二タ又、右ハ大

くれ之沢、左リハ滝之沢ニ御座候、右沢下も平之義者、前書申上候通文化年中兩村入合ニ相極候得共、外水落無残是迄自油罷有候所、右之申懸ニ預迷惑至極ニ奉存候、畢竟境方限も無御座、先年より覚形一と通御座候故斯勞煩仕候、土倉村之義者本郷手遠之場所、殊ニ先年家数拾軒余有之所、巳年凶作より差立候もの死亡潰レ相成、当時四七軒ならて相残り不申候得共、外ニ自油之場所迎も無之処、追々被相狭狭候而ハ立行可申よふ無御座難渋至極ニ奉存候、依之乍恐奉願上候、何卒秋廻御檢使御序場所御見分被成下、先規覚形相立、御田地守護仕候様御取扱被成下度奉御願上候

一、大石沢揚ケ之上御本帳付畑返り、天保二卯年御竿入ニ相成候所、水不足ニ付去ル西年より当高四斗二升九合休ミ高願申上、于今取開かね罷有申候、依之右沢木立之分御見分之上、水之目林ニ願奉申上度奉存候、此段宜敷御聞届被成下度奉願上候被仰付被下置度奉願上候

一、右村御本帳□□宝曆年中荒地捨り高、字相滝ニ而三拾四筆壹石九升八合、向林と申所廿三筆七斗六升九合有之候得共、数十年経候事故場所見分ケかね罷有申候、何卒以御憐愍御序御見分之上御吟味被成下度奉願上候

右段々願 [ ] 通、御苦勞乍千万宜御聞届、小郷之枝郷村御憐愍ヲ以御田地守護仕候様御助被成下度、乍恐奉願上候、以上

荒瀬村

肝煎

安政四年

長 左 衛 門

巳九月

同村

菅生兵右衛門殿

長百性

善 左 衛 門

同

長 十 郎

与 右 衛 門

伊 三 郎

土倉村

地主

東 左 衛 門

〔史料 36〕

文久 2 (1862) 年 4 月「(杉類焼原因をめぐる土倉村と小様村の口論につき願書)」

(湊榮興家文書 51、堅帳 1)

(表紙)

「  
上

」

乍恐口上書ヲ以奉願上候御事

一、当八日晚、小様村金左衛門より艸替(飼)入会之場所地焼致、家並人足指出可申とす触早速相出候所、御宮□□土倉□人足居、藤右衛門畑添之杉江火ヲ附キ、村方之人足参而見候所、小様之人足共彼所ニ立て見て居候、其内ニ杉烘て仕舞、是より田ノ沢地焼致て、けすて仕舞、藤右衛門後口へ皆両村人足共揃居候、小様村金左衛門子供吉之助・長名源治申二者、手分ケすて土倉より上ミ之人足共、是より上ミへ地焼ニ可行、此方之者者、是より下モへ[ ]なす□致て可行、塚之台行て酒ヲ吞て可居申附、上ミ下モへ地焼致行、朝、藤右衛門地焼跡へ見ルニ歩キ候所、植立杉畑添式尺廻拾五本、小木六本、田之沢五尺廻五本、四尺廻拾本、三尺廻三拾本、式尺廻より小木迄式拾本、其外植立杉之辺之小柴□□皆焼て仕舞、藤右衛門直々小様村江断ニ参候所、幸へ道中ニ源治と行合、扱又植立杉莫太焼候間、依而代り木ても為出と断候、源治申二者以之外之事ニ申候所、一両日控候得共、一兼様子無之故、地主へ五郎兵衛遣候所、金左衛門申二者、村方せんさく之上ハ返事可致と申事ニ御座候、十四日□清松と申者参候、藤右衛門留主ニ付、藤左衛門へ同人参候て申二者、杉式、三本焼外奉存知不申と有之、依而十五日ニ藤右衛門・五郎兵衛地主江参、昨日清松ヲ以、式、三本焼と被仰下候得共、式、三本而者無之、木数尺廻より小木迄八十六本焼け有之候間、此段いか□□指心得□□相分り不申、地主申二者私之村計リニ預□事ニ無之、此方申二者左様之分ケて無之、手分迄二者奥通り壺本茂焼不申、杉ニ御座候、下モへ手分之者者附駄ニ無相違と掛合仕候、然者明日右場所見分致候得者、附ケ火カあやまり火カ相分候間、見分取合致、十六日両村より立会见分致候所、私共申二者附火と申候、小様之者者□□と申候得共、左様て無之口論ニ相成、夫レ而双方へ相帰リ申候、右之通りニ御座候得者村方難相立候間、何卒御憐愍ヲ以、後々村方相立候様ニ御取扱被下置度、

宜敷様奉願上候、以上

土倉村

文久貳年

藤 右 衛 門㊤

壬戌四月

藤 左 衛 門㊤

御本郷

銀 蔵㊤

五 郎 兵 衛㊤

万 助㊤

寅 五 郎㊤

酉 松㊤

糸 松㊤

(絵図省略)

【史料 37】

慶応 2 (1866) 年正月「土倉村より差上候書載ノ写  
(土倉村、以来小様村へ相属候につき)」

(湊榮興家文書 115、堅帳 1)

土倉村より差上候書載ノ写

乍恐以口上書奉申上候

当四月中御扱様より被仰含候者、当村之義者去年より小様村沢目ニ罷有候ニ付、地境等之勞煩有之、時々御苦柄ニ相成、往々両村為メ筋ニ而も不相成候故、以来小様村へ相属候様可致、左候へ者草飼之義者双方惣入会ニ相成、林等之義も伐り取候節者、惣割ニ致候へ者勞煩等も無之事故、右々御受可致被仰付候ニ付、村方相談仕候所、去年地境等之義者、双方覚形を以相守可申被仰付候ニ付、大石沢村・土山村・土倉村共覚形を以相守罷有候へ共、追々相狹近年来肥草不足致、無処三枚銅山よりしも(下)肥取集メ耕作仕候ニ付、稻生宜敷相見得候へ共、私実取り甚之迷惑も有之、小様村へ相属候ニ付、艸飼之義者被仰付候通り惣入会ニ相成、大石沢之義者上ミ平是迄之通り木立致置、親沢より下滝之沢迄之所者、大石沢村五郎兵衛ニ三ヶー為任、三ヶ式之所惣割合ニ致、下モ平之義者馬放処ニ御座候、先年より土倉村・土山村・大石沢村共ニ家数拾七、八軒も有之候所、追々困窮仕、巳年凶作以来多分潰れニ相成、当時八軒前有之、右之内四軒郷役相勤候へとも残り四軒無役取扱、何角慈愛之取扱を得、相助罷有之、高役之義者一ヶ年壺石ニ付壺貫文ニ相定罷有候へ者、一方ならず助ニ相成罷有候、然れとも小様村ニ被纏候へ者、勞煩等も無之趣御扱様より被仰付、右之通り可奉畏奉存候、前書願之通り相属候様奉願上候

右之趣宜敷様御取扱被下置度奉願上候、以上



	土倉村
慶応二年	郷 中
寅正月	地主
吉 場 唯 八 殿	東 左 衛 門
	長 名
	東 右 衛 門
	同
	銀 蔵

本郷荒瀬村より差上候書載ノ写

乍恐以口上書奉申上候

当村枝郷土倉村之義者、小様村沢目飛入高之村居  
ニ御座候ニ付、地境度々艸飼等之勞煩仕、御苦柄  
申上候ニ付、此末小様へ相属候へ者、草飼を始山  
林等之惣入会ニ致度、双方勞煩迷惑無之様御取扱  
可被下置歟、去夏中より土倉村郷人共へ被仰含候  
ニ付、此度御受可奉申上候、依之右村願之通御取  
扱被下置度、乍恐奉願上候、以上

	荒瀬村肝煎
慶応四（ママ）年	湊長左衛門
寅正月	同見習
吉 場 唯 八 殿	湊 勇 吉
	同村長百性
	善 左 衛 門
	同
	長 十 郎
	同
	与 右 衛 門

土倉村高・御野帳左ニ

〔外ニ四斗五升貳合 卯年より引繼五ヶ年休休明  
一、当高拾貳石八斗三升五合 御藏分  
郡方分共 土倉村  
内四斗貳升九合 休ニ明高入卯年  
より五ヶ年引繼休  
一、同高八斗九合 前田村兵右衛門  
辛 勞 免 高 同 村  
合拾三石六斗四升四合也

一、寛文十二御帳壹冊	一、延宝四壹冊 <small>御本帳尻江御付紙 ニ而有之候を毎</small>
一、寛政六 壹冊	一、享和元 壹冊
一、安永三 壹冊	一、文政七 壹冊
一、天保貳 壹冊	
合七冊	

外ニ

一、卯年引繼休高書拔帳 壹冊  
但し支配村々取纏分也